

緑紅ノ二燈ヲ掲クルカ又ハ船首ヨリ各舷正横後ノ二點マテ右舷ハ綠色左舷ハ紅色ノ射光ヲ及スヘク製造シタル兩色燈一箇ヲ掲グヘシ但シ此ノ燈ハ白燈ヨリ少クモ三尺下方ニ掲グルヲ要ス

二 汽艇ハ第一項甲ノ白燈ヲ舷線上九尺ノ所ヨリ下方ニ掲グルヲ得然レトモ其ノ白燈ハ乙ノ兩色燈ヨリ高キヲ要ス

三 二十噸未満ノ帆船ハ帆ヲ用ウルト艫樞ヲ用ウルトニ拘ハラズ一面ハ綠色一面ハ紅色ノ玻璃ヲ用キタル燈籠一箇ヲ手近カニ備置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ之ヲ表示スヘシ但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅光ハ右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス

四 艫樞ヲ以テ運轉スル船ハ艫樞ヲ用ウルト帆ヲ用ウルトニ拘ハラズ白色ノ燈籠一箇ヲ手近カニ備置キ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ臨時之ヲ表示スヘシ

本條ノ諸船ハ第四條第一項及第十一條末項ノ燈ヲ掲ルニ及ハス

第八條 水先船其ノ水先區ニ於テ營業ヲ爲ストキハ他船ニ要スル燈ヲ掲グヘカラス單ニ周回ヨリ見得ヘキ白燈一箇ヲ樁頭ニ掲ケ且十五分ヲ超エザル間際ヲ以テ閃火一箇又ハ數箇ヲ發スヘシ

水先船ニハ右ノ外綠紅ノ二燈燈ヲ用意シ置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ我船ノ進行スル方向ヲ示ス爲メ一時之ヲ表示スヘシ但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅光ハ右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス

水先人ヲ要スル船舶ヘ直付ケスヘキ水先船ハ白燈ヲ樁頭ニ掲グル代リニ臨時之ヲ表示シ又燈ヲ兩舷ニ掲グル代リニ一面ハ綠色一面ハ紅色ノ玻璃ヲ用キタル燈籠一箇ヲ手近カニ備置キ

明治三十年法律第
四十三號ヲ以テ本
條ヲ削除

前項ニ從テ之ヲ使用スルヲ得

水先船其ノ水先區ニ於テ營業ヲ爲サルトキハ其ノ積量ニ應シテ他船ト同一ノ燈ヲ掲グヘシ

第九條 削除

第十條 他船ニ追越サレムトスル船舶ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ表示シ又ハ閃火ヲ發スヘシ本條ニ從テ表示スヘキ白燈ハ豫メ船尾ニ掲置クヲ得然レトモ此ノ燈ハ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノニシテ常ニ不トナキ光明ノ光ヲ發シ鐵燈ノ十二點間ヲ照スヘク製造シ船ノ正後ヨリ左右ヘ六點間宛射光ノ及フヘキ樣隔板ヲ裝置シ成ルヘク燈燈ト同一ノ高サニ掲グヘシ

第十一條 長サ百五十尺未満ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上ヨリ二十尺ヲ越エサル所ニ白燈一箇ヲ掲グヘシ此燈ハ常ニ不同ナキ光明ノ光ヲ發シ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス

長サ百五十尺以上ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上二十尺以上四十尺以下ノ所ニ前項ノ白燈一箇ヲ掲グ且船尾若ハ其ノ最寄ニ於テ前方ノ燈ヨリ少クモ十五尺下方ニ同種ノ白燈一箇ヲ掲グヘシ

本條船舶ノ長サハ本船籍證書面ノ長サニ依ルヘシ

船舶若ハ其ノ最寄ニ於テ乘揚ケタル船舶ハ本條白燈ノ外尙第四條第一項ニ規定シタル紅燈二箇ヲ掲グヘシ

第十二條 各船他船ノ注意ヲ喚起スル爲必要ナリトスルトキハ本法ニ規定シタル船燈ノ外尙閃火ヲ發シ或ハ難船信號ト混同セサル爆裂信號ヲ發スルヲ得

第十三條 本法船燈ノ規定ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラル、船舶ニ増掲スル列位燈及信號燈ニ關シ各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ノ施行ヲ妨ケス又船舶所有主ニ於テ其ノ國

政府ノ許可ヲ受ケ登簿公告ノ手續ヲ經テ私用スル識別信號ノ使用ヲ妨ケス
第十四條 汽船晝間ニ帆ノミヲ以テ運轉スルモ其ノ烟突ヲ引上ケサルトキハ前方ノ最モ見得易
キ所ニ直徑二尺ノ黒球若ハ黒色形象一箇ヲ掲グヘシ

霧中信號

第十五條 航行中ノ船舶ニ關シ本條ニ規定シタル信號ヲ爲スニハ左ノ信號器ヲ用ウヘシ
汽船ハ汽笛若ハ汽角
帆船及他船ニ引カレテ運行スル船舶ハ霧中號角

本條中長聲トハ四秒乃至六秒時間ノ發聲ヲ謂フ
汽船ハ汽力其ノ他之ニ代用スヘキモノニ因リ發聲スル適當ノ汽笛若ハ汽角ヲ音響ノ妨害物ナ

キ所ニ裝置シ且號鐘及機關ノ作用ニ因リ發聲スル適當ノ霧中號角ヲ備フヘシ又總積量二十噸
以上ノ帆船ハ汽船同様ノ號鐘及霧中號角ヲ備フヘシ
霧中降雪其ノ他暴雨中ハ晝夜ノ別ナク左ノ各項ニ規定シタル信號ヲ爲スヘシ

- 一 汽船航行中ハ二分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ
- 二 汽船航行中運轉ヲ止メテ速力ヲ有タサルトキハ二分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ長聲
ヲ二發スヘシ但シ其ノ二發間隔ハ大約一秒時タルヲ要ス
- 三 帆船航行中ハ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ
二聲ヲ連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受ケタルトキハ三聲ヲ連發スヘシ
- 四 船舶碇泊中ニ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ大約五秒時間劇シク號鐘ヲ鳴ラスヘシ
- 五 他船ヲ引キテ運航スル船舶海底電信線ノ布設若ハ引揚ニ從事スル船舶及航行中運轉自
由ヲ得スシテ近寄り來ル他船ノ航路ヲ避ケ能ハサルカ又ハ本法ニ遵テ運轉シ能ハサル

明治三十二年法律第
四十三號ヲ以テ第
五項ヲ改正シ第六
項第七項第八項及
第九項ヲ削除ス

船舶ハ本條第一項及第三項ニ規定シタル信號ノ代リニ二分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以
テ三聲ヲ連發シ即チ長聲ヲ一發シタル後直ニ短聲ヲ二發スヘシ又他船ニ引カレテ運航
スル船舶モ此ノ信號ヲ爲スハ妨ナシト雖他ノ信號ヲ爲スヘカラス
總積量二十噸未滿ノ帆船ハ必スシモ前數項ニ規定シタル信號ヲ爲スヲ要セス然レトモ其ノ信
號ヲ爲サ、ルトキハ一分時ヨリ多カラサル間隙ヲ以テ適宜他ノ音響信號ヲ爲スヘシ

霧中速力

第十六條 霧中降雪其ノ他暴雨中ハ各船現時ノ狀況ニ注意シ適度ノ速力ヲ以テ進行スヘシ汽船
其ノ正横ヨリ前面ニ方リテ他船ノ霧中信號ヲ聞キ其ノ所在ヲ定メ得サルトキハ成ルヘク機關
ノ運轉ヲ止メ全ク衝突ノ虞ナキニ至ルマテ其ノ運航ニ注意スヘシ

航 力

衝突ノ危險ハ其ノ現況ニヨリ我船ニ近寄り來ル他船ノ方位ヲ看守シテ之ヲ豫知スルヲ得若其
ノ方位儘ニ變更スルヲ認メサルトキハ危險アルモノト知ルヘシ

第十七條 二艘ノ帆船互ニ近寄りテ衝突ノ虞アルトキハ其ノ一船ヨリ左ノ如ク他船ノ航路ヲ避
クヘシ

- 一 一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ
- 二 左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ
- 三 一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受クル舷同シカラザルトキハ左舷ニ風ヲ受ケタル船ヨ
リ他船ノ航路ヲ避クヘシ
- 四 一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受クル舷同ナシキトキハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路
ヲ避クヘシ

明治三十年法律第
四十三號ヲ以テ第
二十一條ニ但書ヲ
追加ス

五 船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十八條 二艘ノ汽船正シク真向又ハ幾ント真向ニ行逢フテ衝突ノ虞アルトキハ兩船トモ鐵路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過スヘシ

本條ハ兩船止シク真向又ハ幾ント真向ニ行逢フテ衝突ノ虞アルトキニ限り適用スヘシ兩船各々其ノ鐵路ヲ保チテ互ニ替リ行クトキニハ適用スヘカラス

本條ヲ應用スヘキ場合ハ兩船共ニ正シク真向又ハ幾ント真向ニ行逢ヒタルトキ即チ晝間ニアリテハ我船ノ橋ト他船ノ橋ト一直線又ハ幾ント一直線ニ見ユルトキ夜間ニアリテハ互ニ他船ノ兩舷燈ヲ見ルトキニ限ルヘシ

本條ハ晝間他船ノ我鐵路ヲ横切りテ我船ノ前面ニ見ユルトキ又ハ夜間我船ノ紅燈他船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スルトキ又ハ我船ノ前面ニ綠燈ヲ見スシテ紅燈ヲ見或ハ紅燈ヲ見スシテ綠燈ヲ見ルトキ又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他ノ位置ニ見ルトキハ適用スヘカラス

第十九條 二艘ノ汽船互ニ航路ヲ横切り衝突ノ虞アルトキハ他船ヲ右舷ニ見ル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十條 帆船ト汽船ト互ニ近寄り衝突ノ虞アルトキハ汽船ヨリ帆船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十一條 本法航方ニ依リ二船ノ内一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クルトキハ他船ニ於テ其ノ鐵路及速力ヲ保ツヘシ

但シ他船ニ於テ天氣密濃又ハ其ノ他ノ事故ニ因リ航路ヲ避クル船ノ處置ノミニテハ衝突ヲ避ケ能ハサル程兩船接近シタルコトヲ認ムルトキハ自ラ亦臨機衝突ヲ避クルニ至當ノ處置ヲ爲スヘシ

第二十二條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ船ハ成ルヘク他船ノ前面ヲ横切ルヘカラス

第二十三條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ汽船ハ他船ニ近寄りタルトキ時宜ニ應シテ速力ヲ緩メ若ハ運轉ヲ止メ又ハ後退スヘシ

第二十四條 總テ他船ヲ追越ス船ハ本法航方中前條ノ規定ニ拘ハラス他船ノ航路ヲ避クヘシ總テ他船ノ兩舷正横後ノ二點以外即チ夜間ニアリテ舷燈ヲ見難キ位置ヨリ其ノ船ヲ追越サントスル船舶ハ之ヲ追越船ト爲シ其ノ後兩船ノ位置ニ變更ヲ來スモ其ノ追越船ヲ以テ本法ノ航路横切船ト爲サス故ニ其ノ船ハ他船ヲ全ク追越シ了ルマテ他船ノ航路ヲ避クヘキモノトス晝間他船ヲ追越サムトスル船舶ニシテ前項ニ記載シタル方位ノ内外ヲ辨知シ難キモノハ本船ヲ追越船ト看做シテ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十五條 汽船狹隘ノ水道ニ於テ無難ニ通路シ得ルトキハ其ノ中流ノ右側即チ本船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十六條 航行中ノ帆船ハ網或ハ繩ヲ用キテ漁業ニ從事スル帆船ノ航路ヲ避クヘシ但シ漁船ト雖獵ニ他船ノ通航スヘキ線路ヲ妨クヘカラス

第二十七條 本法ヲ履行スルニ當リ運航及衝突ニ關シ百般ノ危險ニ注意スルハ勿論若危險切迫シテ本法ヲ履行シ能ハサル特殊ノ場合ニ於テハ其ノ危險ヲ避クル爲臨機ノ處置ヲ爲スコトニ注意スヘシ

航路信號

第二十八條 本條中短聲トハ大約一秒時間ノ發聲ヲ謂フ

航行中ノ汽船他船ニ近寄り鐵路ヲ變セムトスルトキハ汽笛若ハ汽角ヲ以テ左ノ信號ヲ爲シ他船ニ我船ノ鐵路ヲ通知スヘシ

短聲一發 我船鐵路ヲ右舷ニ取ル
短聲二發 我船鐵路ヲ左舷ニ取ル
短聲三發 我船全速力ニテ後退ス

懈怠ノ責

第二十九條 本法ハ點燈、信號又ハ見張ノ怠リ其ノ他海員ノ常務又ハ臨機ノ處置ニ必要ナル注意ノ怠リヨリ生シタル結果ニ付船、船主、船長、海員ヲシテ其ノ責ヲ免レシメサルモノトス

特例

第三十條 本法ハ地方長官ニ於テ規定シタル港、川其ノ他内海ノ運航ニ關スル特別規則ノ施行ヲ妨ケス

難船信號

第三十一條 危難ニ罹リテ他船又ハ陸地ヨリ救助ヲ要スル船舶ハ左ノ信號ヲ同時又ハ別々ニ使用スヘシ

晝間信號

- 一 大約一分時ノ間隙ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆裂發火信號ヲ一發ス
 - 二 萬國船舶信號書ニ掲載スルNCノ難船信號ヲ表示ス
 - 三 方形旗ノ上又ハ下ニ球若ハ之ニ類似ノモノヲ掲グル遠隔信號ヲ表示ス
 - 四 霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス
- 夜間信號
- 一 大約一分時ノ間隙ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆裂發火信號ヲ一發ス
 - 二 船上ノ發焰(タル桶、油燈等ヲ燃焼スルノ類)

明治三十年法律第四十三號ヲ以テ晝間信號第一項ヲ改正シ第四項ヲ削除シテ第五項ヲ第四項ニ繰上ケ夜間信號第一項第三項ヲ改正ス

- 三 星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭ヲ一次一發ツ、度々打揚ク
- 四 霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス

附則

第三十二條 本法中船舶積量噸數ニ關シ日本形船ハ十石ヲ以テ一噸ニ通算ス

第三十三條 本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

第三十四條 明治十三年七月第三十五號布告海上衝突豫防規則同十四年五月第三十三號布告同規則追加同十八年八月第二十七號布告同規則改正追加ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

○海員試驗規程(明治三十年五月二十四日逕信省令第七號)

海員試驗規程左ノ通定ス

海員試驗規程

第一章 總則

第一條 海員試驗ハ左ノ十二種トス

- 甲種船長試驗
- 甲種一等運轉士試驗
- 甲種二等運轉士試驗
- 乙種船長試驗
- 乙種一等運轉士試驗
- 乙種二等運轉士試驗
- 丙種船長試驗
- 丙種運轉士試驗

機關長試驗

- 一 等機關士試驗
- 二 等機關士試驗
- 三 等機關士試驗

第二條 海員試驗ハ遞信大臣ノ定ムル場所及期日ニ於テ之ヲ執行ス

遞信大臣ニ於テ前項ノ定日外ニ臨時試驗ヲ執行スルノ必要アリト認ムルトキハ別ニ其ノ場所及期日ヲ定ム

第二章 受驗履歷

第三條 年齡二十年以上ニシテ左ニ掲クル履歷ノ一ヲ有スル者ハ海員試驗ヲ受クルコトヲ得

甲種船長試驗

- 一 甲種一等運轉士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乗組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト
- 一 乙種船長若ハ丙種船長ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乗組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

甲種一等運轉士試驗

- 一 甲種二等運轉士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乗組ミ二等運轉士ノ職ヲ執リタルコト

甲種二等運轉士試驗

- 一 四年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋船ノ運航ニ從事シ其ノ内一年以上ハ横帆裝置ノ帆船
- 一 一年以上ハ汽船ニ乗組ミタルコト

一 遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋船ノ運航ニ從事シ其ノ内一年以上ハ横帆裝置ノ帆船、又六月以上ハ汽船ニ乗組ミタルコト

乙種船長試驗

- 一 乙種一等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト
- 一 乙種一等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト
- 一 水先人免狀ヲ受有シ三年以上其ノ營業ヲ爲シタルコト

乙種一等運轉士試驗

- 一 四年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ノ運航ニ從事シタルコト
- 一 乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ運轉士ノ名義ヲ以テ其ノ運航ニ從事シタルコト
- 一 乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

一 遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ノ運航ニ從事シタルコト

乙種二等運轉士試驗

- 一 三年以上汽船ノ運航ニ從事シタルコト
- 一 遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上二年以上汽船ノ運航ニ從事シタルコト

ルコト

丙種船長試験

- 一 丙種運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上若ハ積石數一千石以上ノ航洋帆船ニ乗組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト
- 一 丙種運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上若ハ積石數五百石以上ノ航洋帆船ニ乗組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト
- 一 水先人免狀ヲ受有シ三年以上其ノ營業ヲ爲シタルコト

丙種運轉士試験

- 一 四年以上航洋帆船ノ運航ニ従事シタルコト
- 一 遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上航洋帆船ノ運航ニ従事シタルコト

機關長試験

- 一 一等機關士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ一等機關士ノ職ヲ執リタルコト
- 一 一等機關士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト
- 一 一等機關士試験
- 一 四年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト
- 一 二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト

- 一 二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ一等機關士ノ職ヲ執リタルコト
- 一 二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ二等機關士ノ名義ヲ以テ機關ノ運轉ニ従事シタルコト
- 一 遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場若ハ學校ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ従事シタル上一年六月以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト

二等機關士試験

- 一 四年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト
- 一 三等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ汽船ニ乗組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト
- 一 遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ従事シタル上一年六月以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト

三等機關士試験

- 一 三年以上汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト
- 一 遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ従事シタル上一年以上汽船ニ乗組ミ機關ノ運轉ニ従事シタルコト

第四條 甲種一等運轉士若ハ甲種二等運轉士ノ免狀ヲ以テ乙種一等運轉士ノ免狀ニ代用シ其ノ職ヲ執リタル者ハ乙種船長試験又丙種運轉士ノ免狀ニ代用シ其ノ職ヲ執リタル者ハ丙種船長試験ヲ受クルコトヲ得但シ其ノ執職期間ハ第三條ノ規定ニ依ルヘシ

甲種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ登簿噸數五百噸以上ノ航洋船ニ乗組ミ三等運轉士ノ名義ヲ以テ其ノ職ヲ執リタル者又ハ一等機關士ノ免狀ヲ受有シ登簿噸數五百噸以上ノ航洋船ニ乗組ミ二等機關士ノ名義ヲ以テ其ノ職ヲ執リタル者ハ其ノ執職日數ノ半數ヲ以テ各免狀相當ノ職ヲ執リタル履歷ト見做スコトヲ得

第五條 前數條ニ於テ航洋船ト稱スルハ沿海航船以上ノ船舶、航洋汽船ト稱スルハ沿海航船以上ノ汽船ヲ謂フ

第六條 第三條中乙種船長試驗第一號及第二號ニ掲グル職務ハ其ノ執職期間ヲ通算シテ一年ニ滿ツルトキハ履歷タル効力ヲ有ス乙種一等運轉士試驗第二號及第三號、丙種船長試驗第一號及第二號、機關士試驗第一號及第二號、一等機關士試驗第二號、第三號及第四號ニ掲グル職務ニ關シテモ亦同シ

第七條 左ニ掲グルモノハ第三條、第四條ニ規定シタル履歷タル効力ヲ有セス
一 繫留船ニ乗組ミタルモノ
二 年齡滿十五年前ニ係ルモノ
三 明治十二年八月前ニ係ルモノ

第三章 受験申請
第八條 海員試驗ヲ受ケントスル者ハ試驗期日七日前(休暇日ヲ算入セス)迄ニ其ノ履歷書、身分書及海技免狀受有者ニ在テハ海技免狀ノ寫ヲ添テ受験申請書ヲ船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ニ差出スヘシ

臨時試驗ヲ受ケントスル者ハ試驗期日三日前(休暇日ヲ算入セス)迄ニ前項ノ手續ヲ爲スヘシ
第九條 履歷ハ左ニ掲グル書類ヲ以テ之ヲ證明スヘシ

一 商船ニ乗組ミタル履歷 當該官吏公吏ノ證明書

二 海軍艦船艇其ノ他官廳所屬船ニ乗組ミタル履歷 當該官廳若ハ艦船艇ノ辭令書若ハ證明書

三 學校若ハ工場ニ在リタル履歷 當該學校若ハ工場ノ卒業證書若ハ證明書

第十條 身分書ニハ左ノ事項ヲ記載シ本籍市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受クヘシ
一 原籍地、身分及氏名
二 生年月日

三 船舶職員法第六條第一號及第二號ニ掲グル事項ニ該當セザルコト
第十一條 受験申請者ハ體格檢査ニ付テハ貳拾錢、學術試驗ニ付テハ其ノ試驗ノ種類ニ從ヒ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

- 甲種船長 五圓
- 甲種一等運轉士 參圓
- 甲種二等運轉士 貳圓
- 乙種船長 參圓
- 乙種一等運轉士 貳圓
- 乙種二等運轉士 壹圓
- 丙種船長 參圓
- 丙種運轉士 壹圓
- 機關長 五圓

一等機關士
二等機關士
三等機關士

參圓
貳圓
壹圓

第十二條 體格検査手数料ハ受験申請書ト與ニ納メ學術試験手数料ハ學術試験開始ニ先チテ納ムヘシ

第十三條 既納手数料ハ事故ノ如何ヲ問ハス之ヲ還付セス

第四章 試験

第十四條 海員試験ハ體格検査及學術試験トス體格検査ニ合格シタル者ニアラサレハ學術試験ヲ受クルコトヲ得ス但シ體格検査ニ合格シ學術試験ニ合格セサル者體格検査ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ於テ試験ヲ受ケントスルトキハ試験官吏ノ見込ニ依リ體格検査ヲ省略スルコトアルヘシ

學術試験ハ分チテ筆記試験及口述試験トス但シ乙種二等運轉士試験、丙種運轉士試験及三等機關士試験ニハ筆記試験ヲ行ハス

筆記試験ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス
學術試験ハ別記ノ科目ニ依リ之ヲ行フ

第十五條 筆記試験ニ於テ答ヲ爲スノ時限ハ試験官吏之ヲ定ム

口述試験ハ受験人一人毎ニ試問シテ即時答ヲ爲サシム

第十六條 試験官吏ニ於テ受験人ノ履歴若ハ身分ニ詐欺錯誤アルコト又ハ受験ノ資格ナキコトヲ發見スルトキ若ハ船舶司檢所ノ定メタル受験人心得ニ違反シタルコトヲ認ムルトキハ何時ニテモ其ノ試験ヲ停止スルコトヲ得

第十七條 試験官吏ニ於テ受験人第十六條ノ處分ヲ受クヘキ行爲アリタルコトヲ試験終了後ニ發見スルトキハ其ノ試験ヲ無効トスヘシ

第十八條 受験人左ニ掲クル場合ニ於テハ其ノ試験ハ成立セサルモノトス

- 一 定期ノ日時ニ出場セザルトキ
- 二 試験ヲ了ラスシテ退場シタルトキ
- 三 第十五條ノ時限内ニ答ヲ爲サ、ルトキ
- 四 第十六條ノ處分ヲ受ケタルトキ

第十九條 受験人試験ニ合格シタルトキハ附録書式ノ合格證書ヲ付與ス

第二十條 合格證書ヲ付與シタル後試験官吏ニ於テ合格者第十六條ノ處分ヲ受クヘキ所爲アリタルコトヲ發見スルトキハ該合格證書ヲ無効トスヘシ

前項ノ場合ニ於テハ當該船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ハ之ヲ官報ニ公告スヘシ

第五章 試験停止

第二十一條 體格検査ニ合格セサル者ハ受験ノ日ヨリ三箇月ヲ經過スルニアラサレハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十二條 同種免狀ニ對スル筆記試験ニ合格セサルコト若ハ筆記試験成立セサルコト三箇月間ニ於テ二回ニ及ヒタル者ハ最後受験ノ日ヨリ三箇月ヲ經過スルニアラサレハ下等免狀ニ對スルノ外試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十三條 同種免狀ニ對スル口述試験ニ合格セサルコト若ハ口述試験成立セサルコト二回ニ及ヒタル者ハ最後受験ノ後三箇月間實地運航ニ從事シタル履歴ヲ有スルニアラサレハ下等免狀ニ對スルノ外試験ヲ受クルコトヲ得ス

前項ノ履歷ニ關シテハ第三條、第七條及第九條ノ規定ヲ適用ス
附則

第二十四條 此ノ規程ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第二十五條 明治二十六年遞信省令第十五號明治二十九年遞信省令第十號及明治三十年遞信省令第三號ハ此ノ規程施行ノ日ヨリ廢止ス

(別記)

試驗科目

甲種船長試驗

(甲種一等運轉士試驗及甲種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ)

筆記

- 一 星象高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 二 太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 三 經度及太陽高度ニ據リ時辰儀ノ違差ヲ知ル算法
- 四 「ナビール」自差表調製及用法
口述
- 一 羅針違差ノ解明
- 二 原基羅針据附及矯正ノ方法
- 三 船難ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法

- 四 颶風ノ解明及避難法
- 五 船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
- 六 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

甲種一等運轉士試驗

(甲種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ)

筆記

- 一 太陽方位角ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
- 二 子午線ニ近キ太陽高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 三 「サムナー」法ニ據リ船舶所在ノ位置及太陽ノ方位角ヲ知ル算法
- 四 潮時ノ算法
口述

- 一 六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
- 二 下橋建設其ノ他圓材ノ取扱
- 三 錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
- 四 船舶荒天運用ノ方法
- 五 航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處置
- 六 汽船ノ暗車作用
- 七 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

甲種二等運轉士試驗

筆記

- 一 航海運用ニ關スル用語ノ解明
- 二 航海日誌ノ記載
- 三 分數及比例算法
- 四 航海日誌ノ算法
- 五 緯線航行算法
- 六 「アークトール」法又ハ中分緯度法ニ據リ經緯度若ハ針路航程ヲ知ル算法
- 七 太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 八 太陽出沒方位ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル

海員

算法

- 九 時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知ル算法
- 十 羅針自差ノ算法
- 十一 海圖ノ應用
口述

口述

- 一 船具ノ取附及取脫
- 二 桅檣及帆架ノ揚降
- 三 帆ノ取扱
- 四 船舶常時運轉及碇泊ノ方法
- 五 測程具及測深具ノ解明並用法
- 六 貨物積載法
- 七 海上衝突豫防法
- 八 萬國ノ信號法
- 九 羅針自差ノ測定方法
- 十 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

乙種船長試驗

(乙種一等運轉士試驗及乙種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ)

筆記

- 一 太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 二 太陽ノ出沒方位又ハ方位用ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
- 三 時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知り又ハ太陽高度及經度ニ據リ時辰儀ノ違差ヲ知ル算法
- 口述
- 一 六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
- 二 羅針違差ノ解明
- 三 瀕船ノ暗車作用
- 四 瀕船荒天運用ノ方法
- 五 錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
- 六 航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處置
- 七 船難ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
- 八 船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
- 九 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試験官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 乙種一等運轉士試験

(乙種二等運轉士試験ノ科目ヲ合セ)

筆記

- 一 航海日誌ノ記載
- 二 加減乗除應用算法
- 三 航海日誌ノ算法
- 四 羅針自差ノ算法
- 五 海圖ノ應用
- 口述
- 一 帆ノ取扱
- 二 海上衝突豫防法
- 三 萬國信號法
- 四 羅針自差ノ測定方法
- 五 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試験官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 乙種二等運轉士試験
- 口述
- 一 羅針儀ノ解明及用法
- 二 測程具、測深具ノ解明及用法
- 三 瀕船運轉及碇泊ノ方法
- 四 船舶衝突豫防ノ方法

- 五 船舶信號法ノ大要
- 六 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試験官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 丙種船長試験
- (丙種運轉士試験ノ科目ヲ合セ)
- 筆記
- 一 航海日誌ノ算法
- 二 太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
- 三 太陽ノ出沒方位又ハ方位用ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
- 四 時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知り又ハ太陽高度及經度ニ據リ時辰儀ノ違差ヲ知ル算法
- 五 羅針自差ノ算法
- 口述
- 一 六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
- 二 羅針違差ノ解明及測定方法
- 三 帆船荒天運用ノ方法
- 四 錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
- 五 航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處

- 六 船難ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
- 七 船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
- 八 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試験官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 丙種運轉士試験
- 口述
- 一 羅針儀ノ解明及用法
- 二 海圖ノ應用
- 三 測程具、測深具ノ解明及用法
- 四 帆ノ取扱
- 五 帆船運轉及碇泊ノ方法
- 六 海上衝突豫防法
- 七 船舶信號法ノ大要
- 八 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試験官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 機關長試験
- (一等機關士試験、二等機關士試験及三等機關士試験ノ科目ヲ合セ)
- 筆記

一 重量、炭費、燭火面、速力、楫杆安全
辨、唧筒馬力等ニ關スル算法

口述

- 一 機汽汽鐘各部組成ノ理解
 - 二 各種ノ汽機汽鐘構造及利害ノ解明
 - 三 汽機各部ノ働力方向ノ解明
 - 四 各種滑瓣、働瓣機及進推器ノ解明
 - 五 車軸、螺旋軸、滑瓣等ノ裝置及其位置ノ改正
 - 六 馬力ノ解明
 - 七 汽機汽鐘ニ屬スル諸器製造ノ理解
 - 八 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 二等機關士試驗
- 筆記
- 一 機關室日誌ノ記載
 - 二 分數、比例及面體求積ノ算法
- 口述
- 一 汽機汽鐘組成ノ大要

一 汽機強力、汽鐘強力、螺旋螺距、煙突
溫度、蒸氣膨脹、蒸氣切斷、水壓力、
開平式、流力圖等ニ關スル算法

二 汽機汽鐘局部ノ製圖

口述

- 一 熱及汽機汽鐘ニ於ケル熱ノ效力及害
 - 二 汽機汽鐘各部ニ要スル諸強力ノ解明
 - 三 汽機汽鐘材料ノ解明
 - 四 汽機各部ノ摩擦力及實馬力ト推進力トノ關係
 - 五 蒸氣及其ノ膨脹力使用ニ基キ各種汽機比較ノ大要
 - 六 流力器又流力圖ノ解明
 - 七 汽機汽鐘ノ要部及炭量水量等ノ割合
 - 八 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
- 一等機關士試驗
- (二等機關士試驗及三等機關士試驗ノ科目ヲ合セ)
- 筆記

二 汽機ノ毀損シ易キ部分及之ニ對スル注意

三 汽鐘ニ腐蝕燒損其ノ他毀損ヲ來タスノ原因及其ノ豫防方法

四 運轉中汽機汽鐘ニ要スル注意

五 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

三等機關士試驗

口述

- 一 汽機汽鐘検査ノ方法
- 二 汽機汽鐘各部ノ效用
- 三 汽機汽鐘ニ屬スル諸器ノ效用及用法
- 四 汽機汽鐘ノ取扱及運轉方法
- 五 汽機汽鐘ノ損所ヲ修繕スル方法
- 六 運轉中汽機汽鐘ニ不慮ノ危害ヲ生シタルトキノ處置

七 前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

附錄書式(檢七寸七分
檢一尺八分)

合格證書
道府縣華士族平民
氏名
生年月日
右者海員試驗規程ニ依リ
(試驗種類)ヲ受ケ合格ス依
テ此ノ證書ヲ付與ス
明治 年 月 日
船舶司檢所長(船長) 名 印
船舶司檢所支所長 名 印

(遞信省令第七號參照)

明治二十六年(八月八日)遞信省令第十五號ハ西洋形船舶長運轉手續關手續試驗規程、同二十九年(六月十二日)遞信省令第十號及同三十年(三月三十一日)遞信省令第三號ハ同規程中改正ノ件ナリ

○海員試驗執行ノ場所及期日ノ件(明治三十年六月十八日
遞信省告示第百五十五號)

二百四
海員試験ハ左ニ掲クル場所ニ於テ之ヲ執行ス但シ外國人ニ係ル試験ハ東京船舶司檢所ニ於テノ
ミ之ヲ執行ス

東京船舶司檢所

東京船舶司檢所鳥羽支所

大阪船舶司檢所境支所

長崎船舶司檢所

東京船舶司檢所新潟支所

大阪船舶司檢所

大阪船舶司檢所赤間關支所

函館船舶司檢所

海員試験執行ノ期日ハ毎月第一水曜日トス但シ當日休曜日ナルトキハ順次之ヲ延期ス

○船舶司檢所支所試験種類明治卅一年六月十三日
逓信省告示第百五十五號

東京船舶司檢所新潟支所同鳥羽支所大阪船舶司檢所境支所及同赤間關支所ニ於テ執行スル海員

試験ハ本年八月以降左ノ三種ニ限ル

乙種二等運轉士 丙種運轉士 二等運轉士

○海技免狀取扱規則明治三十年五月二十四日
逓信省令第八號

海技免狀取扱規則左ノ通改正ス

海技免狀取扱規則

第一條 海員試験規程ニ依リ合格證書ヲ得タル者海技免狀ヲ受ケントスルトキハ第一號書式ノ

申請書ニ合格證書ノ寫ヲ添テ試験ヲ受ケタル船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ之ヲ

逓信省ニ差出スヘシ

第二條 船舶職員法第五條第二項ニ依リ海技免狀ヲ受ケントスルトキハ海軍艦船艇ニ乗組ミ運

航若ハ機關運轉ニ從事シタル者ニ在テハ最後任官ノ辭令書、履歷書、身分書、商船學校全科

卒業生ニ在テハ其ノ卒業證書、履歷書及身分書ヲ添テ第二號書式ノ申請書ヲ體格檢査ヲ受ケ

タル船舶司檢所若ハ船舶檢査支所ヲ經由シテ逓信省ニ差出スヘシ

前項ノ身分書ニ關シテハ海員試験規程第十條ノ規定ニ依リ海技免狀受有後ノ履歷ニ關シテハ

海員試験規程第九條ノ規定ニ依ルヘシ

第三條 逓信省ニ於テ第一條若ハ第二條ノ申請書ヲ受ケ海技免狀ヲ授與スヘキモノト認ムルト

キハ左ノ事項ヲ海員名簿ニ登錄シ第三號書式ノ海技免狀ヲ授與スヘシ

一 海技免狀ノ番號

二 海技免狀ノ種類

三 氏名

四 族籍(道府縣華土族平民)

五 原籍地

六 生年月日

七 試験地名

八 合格年月日

九 登錄年月日

第四條 當該官吏若ハ公吏ニ於テ海技免狀ノ檢閱ヲ要スルトキハ海技免狀受有者ハ直ニ之ヲ提

供スヘシ

第五條 氏名若ハ族籍ヲ變更シ又ハ生年月日ニ誤謬アルコトヲ發見シタルトキハ原籍市區町村

長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受ケ二箇月以内ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶

司檢所支所ヲ經由シテ逓信省ニ登錄ノ變更並海技免狀ノ書換ヲ申請スヘシ

原籍地ヲ變更スルモ族籍ニ異動ヲ生セサルトキハ當該市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事

ノ證明ヲ受ケ二箇月以内ニ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ遞信省ニ届出ツヘシ

第六條 海技免狀ヲ亡失若ハ毀損シタルトキハ二箇月以内ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ其ノ再授ヲ遞信省ニ申請スヘシ

第七條 左ニ掲グル海技免狀ハ無効トス

- 一 船舶職員法第六條第一號乃至第三號ニ掲グル事項ニ該當シタル者ノ受有スル免狀
- 二 高等免狀ヲ授與セラレタル者ノ受有セシ下等免狀
- 三 書換若ハ再授ニ依リ免狀ヲ授與セラレタル者ノ受有セシ當該免狀
- 四 廢業、失踪若ハ死亡シタル者ノ免狀
- 五 無効ノ合格證書ニ依テ授與セラレタル免狀

前項ノ場合ニ於テ遞信省ハ直ニ海技免狀ノ無効タルコトヲ官報ニ公告スヘシ

第八條 海技免狀無効ト爲リタルトキハ本人ニ於テ三十日以内ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ該免狀ヲ遞信省ニ返納スヘシ

第九條 遞信省ハ登録事項ニ變更アリタルトキハ之ヲ訂正シ又海技免狀無効トナリタルトキハ

第七條第三號ノ場合ヲ除クノ外其ノ登録ヲ削除スヘシ

第十條 第一條若ハ第二條ニ依リ登録ヲ申請シ若ハ第五條ニ依リ登録ノ變更ヲ申請スル者ハ申請書ト與ニ登録稅法第九條ニ從ヒ相當ノ登記印紙ヲ貼用シタル登録稅上納書ヲ差出スヘシ

貼用シタル印紙ニハ上納書ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニ掛ケ署名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ消却スヘシ

第十一條 第六條ニ依リ海技免狀ノ再授ヲ申請スル者ハ手数料壹圓ヲ納ムヘシ
第十二條 第四條、第五條、第六條若ハ第八條ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十三條 此ノ規則ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第十四條 此ノ規則施行以前ニ於テ第五條、第六條若ハ第八條ニ掲グル場合ニ該當シタル者ニシテ未タ其ノ手續ヲ了ラサルトキハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三十日以内ニ其ノ手續ヲ爲スヘシ
本條ニ違背シタル者ニハ第十二條ノ罰則ヲ適用ス

(第一號書式)

海技免狀授與申請書
私儀 所ニ於テ 試驗ニ合格仕
候ニ付海員名簿ニ登録ノ上海技免狀授與相成度別紙合格證書寫
相添此段申請候也
明治 年 月 日
原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民 氏名 印
(氏名ハ假名ニテ傍訓スヘシ)

遞信大臣宛

(第二號書式) 海技免狀授與申請書
私儀別紙履歷書之通ニ有之候間船舶職員法第五條第二項ニ依リ
海員名簿ニ登録ノ上 免狀授與相成度規ノ書類相
添此段申請候也
明治 年 月 日

(第三號書式)

遞信大臣宛

原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民 氏名 印
(氏名ハ假名ニテ傍訓スヘシ)

第 號
道府縣華士族平民 氏名 印
生年月日
明治 年 月 日
登録年月日
十八號船舶職員法ニ依
リ之ヲ授與ス
明治 年 月 日
遞信大臣 爵 氏名 印

海技免狀ノ寸
法一尺九寸横
一尺二寸トス
甲種一等河轉士
甲種二等河轉士
乙種一等河轉士
乙種二等河轉士
丙種一等河轉士
丙種二等河轉士
丁種一等河轉士
丁種二等河轉士
戊種一等河轉士
戊種二等河轉士
己種一等河轉士
己種二等河轉士
庚種一等河轉士
庚種二等河轉士
辛種一等河轉士
辛種二等河轉士
壬種一等河轉士
壬種二等河轉士
癸種一等河轉士
癸種二等河轉士
甲種一等河轉士
甲種二等河轉士
乙種一等河轉士
乙種二等河轉士
丙種一等河轉士
丙種二等河轉士
丁種一等河轉士
丁種二等河轉士
戊種一等河轉士
戊種二等河轉士
己種一等河轉士
己種二等河轉士
庚種一等河轉士
庚種二等河轉士
辛種一等河轉士
辛種二等河轉士
壬種一等河轉士
壬種二等河轉士
癸種一等河轉士
癸種二等河轉士

(遞信省令第八號參照)

法律第二十七號登錄法(明治二十九年三月二十八日官報)抄録

第九條 左ノ事項ヲ官簿ニ登錄スルトキハ海員ハ左ノ區別ニ從ヒ登録税ヲ納ムヘシ

一 新規登録		
甲種船長	金拾五圓	乙種一等運轉手
甲種一等運轉手	金拾圓	乙種二等運轉手
甲種二等運轉手	金六圓	乙種一等機關手
甲種一等機關手	金拾五圓	乙種二等機關手
甲種二等機關手	金拾圓	小形船機關手
乙種船長	金拾圓	水先人
		二 登録事項ノ變更
		乙種一等運轉手
		乙種二等運轉手
		乙種一等機關手
		乙種二等機關手
		小形船機關手
		水先人
		每一件金五拾錢

○西洋形船海員雇入雇止規則(明治二十二年二月十九日)

西洋船海員雇入雇止規則別冊ノ通相定來ル八月十六日施行候條此旨布告候事

西洋形船海員雇入雇止規則

- 第一條 西洋形船(蒸氣船ハ拾噸以上風帆船ハ貳拾噸以上)ニ於テ海員ヲ雇入又ハ雇止ヲ爲スルハ總テ此規則ノ條款ニ準據スヘシ
- 第二條 雇入ノ時ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇入證書用紙ヲ以テ其定約書ヲ作り雇者被雇者記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受クヘシ
- 第三條 内海回漕船ニ於テハ雇入期限ヲ六ヶ月以内ト定ム然レモ外國航船ニ於テハ六ヶ月以外ヲ約スルヲ得ヘシ
- 第四條 雇止ノ時雇者ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇止證書用紙ヲ以テ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受ケ之ヲ其被雇者ニ付與スヘシ

十三年第十號布告
ナリテ南船ノ文字
ナリテ西洋形船ト
改ム以下倣之

十四年第四十三號
布告ヲ以テ內務省
ヲ農商務省ト改ム
十九年勅令第二號
ニ依リ海員事務選
信省ニ歸ス以下倣
之

十六年十二月第四
十五號布告ヲ以テ
本項以下二項ヲ特
加ス

雇入又ハ雇止ノトキハ技術免狀ヲ所持スル者ハ浦役人ノ検査ニ供シ且其検査證書ヲ申請シ
雇入又ハ雇止ノ公認ヲ受クルトキハ手数料トシテ被雇者給金一ヶ月分ノ百分一ニ當ル金額ヲ
雇者被雇者ヨリ各々其半額ツ、浦役場ニ納ムヘシ

雇入約定書及雇止證書ヲ亡失毀損シ其寫ヲ請フ者ハ二名以上ノ保證人ト連署シテ當初公認ヲ
受ケタル浦役場ニ申出ツヘシ浦役人ハ簿冊ニ之ヲ製シ認印ヲ捺シテ交付スヘシ

第五條 雇止ハ雇入地ニ限り行フヘシ故ニ雇入地外ニ於テ滿期ニ至ルモ雇入地ニ歸者スル迄ハ
雇入期限内ト見做スヲ得ヘシ

但雇者被雇者双方ノ同意ヲ以テスルモノハ本條ノ限りニアラス

第六條 左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ラス雇者ヨリ雇止ヲ爲スヲ得ヘシ

- 一 疾病又ハ體質衰弱ノ故ヲ以テ本務ヲ執行シ能ハサル者
- 一 本船難破其他ノ災厄ニ罹リ進航シ能ハサル時

但以上二項ノ場合ニ於テハ雇者ノ費用ヲ以テ雇入地へ歸還セシムヘシ

- 一 第十條ニ掲クル違約一ヶ月内三回以上ニ至ル者
- 一 第十一條ヲ犯ス者

第七條 又左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ラス被雇者ヨリ其定約ヲ解クヲ得ヘシ

- 一 苛虐ノ取扱ヲ受ケシ時
- 一 飲食物又ハ給金ノ全額或ハ幾分ヲ給與セラレサル時

但右ノ場合ニ於テハ雇入地へ歸着ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ

第八條 外國ニ於テ雇入若クハ雇止ヲ爲スルハ其國駐留ノ我國領事館ニ於テ農商務省ヨリ發スル用紙ヲ以テ定約書若ハ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上領事ノ公認ヲ受クヘシ

但定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本船ニ保子置キ副書ハ領事館ニ止メ置クヘシ
第九條 新タニ海員トナル者及ヒ此規則施行以前雇止メトナリシ者ヲ除クノ外被雇者ハ必ス最後ノ雇止證書ヲ所持スヘシ又雇者ハ最後ノ雇止證書ヲ所持セサル者ヲ雇入ス可ラス

第十條 船長ノ指圖ニ背ク者許可ヲ得スシテ上陸シ又ハ許可ノ時限ヲ過キテ歸船スル者(第十條ノ脱船者ニアラス)本務ヲ怠ル者喧嘩口論ヲナス者酩酊スル者私ニ銃器刀槍或ハ酒類ヲ船中ニ貯フ者ハ毎回其給金三日分ヨリ多カラサル額ヲ違約金トシテ雇主之レヲ收メ且其銃器刀槍或ハ酒類ヲ取上ルヲ得ヘシ

第十一條 船中ニ於テ徒黨ヲ謀ル者船長ヲ劫ス者脱船スル者(雇入期限内ニ逃亡スル者ヲ云フ)ハ其事情ニ因リ百日内ノ懲役ニ處ス若シ船體船具ヲ毀傷シ又ハ載貨ヲ私用スル者ハ其實價ヲ償ハシムルノ外本條ニ依テ其罪ヲ科スヘシ

第十二條 海員ヲ虐使シ飲食物或ハ給金ノ全額又ハ幾分ヲ給與セサル者ハ其事情ニ因リ百圓以内ノ罰金ヲ科シ其給與セサル金額ハ年六分ノ利子ヲ加ヘ償還セシムヘシ

第十三條 此規則中第十條第十一條第十二條ヲ除キ其他ノ諸條款ヲ犯ス者ハ其事情ニ因リ五拾圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

○在臺灣西洋形船航行届出ノ件 明治卅一年十月十四日 臺灣總督府令第九十九號
内地ノ船籍ニ屬スル西洋形船ニシテ臺灣沿岸ヲ航行シ又ハ臺灣ヲ起點トナシ外國ニ航行スルモノ届出ノ件左ノ通相定ム

第一條 内地ノ船籍ニ屬スル西洋形船ニシテ臺灣沿岸ヲ航行シ又ハ臺灣ヲ起點トナシ外國ニ航

行スルモノ左記ノ事項ニ該當スルトキハ其都度臺灣ニ於ケル本船根據地ヲ管轄スル地方官廳ヲ經テ臺灣總督府ニ届出ツヘシ但臺灣總督ノ命令ニ依リ航行スルモノハ此限ニアラス

一 初テ航海ヲ開始スルトキハ航路及發着定日(發着定日ナキモノハ一箇月間ノ航海日數ヲ見積リ)ヲ記シ之ニ本船受有ノ登簿船免狀ノ寫ヲ添付スルコト

二 航路若ハ發着定日ヲ變更シタルトキハ其事項
三 航路ヲ廢止シタルトキハ其事由

第二條 第一條ノ規定ニ違背シタル者ハ其船長ヲ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

○海難等届出ニ關スル件 明治三十年六月二十六日 逕信省令第十九號
海難其ノ他事實届出ノ件左ノ通定ム

第一條 海技免狀ヲ受有スル者其ノ職務ヲ行フニ當リ左ニ掲グル事項ニ該當シタルトキハ當該船長、船長不在ナルトキハ代理人ニ於テ其ノ地若ハ爾後始メテ到着シタル地ノ船舶司檢所、同支所、警察署、警察分署、市町村役場若ハ浦役場外國ニ在テハ領事館若ハ貿易事務館ニ其ノ旨ヲ届出ツヘシ

一 其ノ船舶ヲ放棄シタルトキ
二 自他ノ船舶ヲ問ハス之ニ損害ヲ加ヘ若ハ之ヲ沈没セシメタルトキ
三 人ヲ殺傷シタルトキ

四 海難ニ罹リタル船舶アルコトヲ認メタルトキ
五 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
六 亂醉粗暴其ノ他ノ失行アリタルトキ

第二條 第一條各號ノ事項ニ該當スル事實アリタルコトヲ認知シ若ハ其ノ事實アリト思料シタ

ル者ハ其ノ所在地ニ於テ第一條ニ掲グル官廳若ハ公署ニ其ノ旨ヲ届出ツヘシ
第三條 第一條ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第四條 本令ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第五條 明治二十六年遞信省令第五號海難取調手續、明治二十八年遞信省令第一號外國航海中海難届出手續ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○海難等取調手續明治三十年六月二十六日 遞信省訓令第三號

警視廳 北海道廳
府 縣 船舶司檢所

船舶司檢所司檢官、同司檢官補、警察官吏、市町村長及浦役人ニ於テ明治三十年遞信省令第九號ノ届出ニ依リ若ハ自ラ海員懲戒法ニ依リ審判ニ付スヘキ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ當該海技免狀受有者及必要ト認ムルトキハ關係人ニ對シ海難事件ニ在テハ左ノ事項其ノ他ノ事件ニ在テハ第一號乃至第五號及第十四號ノ事項ヲ取調ヘ調書ヲ作り直ニ之ヲ管轄地方海員審判所ノ理事官ニ送致セシムヘシ

- 一 取調ヲ受ケタル者ノ住所、氏名、職業及年齢
- 二 船舶ノ名稱、種類、登簿噸數及公稱馬力並其ノ所有者ノ住所氏名
- 三 船舶職員ノ住所、氏名並其ノ受有スル海技免狀ノ種類及番號
- 四 發航地、到達地並事件ヲ惹起シタル場所及年月日時
- 五 事件ノ顛末
- 六 發航以後事件ヲ惹起シタル迄ノ天候、航路、速力及船舶職員、舵取、看守ノ當直時間並

其ノ氏名

- 七 船舶損傷ノ箇所並其ノ再用ノ適否
 - 八 船客乗組員ノ員數並其ノ死傷ノ有無
 - 九 貨物ノ種類、數量並其ノ損害ノ有無
 - 十 人命、船舶及貨物救護ノ方法
 - 十一 航路ヲ指定シタル羅針盤ノ所在及其ノ航路ニ於ケル自差
 - 十二 使用シタル海圖ノ種類及番號
 - 十三 航海日誌ノ存否
 - 十四 取調ヲ受ケタル者何日其ノ地ヲ去リ何地ニ到ルヘキコト
- 調書ニハ取調ヲ爲シタル年月日及場所ヲ記載シ取調ヲ爲シタル者之ニ署名捺印シ其ノ所屬官廳若ハ公署ノ印ヲ捺シ且ツ每葉ニ契印スヘシ

○船員法

船員法

- 第一章 總則
- 第二章 船員手帖
- 第三章 船長
- 第四章 海員
- 第五章 紀律
- 第六章 罰則
- 附則

船員法

○船員法

第一章 總則

第一條 本法ハ日本船舶ノ船員ニ之ヲ適用ス但湖川、港灣ノミチ航行スル船舶又ハ船舶法第二十條ニ掲ケタル船舶ノ船員ニ付テハ此限ニ在ラス

第二章 船員手帖

第三條 日本ニ於テ船員ト爲ラント欲スル者ハ管海官廳ニ船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス

申請人ハ戸籍吏ノ書面其他ノ公正證書ニ依リテ左ノ事項ヲ證スルコトヲ要ス但申請人カ其本籍地又ハ寄留地ニ於テ申請ヲ爲ス場合ニ於テ其他ノ管海官廳カ戸籍吏ノ職務ヲ行フトキハ此限ニ在ラス

- 一 氏名
- 二 本籍地
- 三 身分
- 四 出生ノ年月日

第四條 未成年者カ船員ト爲ルニハ其決定代理人ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

未成年者カ船員手帖ノ交付ヲ申請スルニハ前條第二項ニ掲ケタル事項ノ外前項ノ許可ヲ得タル旨ヲ證スルコトヲ要ス

第五條 船員ト爲ルコトヲ許サレタル未成年者ハ雇傭契約ニ關シテハ成年者ト同一ノ能力ヲ有ス

第六條 外國ニ於テ船員ト爲リタル者カ日本ニ到着シタルトキハ其到着ノ日ヨリ一个月内ニ船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス

第七條 船員手帖ニ記載シタル事項ニシテ第三條第二項ニ掲ケタルモノニ錯誤アリタルトキ又ハ同條第二項第一號乃至第三號ニ掲ケタルモノニ變更ヲ生シタルトキハ船員ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ一个月内ニ管海官廳ニ船員手帖ノ訂正ヲ申請スルコトヲ要ス

船員カ日本ニ在ラサル間ニ於テ錯誤又ハ變更ノ事實ヲ知リタルトキハ前項ノ期間ハ其船員カ日本ニ到着シタル日ヨリ之ヲ起算ス

第八條 第三條第二項及ヒ第四條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第九條 船員手帖カ滅失シタルトキハ船員ハ遲滞ナク更ニ其交付ヲ申請スルコトヲ要ス

船員手帖カ毀損シタルトキハ船員ハ遲滞ナク其書換ヲ申請スルコトヲ要ス

第十條 船員カ日本ニ在ラサル間ニ於テ船員手帖カ滅失又ハ毀損シタルトキハ船員カ日本ニ到着シタル後遲滞ナク船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請スルコトヲ要ス

第十一條 第三條第二項及ヒ第四條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ準用ス但原管海官廳ニ船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請スルコトキハ此限ニ在ラス

第十二條 船員カ廢業ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク管海官廳ニ其船員手帖ヲ返還スルコトヲ要ス船員カ死亡シタルトキハ其船員手帖ヲ保管スル者之ヲ返還スルコトヲ要ス

第三章 船長

第十三條 船長ハ海員ヲ指揮、監督シ及ヒ船中ニ在ル者ニ對シ其職務ヲ行フニ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十四條 船長ハ管海官廳ノ命令アリタルトキハ商法第五百六十二條第一項ニ掲ケタル書類ヲ

提出スルコトヲ要ス

第十五條 船舶カ港灣ヲ出入スルトキ、狹隘ナル水路ヲ通過スルトキ其他危險ノ虞アルトキハ船長ハ甲板ニ在リテ自ラ船舶ヲ指揮スルコトヲ要ス

第十六條 日本ト外國トノ間又ハ外國各港ノ間ヲ航行スル船舶カ外國ノ港ニ入港シ又ハ日本ニ到着シタルトキハ船長二十四時間内ニ其港ノ管海官廳、若シ其港ニ管海官廳ナキトキハ其後最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ航海日誌ヲ提出シテ其檢閲ヲ受クルコトヲ要ス
前項ノ規定ハ船舶カ入港ノ時ヨリ十二時間内ニ發航スル場合ニハ之ヲ適用セス
管海官廳ハ必要ナル書類ノ提出ヲ命シ又ハ船員、旅客其他船中ニ在リタル者ヲ呼出ダシテ訊問ヲ爲スコトヲ得

第十七條 左ノ場合ニ於テハ船長ハ最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ出頭シテ其報告ヲ爲スコトヲ要ス

- 一 豫定ノ航路ヲ變更シタルトキ
 - 二 人命又ハ船舶ヲ救ヒタルトキ
 - 三 衝突其他ノ海難カ生シタルトキ
 - 四 船舶カ捕獲セラレタルトキ
 - 五 船中ニ於テ死亡シタル者アリタルトキ
- 船舶カ豫定セサル港ニ寄港シタルトキ又ハ前項第二號乃至第五號ニ掲ケタル事由カ碇泊中ニ生シタルトキハ船長ハ其港ノ管海官廳、若シ其港ニ管海官廳ナキトキハ其後最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ出頭シテ其報告ヲ爲スコトヲ要ス
前條第三項ノ規定ハ前二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 前條第一項及ヒ第二項ノ場合ニ於テハ報告書ヲ作り其認證ヲ申請スルコトヲ得

第十九條 船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ船長ハ人命、船舶及ヒ積荷ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡シ且旅客、海員其他船中ニ在ル者ヲ去ラシメタル後ニ非サレハ其指揮スル船舶ヲ去ルコトヲ得ス

第二十條 船舶カ衝突シタルトキハ船長ハ互ニ人命及ヒ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡シ且船舶ノ名稱、船籍港、發航港及ヒ到達港ヲ告グルコトヲ要ス但自己ノ指揮スル船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ此限ニ在ラス

第二十一條 船長カ航海中救援ヲ求ムル船舶ヲ認メタルトキハ人命ヲ救フコトヲ要ス但自己ノ指揮スル船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ此限ニ在ラス

第二十二條 海員カ船中ニ於テ死亡シタルトキハ船長ハ其船中ニ在ル遺産ヲ保管スルコトヲ要ス

第二十三條 外國ニ駐在スル日本ノ公使、領事又ハ貿易事務官カ法令ノ定ムル所ニ依リ日本臣民ヲ日本ニ送還スヘキコトヲ命シタルトキハ船長ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

送還費用ノ償還ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條 船長ハ其指揮セントスル船舶ニ乗込ム前ニ其船員手帖ヲ管海官廳ニ提出シテ就職ノ認證ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ就職ノ認證ヲ得タル船長カ其職ヲ退キタルトキハ遲滞ナク退職ノ認證ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十五條 船長カ死亡シタルトキ、船舶ヲ去リタルトキ又ハ之ヲ指揮スルコト能ハサルニ至

リタル場合ニ於テ他人ヲ選任セサルトキハ運航ニ從事スル海員ハ其職掌ノ順位ニ從ヒテ船長ノ職務ヲ行フ

第四章 海員

第二十六條 海員ノ雇入若クハ雇止ヲ爲シ又ハ雇入契約ノ更新若クハ變更ヲ爲シタルトキハ管海官廳ニ海員名簿ヲ提出シテ公認ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十七條 管海官廳カ公認ヲ爲スニハ海員名簿ニ記載シタル事項ヲ當事者雙方ニ讀聞カセタル後之ニ署名、捺印セシムルコトヲ要ス但海員ノ雇止ヲ爲シタル場合ニ於テ正當ノ理由アルトキハ當事者ノ一方カ出頭セサルトキト雖モ公認ヲ爲スコトヲ得

當事者カ印ヲ有セサルトキハ署名スルヲ以テ足ル署名スルコト能ハサルトキハ氏名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル若シ署名スルコト能ハス且印ヲ有セサルトキハ氏名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル

前項ノ規定ニ依リ捺印セス又ハ氏名ヲ代署セシメ若クハ捺印シタル場合ニ於テハ海員名簿ニ其事由ヲ附記スルコトヲ要ス

第二十八條 當事者ハ正當ノ理由アル場合ニ限り代理人ヲシテ公認ヲ受ケシムルコトヲ得

第二十九條 公認アリタルトキハ海員ハ遲滞ナク其船員手帖ヲ管海官廳ニ提出シテ公認ノ認證ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十條 海員ノ雇止ニ關シテ爭アルトキハ當事者ノ一方ハ管海官廳ニ其事由ヲ申立テ雇止ノ公認ヲ申請スルコトヲ得

管海官廳カ前項ノ申請ヲ正當ナリト認メタルトキハ當事者雙方ヲ呼出タシ海員名簿及ヒ船員手帖ヲ提出セシメテ雇止ノ公認ヲ爲スコトヲ要ス

當事者ノ一方カ出頭セサルトキハ管海官廳ハ相手方ノ申立ニ因リテ雇止ノ公認ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ海員名簿及ヒ船員手帖ニ其事由ヲ記載スルコトヲ要ス

前二項ノ場合ニ於テハ管海官廳ハ海員名簿又ハ船員手帖ノ提出ヲ強制スルコトヲ得

第三十一條 船長ハ海員ノ雇入期間中其船員手帖ヲ保管スルコトヲ要ス

第三十二條 海員カ雇入期間中脱船シタルトキハ船長ハ遲滞ナク管海官廳ニ其海員ノ船員手帖ヲ返還スルコトヲ要ス

第三十三條 海員ハ雇止アリタル場合ニ於テハ船長ニ對シ其職務ノ執行又ハ品行ニ關スル證明書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第三十四條 海員名簿カ滅失又ハ毀損シタルトキハ船長ハ更ニ海員名簿ヲ作り之ヲ管海官廳ニ提出シテ公認ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十七條及ヒ第二十八條ノ規定ハ海員名簿及ヒ海員手帖カ共ニ滅失又ハ毀損シタル場合ニ之ヲ準用ス但原管海官廳ニ公認ヲ申請スルトキハ此限ニ在ラス

第三十五條 海員カ雇入期間中第九條又ハ第十條ノ規定ニ依リテ船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請シタル場合ニ於テ其交付又ハ書換アリタルトキハ海員ハ遲滞ナク第二十九條ニ定メタル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第五章 紀律

第三十六條 左ノ場合ニ於テハ船長ハ海員ヲ懲戒スルコトヲ得

- 一 海員カ上長ニ對シテ尊敬又ハ從順ノ道ヲ失ヒタルトキ
- 二 海員カ其職務ヲ怠リタルトキ
- 三 海員カ他ノ海員ノ職務執行ヲ妨ケタルトキ

四 海員カ喧嘩シタルトキ

五 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ船舶ヲ去リタルトキ又ハ船長カ指定シタル時マテニ歸船セザリシトキ

六 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ燈火又ハ焚火シタルトキ

七 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ端艇ヲ使用シタルトキ

八 海員カ食料又ハ飲料ヲ濫費シタルトキ

九 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ酒類ヲ所持スルトキ又ハ吸煙シタルトキ

十 海員カ酩酊シテ事ヲ省セサルトキ

十一 其他海員カ船中ノ秩序ニ反スル行爲ヲ爲シタルトキ

第三十七條 懲戒ハ左ノ四種トス

- 一 監禁
- 二 上陸禁止
- 三 加役
- 四 減給

第三十八條 監禁ハ三日以下トシ船中ノ一室ニ拘置ス

上陸禁止ハ七日以下トス此期間ニハ船舶ノ碇泊日數ノミヲ算入ス

加役ハ七日以下トシ常務時間外ニ於テ役務ニ服セシム但一日二時間ヲ超ユルコトヲ得ス

減給ハ給料月額十分ノ一以下トス

第三十九條 前條第一項乃至第三項ノ期間ニハ初日ヲ算入ス

第四十條 懲戒ノ適用ハ行爲ノ輕重ニ從ヒ船長之ヲ定ム但二種以上ノ懲戒ヲ併科スルコトヲ得

ズ

第四十一條 海員カ兇器、爆發若シハ發火シ易キ物、劇藥其他ノ危險物又ハ酒類ヲ所持スルトキハ船長ニ於テ其物ヲ保管又ハ放棄スルコトヲ得

第四十二條 海員カ人身又ハ船舶ニ危害ヲ及ボスヘキ行爲ヲ爲サントスルトキハ船長ハ必要ノ期間内其海員ノ身體ヲ拘束スルコトヲ得

第四十三條 船長ハ必要アルトキハ旅客其他船中ニ在ル者ニ對シテモ前二條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第四十四條 海員カ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乗込マサルトキ又ハ船長ノ許可ヲ得スシテ之ヲ去リタルトキハ船長ハ乗船ヲ強制スルコトヲ得

第四十五條 船長ノ命令ニ服從セサル者アル場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ船長ハ海軍ノ艦船、地方官廳又ハ管海官廳ニ援助ヲ求ムルコトヲ得

第六章 罰則

第四十六條 詐僞ノ所爲ヲ以テ船員手帖ノ交付ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

詐僞ノ所爲ヲ以テ海員名簿ニ公認ヲ受ケ又ハ海員手帖ニ認證ヲ受ケタル者亦同シ

第四十七條 第七條、第九條、第十條、第十二條、第二十九條、第三十二條又ハ第三十五條ノ規定ニ反シ船員手帖ノ交付訂正若クハ公認ノ認證ヲ申請シ又ハ船員手帖ヲ返還スルコトヲ怠リタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十八條 虛僞ノ海員名簿又ハ船員手帖ヲ行使シメル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

公認ヲ受ケタル海員名簿又ハ認證ヲ受ケタル船員手帖ヲ増減、變換シテ行使シタル者亦同シ
第四十九條 左ノ場ニ於テハ船長ヲ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ參拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス

- 一 船長カ正當ノ理由ナクシテ商法第五百六十二條第一項ニ掲ケタル書類ヲ船中ニ備ヘザルトキ又ハ之ヲ毀棄シタルトキ
- 二 船長カ第十四條ノ規定ニ反シテ書類ノ提出ヲ拒ミタルトキ
- 三 船長カ商法第五百六十二條第一項第二項乃至第五號ニ掲ケタル書類ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ
- 四 船長カ第十七條第一項又ハ第二項ノ場合ニ於テ虛偽ノ報告ヲ爲シタルトキ
- 第五十條 左ノ場合ニ於テハ船長ヲ拾圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス
 - 一 船長カ商法第五百六十一條ノ檢査ヲ爲サスシテ發航ヲ爲シタルトキ
 - 二 船長カ船舶ヲ安全ニ碇泊セシメ且商法第五百六十三條ノ規定ニ從ヒ其職務ヲ委任セスシテ船舶ヲ去リタルトキ
 - 三 船長カ第十五條ノ規定ニ反シテ甲板ニ在ラサルトキ
 - 四 船長カ必要ナクシテ豫定ノ航路ヲ變更シタルトキ
- 第五十一條 船長カ第十六條第一項、第十七條第一項、第二項第二十二條又ハ第三十一條ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十二條 船長カ第十九條ノ規定ニ違反シタルトキハ二月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス
- 第五十三條 船長カ第二十條ノ規定ニ反シテ人命又ハ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡ササルトキハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五拾圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

- 船長カ第二十條ノ規定ニ反シテ告知ヲ爲ササルトキハ拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十四條 船長カ第二十一條ノ規定ニ違反シタルトキハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ參拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十五條 船舶ニ急迫ノ危險アル場合ニ於テ海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ其船舶ヲ去リタルトキハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス
- 第五十六條 第十九條又ハ第二十條ノ場合ニ於テ船長カ人命又ハ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ爲スニ當タリ海員カ上長ノ命令ニ服從セサルトキハ十一日以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十七條 船長カ第二十三條第一項ノ規定ニ反シテ送還ノ命令ヲ拒ミタルトキハ參拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十八條 船舶所有者又ハ船長カ第二十六條ノ規定ニ違反シタルトキハ拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 船舶法第三十條及ヒ第三十一條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス
- 第五十九條 船長カ第三十三條ニ定メタル證明書ヲ交付セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタル證明書ヲ交付シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 前項ノ罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス
- 第六十條 船長カ第三十四條第一項ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第六十一條 海員カ雇入手續ノ終ハリタル後正當ノ理由ナクシテ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乗込マサルトキハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十八條 船舶ノ運航ヲ妨クル目的ヲ以テ前條第一項ノ罪ヲ犯シタル者ハ重懲役ニ處シ因テ

船舶ヲ覆没シ又ハ人ヲ死ニ致シタルトキハ刑法第六十九條ノ例ニ依リテ處斷ス

第六十九條 海員カ上長ニ對シテ脅迫ノ罪ヲ犯シタルトキハ刑法各本條ノ例ニ照シ一等ヲ加フ

刑法第三百二十九條ノ規定ハ前項ノ場合ニハ之ヲ適用セス

第七十條 海員カ上長ニ對シテ毆打創傷ノ罪ヲ犯シタルトキハ刑法各本條ノ例ニ照シ一等ヲ加

フ

第七十一條 船長カ旅客、海員其他船中ニ在ル者ニ對シテ其職權ヲ濫用シ又ハ虐待ヲ爲シタル

トキハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ拾圓以上參百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病、死傷ニ致シタルトキハ前條ノ例ニ依リテ處斷ス

第七十二條 海員カ相黨與シテ左ノ行爲ヲ爲シタルトキハ各號ノ區別ニ依リテ處斷シ首魁ハ一

等ヲ加フ

一 職務ニ服セス又ハ上長ノ命令ニ服從セサルトキハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

二 脱船シタルトキハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

三 第六十九條又ハ第七十條ノ罪ヲ犯シタルトキハ各本條ノ例ニ照シテ一等ヲ加フ

第七十三條 船員カ著シク其職務ヲ怠リ因テ船舶ヲ毀損若クハ覆没シ又ハ人ヲ死傷ニ致シタル

トキハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ拾圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十四條 本章ノ規定中船長ニ適用スヘキモノハ船長ニ代ハリテ其職務ヲ行フ者ニモ亦之ヲ

適用ス

附 則

第七十五條 本法ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第六十二條 船長カ第五章ニ定メタル處分ヲ爲スニ當タリ海員ニ助力ヲ爲スヘキコトヲ命シタ

ル場合ニ於テ海員カ其命令ニ服從セサルトキハ十一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓

以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十三條 船員、旅客其他船中ニ在リタル者カ本法ノ規定ニ依リ管海官廳ヨリ呼出ヲ受ケ又

ハ書類ノ提出ヲ命セラレタル場合ニ於テ正當ノ理由ナクシテ之ニ應セサルトキハ五圓以上五

拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十四條 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ二十四時間以上船中ニ在ラサルトキハ貳圓以上貳拾

圓以下ノ罰金ニ處ス

海員カ脱船シタルトキハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

海員カ外國ニ於テ前二項ノ罪ヲ犯シタルトキハ一等ヲ加フ

第六十五條 船長カ正當ノ理由ナクシテ船舶ヲ遺棄シタルトキハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ

處ス

船長カ外國ニ於テ正當ノ理由ナクシテ海員ヲ遺棄シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ

處ス

第六十六條 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ兇器、爆發又ハ發火シ易キ物、劇藥其他ノ危險物ヲ

所持スルトキハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十七條 故ナク船體若クハ機關ノ要部ヲ毀損シ又ハ重要ナル器具ヲ毀損若クハ放棄シタル

者ハ十一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ船舶ノ運航ヲ妨ケタルトキハ一等ヲ加ヘ船舶ヲ覆没シ又ハ人ヲ死ニ致シ

タルトキハ重懲役ニ處ス

石敷ナ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ關シテハ勅令ヲ以テ別ニ本法施行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得
第七十六條 明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス
但本法施行前ニ同規則ニ定メタル罰則ヲ適用スヘキ行爲アリタルトキハ本法施行ノ後ト雖モ
其罰則ヲ適用ス

第七十七條 船員ハ本法施行ノ日ヨリ六個月間ハ船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要セス
前項ノ期間經過ノ後ハ船員ハ遲滞ナク船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス

第七十八條 從來ノ海員名簿ハ本法施行ノ日ヨリ六個月間ハ商法ニ定メタル海員名簿ト同一ノ
效力ヲ有ス

前項ノ期間内ニ公認アリタルトキハ其期間經過ノ後ト雖モ其後始メテ公認アルマテハ從來ノ
海員名簿ハ仍ホ其效力ヲ有ス

第七十九條 本法ノ規定ニ依リ管海官廳カ行フヘキ事務ニ付テハ主務大臣ハ市町村長、市制又
ハ町村制ヲ施行セサル地方ニ在リテ戸長又ハ之ニ準スヘキ者ヲシテ其事務ヲ行ハシムルコト
ヲ得

第八十條 本法ノ施行ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ定ム

○第二編 雜則

○開港港則 明治卅一年七月七日
勅令第百卅九號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ開港港則ヲ裁可シ茲ニ之レヲ公布セシム

開港港則

第一條 左ニ記載スル外國通商ヲ許シタル諸港ノ經界ハ左ノ如ク之ヲ定ム

橫濱ノ港界ハ十二天(マンダリン、プラフ)ヨリ燈船マテ夫ヨリ正北ニ向ヒ鶴見川口ノ東岸
マテ引キタル一線内ニ含マル

神戸ノ港界ハ生田川ノ舊口ヨリ南方ニ向ヒ引キタル一線ト和田崎ヨリ北東ニ向ヒ引キタル
他ノ一線トノ二線ヲ經界トシタル面積内ニ含マル

新潟ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシニ海哩半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧内ニ含マル

夷港ノ港界ハ稚泊村ヨリ北五十里村外堺マテ引キタル一線ト加茂湖東岸港町ヨリ同湖北西
岸加茂村マテ引キタル一線トノ内ニ含マル

大阪ノ港界ハ武庫川口目標(ツリー、ポイント)ヨリ南西ニ向ヒ引キタル一線ト大和川口
ヨリ引キタル一線ト武庫川口目標(ツリー、ポイント)ヨリ六海哩大和川口ヨリ五海哩ノ所
ニ於テ相接スル其二線内ニ含マル

長崎ノ港界ハ神崎ヨリ女神ニ引キタル一線内ニ含マル

函館ノ港界ハ阿野間崎ヨリ南方沖合半海哩ノ所ヨリ上磯村有川口ノ東岸マテ引キタル一線
内ニ含マル

第二條 各船舶ハ入港スルニ當リ其國旗及信號符字ヲ揚クヘシ定期郵便船ハ會社旗ヲ以テ信號

符字ニ代用スルコトヲ得

右國旗及信號符字又ハ會社旗ハ船舶ノ着港ヲ港長ニ届出タル後ニアラサレハ之ヲ引下スヘカ
ラス

着港届ハ日曜日及大祭日ヲ除クノ外着港後二十四時間内ニ之ヲ差出スヘシ但シ着港届ヲ差出
シタル後ニアラサレハ如何ナル船舶タルトモ税關手續ノ便利ヲ與ヘサルモノトス

第三條 各船長ハ其着港ニ際シ自由交通ノ許可ヲ受グルマテハ其船舶ト他ノ船舶或ハ陸地トノ
間ニ於ケル一切ノ交通ヲ差止ムヘシ

第四條 港長ノ端艇ハ港ノ入口近傍ニ出向キ居リ港長ハ各船舶ノ入港スルニ當リ其泊船所ヲ示
定スヘシ而シテ各船舶ハ止ムコトヲ得サル場合ヲ除クノ外特許ナクシテ其泊船所ヲ去ルヘカ
ラス但シ港長ニ於テ必要ト認ムルトキハ船舶ヲシテ其泊船所ヲ移サシムルコトヲ得

第五條 港長ハ其執務ノ間常ニ制服ヲ着ケ其端艇ニハ別紙離形ノ如キ旗ヲ掲グヘシ

港長ハ何時タリトモ船舶ノ運動繫船ノ適否及碇泊所ニ關スル指揮方果シテ實行セラレ居ルヤ
否ヲ検査スルコトヲ得

第六條 如何ナル船舶モ公ケノ航路ニ投錨シ若クハ其他航海ノ自由ヲ障礙スヘカラス

「ヂブ、ブームス」ヲ接キ出シタル船舶ニシテ其「ヂブ、ブームス」カ航海ノ自由ヲ障礙スルトキ
ハ港長ノ請求ニ從ヒ之ヲ取込ムヘシ

第七條 港界内ニ碇泊シ又ハ運航スル各船舶ハ日没ト日出ノ間ニハ海上衝突豫防ニ關スル法令
ニ規定シタル各種ノ船燈ヲ掲グヘシ

第八條 暴風雨ノ來ラムトスルトキ或ハ警報信號ヲ掲ケタルトキハ各船舶ニ於テ直ニ一箇又ハ
一箇以上ノ豫備錨ヲ投下スルノ準備ヲ爲スヘシ尤モ汽船ハ此外別ニ蒸氣ヲ發生セシムヘシ

第九條 常用ニ超過シ爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物料ヲ積載シタル一切ノ船舶ハ港界外ニ來
リ其處ニテ港長ノ指揮ヲ待ツヘシ斯ク指揮ヲ待ツ間右船舶ハ日出ト日没ノ間ニハBノ信號日
没ト日出ノ間ニハ紅燈ヲ前橋ノ頂上ニ掲グヘシ

各船舶ハ港長ノ指定シタル場所ニアラサレハ前記ノ物料ヲ積入レ又ハ荷卸スヘカラス

第十條 休業中又ハ修繕中ノ船舶及總テ「ヤット」倉庫船、貨船及端艇等ハ特ニ港長ノ指定シタ
ル泊船所ニ碇泊スヘシ

第十一條 船舶カ港界内ニ於テ火ヲ失シタルトキハ救援ノ來ルマテ船鐘ヲ打鳴スヘシ且ツ日出
ト日没ノ間ニハNMノ信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ斷ニス紅燈ヲ上下スヘシ

警察官ノ救援ヲ要スルトキハ日出ト日没ノ間ニハGノ信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ藍火若
クハ閃火ヲ示スヘシ

前記ノ如キ信號ヲ用ユル場合ノ外港長ノ允許ヲ得ルニアラサレハ港界内ニ於テ銃砲及煙火等
ヲ發スルコトヲ得ス

第十二條 帝國政府ニ於テ流行病若クハ傳染病(虎烈劑、天然痘、黃熱、猩紅熱、ペスト、コレラ)アル地ト布告シタル地ヨリ來
著シ又ハ航海中船中ニ該病アリタル船舶ハ港界外ニ來リ日出ト日没ノ間ニハ黃旗ヲ日没ト日
出ノ間ニハ紅白二燈ヲ上下ニ連子前橋ノ頂上ニ掲グヘシ又前記ノ船舶ハ當該衛生官吏ノ臨檢
ヲ受クヘシ

衛生官吏臨檢ノ爲メ其船舶ニ近寄リタルトキハ適當ノ豫防ヲ施シ得ル爲メニ航海中現ニ該病
發生ノ有無及該病ノ性質如何ヲ該官吏ニ通知スヘシ

右船舶ハ自由交通ノ允許ヲ受クルマテ黃旗若クハ前記ノ燈火ヲ引下スヘカラス且ツ當該衛生
官吏ノ允許ヲ得ルニアラサレハ何人タリトモ上陸セシメ又ハ一切他ノ船舶ト交通スルヲ許サ

ス
前數項ノ規定ハ港界内ニ碇泊スル船舶中ニ於テ前記ノ流行病及傳染病ノ内何病ニテモ發生シタルトキニ之ヲ適用ス

右船舶ハ港長ヨリ其旨命令ニ接スルトキハ其泊船所ヲ移轉スヘシ

牛羊等傳染病アル地ヨリ來著シ又ハ航海中該病ヲ發生シタル船舶ハ當該衛生官吏ノ允許ヲ得ルニアラサレハ牛羊等又ハ其死體、皮革又ハ骨ヲ陸揚シ又ハ他船ニ積換ユルコトヲ許サス

第十三條 港界内ニ於テ死體、荷足、灰燼、塵芥等ヲ海中ニ投棄スヘカラス
石炭、荷足其他之ニ類スル物料ヲ積卸スルトキハ其海中ニ脱落スルヲ防ク爲メ必要ノ豫防ヲ爲スヘシ

何船舶ニテモ港ニ寄アル一切ノ物料ヲ海中ニ投棄シ又ハ怠慢ニ依リ脱落セシメタルトキハ港長ヨリ其旨命令ニ接セハ該船舶ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ取除カサルニ於テハ港長ハ該船舶ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシムルコトヲ得

第十四條 船舶出港セントスルトキハ其旨港務局ニ届出テ且ツ出帆旗ヲ引揚グヘシ
一定ノ時日ニ出帆スル汽船ハ其着港及出帆ニ對シ單ニ一回ノ届出ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第十五條 一港内又ハ其附近ノ公ケノ航路ノ妨害トナルヘキ總テノ難破物又ハ其他ノ物件ハ港長ノ指定セル時間内ニ其所有主ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ港長ノ指定セル時間内ニ此命令ヲ遵行セサルニ於テハ港長ハ所有主ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシメ又ハ破壞セシムルコトヲ得

第十六條 港務局ハ定期郵便汽船ノ爲メニ適切ニシテ且ツ充分ナル浮標ノ繫船器若干ヲ備ヘ置キ之ヲ使用スル所ノ船舶ヲシテ成規ノ使用料ヲ拂ハシムヘシ

第十七條 燈船信號用浮標又ハ立標ニハ鏈、綱其他ノ船具ヲ繫クヘカラス

船舶若シ燈船、浮標、立標、埠頭及其他ノ造營物ニ乗掛ケ又ハ之ヲ毀損シタルトキハ其修繕又ハ再設ノ爲メニ必要ノ費用ハ該船舶ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第十八條 本則ノ規定ヲ犯シタルトキハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 船舶ニ科スル罰金使用料又ハ費用ニ付テハ船長モ亦其責ヲ負フモノトス

第二十條 本則ニ依リ船舶ニ科シタル罰金、使用料又ハ費用ヲ完納スルカ或ハ之ニ對シ港長ノ

満足スヘキ擔保物ヲ港長ニ差出スニアラザレハ其船舶ノ出港ヲ許サス

第二十一條 本則ニ於テ港長ト稱スルハ助役及代理者ヲモ包含シ船長ト稱スルハ其名稱ノ何タルヲ問ハス船舶ヲ指揮監督スル者ノ義ニシテ港ト稱スルハ本則第一條中ニ列記セル諸港ノ一ヲ指ス

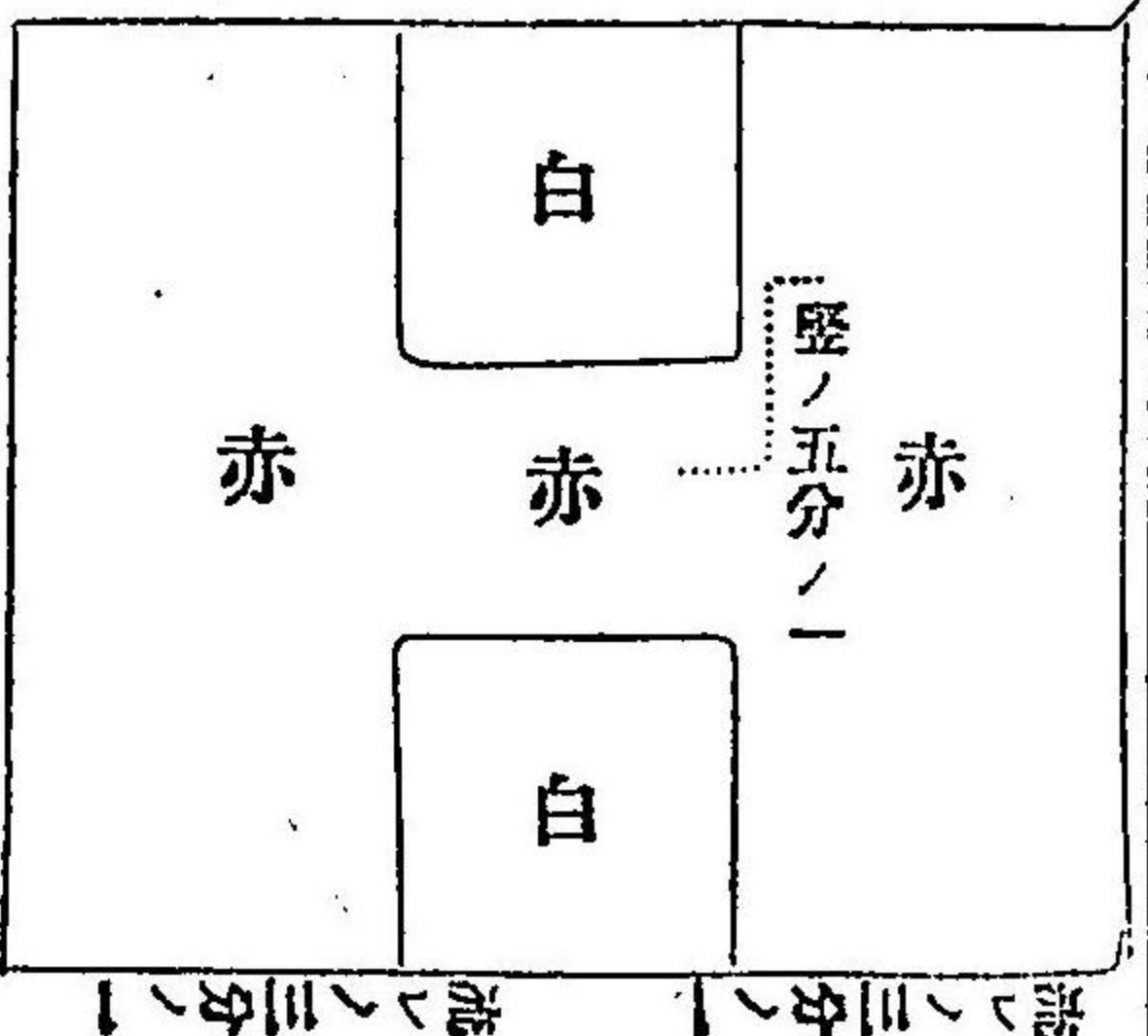
第二十二條 各港ニ於テ其一部分ヲ軍艦ノ碇泊所トシテ取除ケ置クヘシ

第二十三條 本則ノ規定中軍艦ニ適用セラルヘキモノハ第四條、六條、十二條、二十一條ノ規定及第十三條第一項及第二項ノ規定ニ限ル

第二十四條 本則施行ノ時期及場所ハ遞信大臣之ヲ告示ス
本則實施ニ關スル細則ハ遞信大臣之ヲ發布ス

(別紙)

第五條ノ旗章雜形



○港務局名稱及位置
 明治卅一年七月廿一日
 遞信省告示第八十五號

橫濱港務局 武藏國橫濱市
 長崎港務局 肥前國長崎市

神戸港務局 攝津國神戸市

○開港港則施行細則
 明治卅一年九月二日
 遞信省令第十六號

開港港則施行細則左ノ通相定メ開港港則實施ノ日ヨリ施行ス
 開港港則施行細則
 第一條 港務局官吏船舶ニ臨檢シ該船舶ヲ健康ナリト認ムルトキハ第一號書式ノ交通證書ヲ船

長ニ交付スヘシ

第二條 港長ノ示定シタル泊船所ヲ移轉セントスルトキハ船長ハ願書ヲ港務局ニ差出シ豫メ允
 許ヲ受クヘシ

第三條 船舶ノ着港届ハ第二號書式ニ依リ港務局ニ差出スヘシ

第四條 開港港則第九條ニ於テ爆發物ト稱スルハ「ブラスチング」、「セラチン」、「彈藥包、爆發管、
 「ダイナマイト」煙火、導火管、「ゼリグナイト」、「ナイトログリセリン」、火藥、棉火藥、無煙火
 藥、雷管ノ類ヲ謂ヒ容易ニ燃燒スヘキ物料ト稱スルハ「ブルマ」油、生石油、石油、「ナフタ」、「ナ
 フタリン」、「ラングーン」油、「ロツク」油、松精油ノ類其他華氏九十五度以上ノ熱度ニ依リ發火
 スヘキ氣體ヲ發スルモノヲ謂フ

第五條 船舶ニ設備スル大砲一門毎ニ火藥五十發分導火管類七十箇、小銃一挺毎ニ火藥百發分
 雷管五十箇及信號用ノ榴彈、火箭、焰管、救命焰ヲ除クノ外爆發質ノ物料ハ總テ之ヲ常用外
 ト看做ス

容易ニ燃燒スヘキ物料ハ船舶所用ノ目的ヲ説明シ得ルモノ、外總テ之ヲ常用外ト看做ス

第六條 信號用ノ外港界内ニ於テ銃砲及煙火等ヲ發セントスルトキハ願書ヲ港務局ニ差出シ豫
 メ允許ヲ受クヘシ

第七條 港界内ニ於テ船舶ヲ休繋シ又ハ修繕セントスルトキハ豫メ其旨ヲ港務局ニ届出ツヘシ

第八條 開港港則第十二條第六項ノ船舶及碇泊中獸類傳染病ノ發生シタル船舶ハ速ニ其旨ヲ港
 務局ニ届出ツヘシ

第九條 動物ノ死體灰燼塵芥等ヲ取棄ントスル船舶ハ港務局ニ於テ承認シタル廢船ヲ使用スヘ
 シ

應船ヲ使用セントスル船舶ハ船内見易キ處ニFノ信號若ハ艦ヲ掲ケテ日標トナスヘシ

第十條 繫船浮標ヲ使用セントスル船舶ハ船主若ハ船長ヨリ豫メ第三號書式ノ願書ニ成規ノ使
用料ヲ添ヘ港務局ニ差出シ允許ヲ受クヘシ

繫船浮標使用料ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十一條 繫船浮標使用ノ允許ヲ受ケタル船舶ハ港長ノ指定シタル繫船浮標ニ限り之ヲ使用ス
ルコトヲ得

港長ハ必要ニ依リ使用スヘキ浮標ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第十二條 船舶出港セントスルトキハ第四號書式ノ出港届ヲ港務局ニ差出スヘシ

外國通航船前項ノ手續ヲ終リタルトキハ健全證書ノ交付ヲ申請スルコトヲ得此場合ニ於テハ
手数料トシテ五圓ヲ納ムヘシ但條約ニ於テ該手数料ヲ定メタルトキハ其額ニ依ル

健全證書ハ第五號書式ニ依ル

第十三條 一定ノ日時ニ發着スル汽船ニシテ其着港及出港ニ付一回ノ届出ヲ爲ス者ハ第六號書
式ニ依ルヘシ

第十四條 出港シタル船舶避難修繕其他事故ノ爲メ出港後十二時間内ニ歸港シタルトキハ其事
由ヲ記載シタル届書ヲ港務局ニ差出シ着港届ニ代フルコトヲ得

第十五條 開港港則第二十條ニ規定スル擔保物ハ帝國ノ通貨及帝國政府ノ公債證書ニ限ル

第十六條 本則ノ規定ハ第二條第八條及第九條ヲ除クノ外軍艦ニハ之ヲ適用セス

第十七條 第一條ノ規定ハ沿海通航船ニハ之ヲ適用セス

第十八條 船籍證書ヲ受有スルニ及ハサル船舶及一定ノ港津間ニ往復スル積量百噸以下ノ沿海
通航船ハ船主ヨリ豫メ港務局ニ届出テ允許ヲ受クルニ於テハ第三條及第十二條第一項ノ手續

ヲ省略スルコトヲ得

第十九條 警報信號、正午標準時、港界内ノ航路、泊船所碇泊所ノ區域、船舶ノ運動及繫船ノ方法
ハ各港ニ付キ港長之ヲ定ム

第一號書式

交通證書

(船名)ハ健康ト認ムルヲ以テ船長某ハ此交通證書ヲ付與ス

年月日

何港務局長

第二號書式

着港届

一 船ノ種類

一 船名

一 船主

一 國籍

一 船籍港名

一 總噸數

一 登簿噸數

一 發航地名(原發航地最後發航地)及發航年月日

右 年月 日時當港ニ入船候間此段及御届候也

船長 某

第三號書式

繫船浮標使用願

何港務局長

一船名
右何日間繫船浮標使用ノ儀許可相成度使用料相添此段相願候也
年月日

何港務局宛

船長某

第四號書式

出港届

一船名
右年月日時(何地)へ向ヶ當港出船可致候間此段及御届候也
年月日

何港務局宛

船長某

第五號書式

健全證書

現時當港ニハ傳染病又ハ流行病之ヲ無ク且本日出港(船名)ノ健全ナルコトヲ證明スル爲メ此證書ヲ船長某ニ付與ス
年月日

何港務局長

第六號書式

着港届

- 一船名
- 一船主
- 一國籍
- 一船籍港名
- 一總噸數
- 一登簿噸數

一發航地名(原發航地最後發航地)及發航年月日
一到港地名
右年月日時當港入船年月日時出船可致候間此段及御届候也
年月日

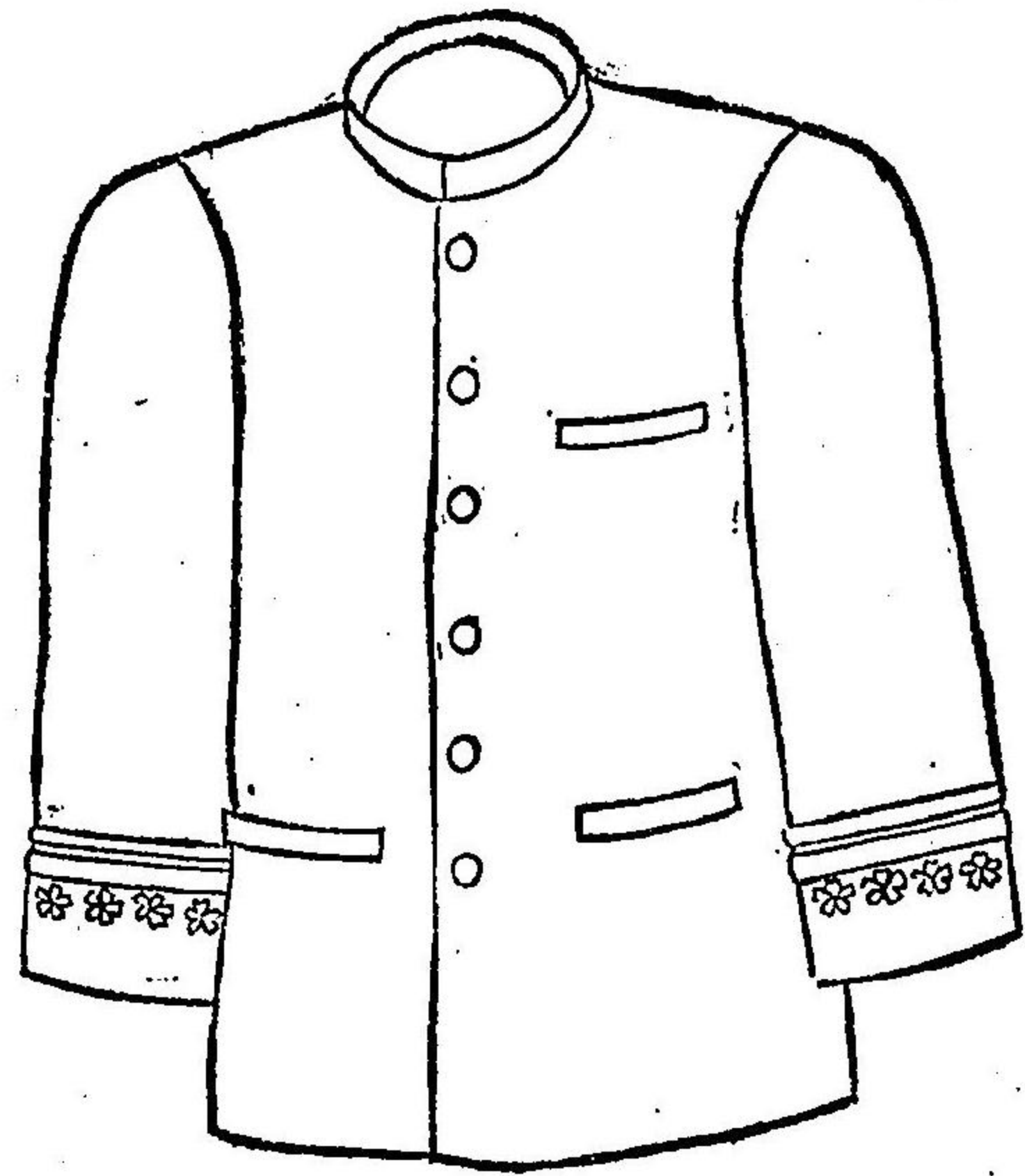
船長某

○港務局長以下服制

朕港務局長港務官醫官港務官補港吏港吏補制服ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
港務局長港務官醫官港務官補港吏港吏補ノ服制左ノ通定ム

港務局長以下服制圖例

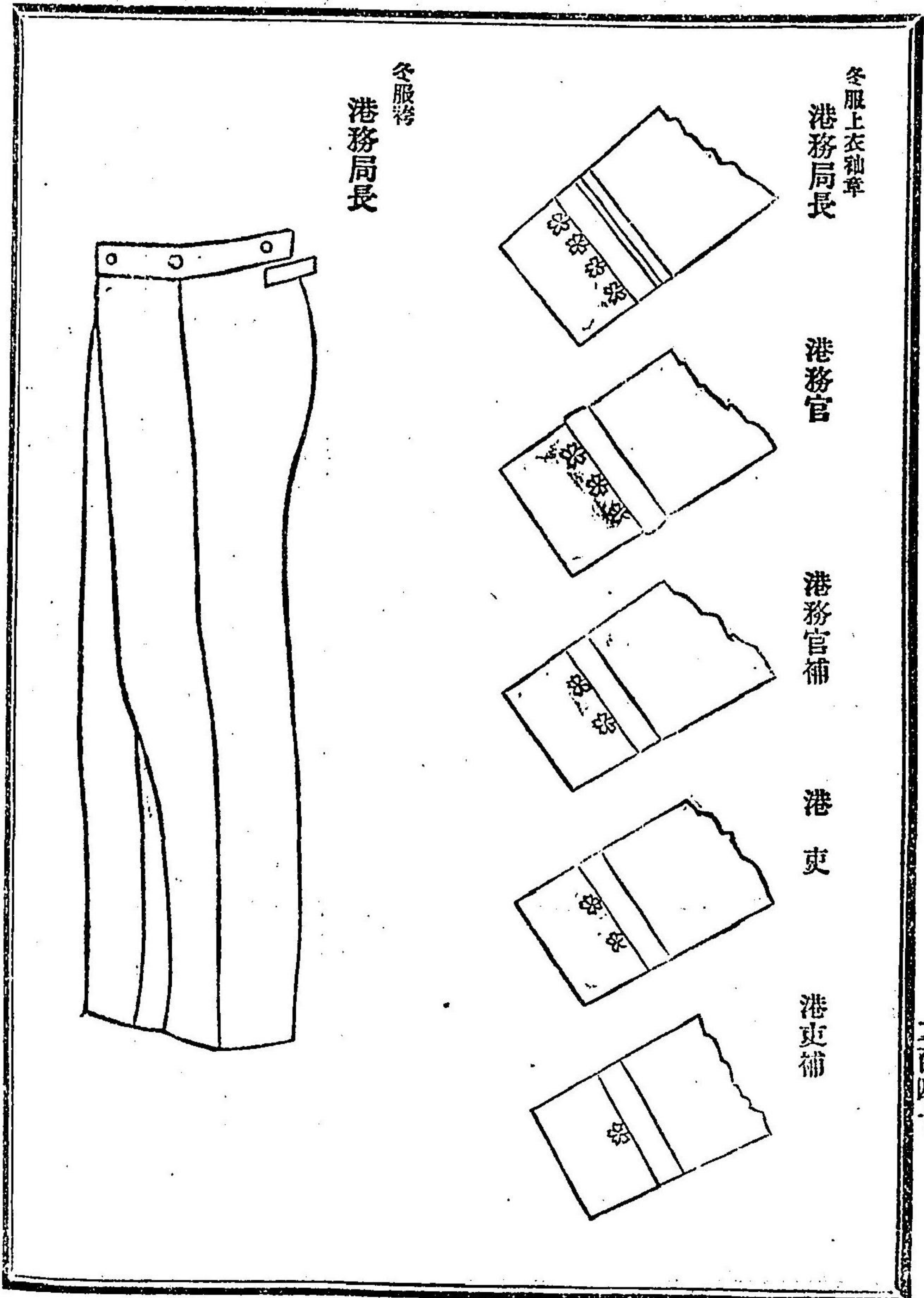
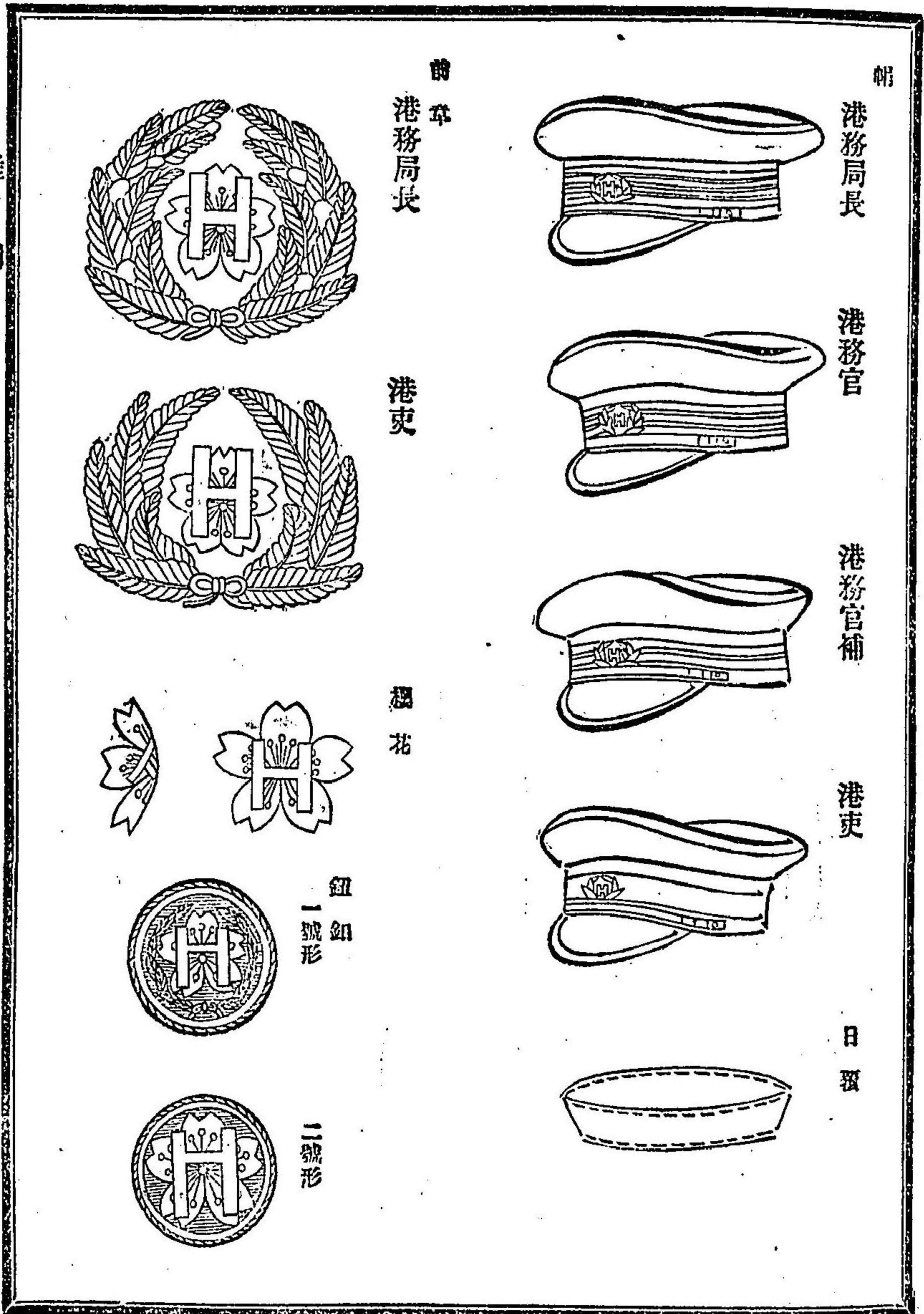
地質	製式	圖	雜則
港務局長	黑羅紗	圓形ニシテ黒色ノ前襟及支草ヲ附シ支草ノ兩端ハ各一箇ノ鈕ニテ以テ留ム	前襟ハ高一寸八分幅ニ寸五分中央ニ銀ノ花ニ分幅ニ寸五分
港務官醫官	同上	同上	前襟ハ同上
港務官補	同上	同上	前襟ハ同上
港吏	同上	同上	前襟ハ高一寸五分幅ニ寸五分中央ニ銀ノ花ニ分幅ニ寸五分
港吏補	同上	同上	前襟ハ同上



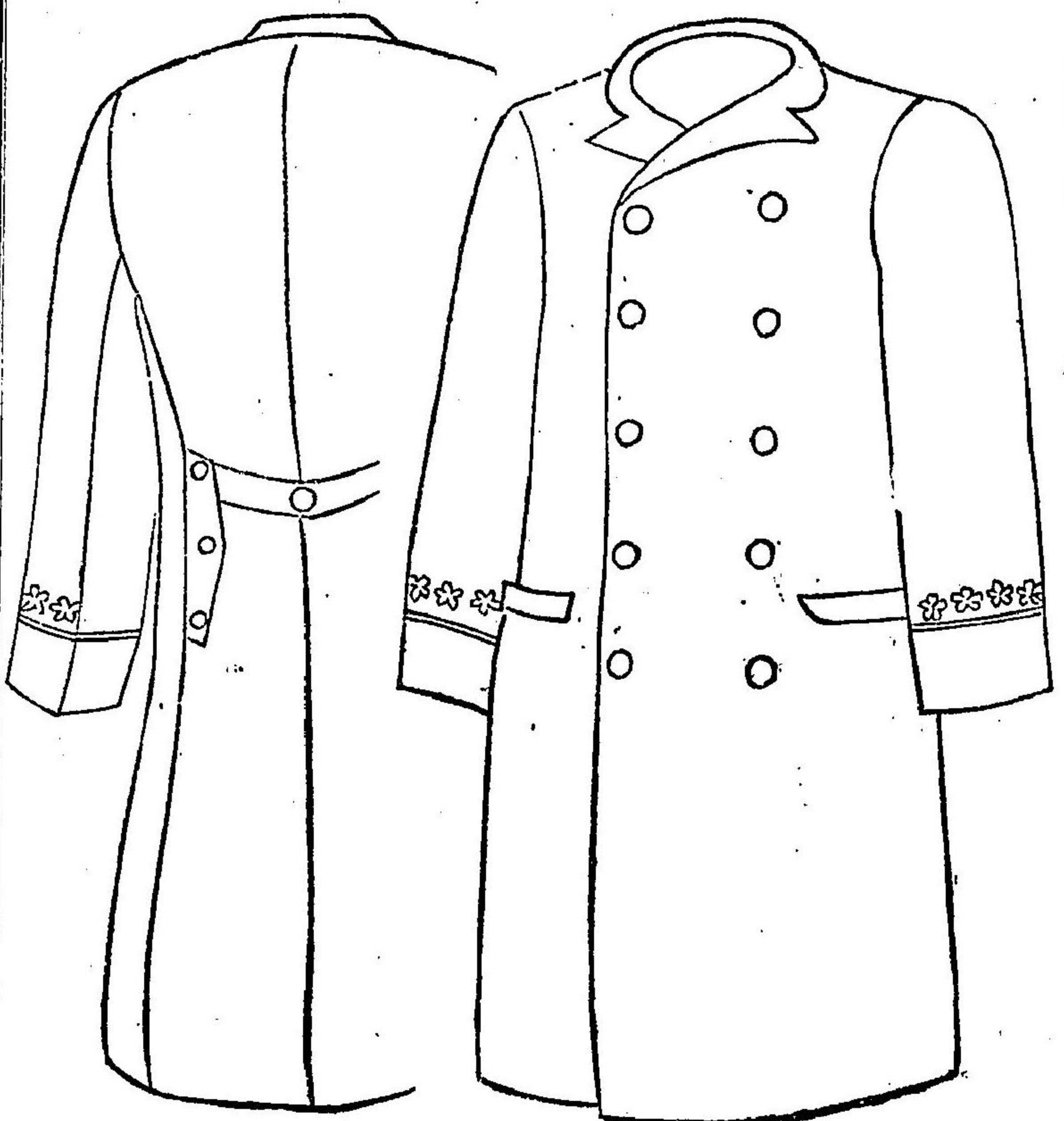
冬服上衣
港務局長

備考	袖章ハ袖口ノ上部三寸ヨリ附ス	襖	
		鈕	袖章
新羅紗圖ノ如シ	同	胸一號形 附六箇充二行後 面腰部ニ七箇ヲ 附ス圖ノ如シ	幅一分ノ黒練一 條ヲ附シ其上部 表面ニ金ノ櫻花 四箇ヲ附ス圖ノ 如シ
同上	同上	同上	同ノ櫻花三箇ヲ 附ス圖ノ如シ 但警官ハ金ノ 櫻花ヲ銀ノ櫻 花ニ換フ
同上	同上	同上	同ノ櫻花二箇 ヲ附ス圖ノ如 シ
同上	同上	二號形	
同上	同上	同上	

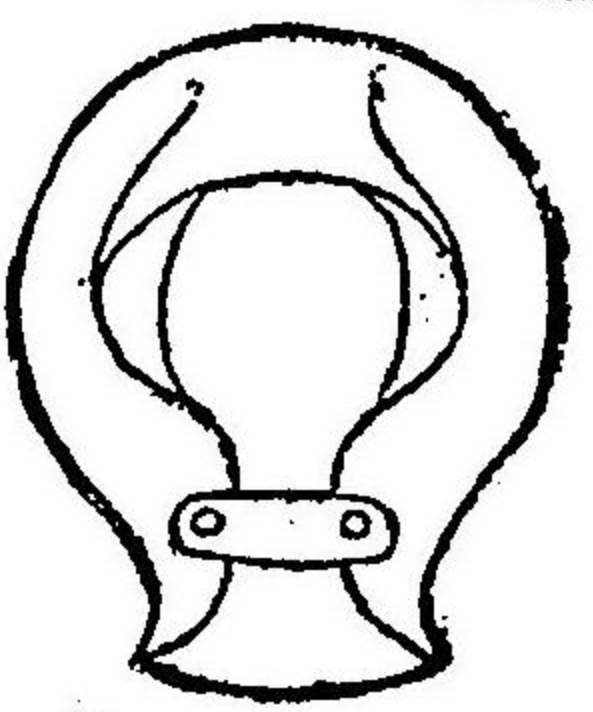
外	夏服						冬服							
	袴		衣		上		袴		衣		上			
製式	地質	製式	地質	鈕	袖章	製式	地質	製式	地質	鈕	袖章	製式	地質	
フーシ ン ノ 如 シ	折襟 胸ニ 重 後 面	冬服 ニ 同 シ	白 綿 リ ン テ ル	冬服 ニ 同 シ	冬服 ニ 同 シ	冬服 ニ 同 シ	白 綿 リ ン テ ル	普通 ノ 製 式	紺 羅 紗	胸一 號形 附六 箇一 行	金ノ 櫻花 四箇 ヲ附 ス圖 ノ如 シ	幅一 寸ノ 黒練 一條 ヲ附 シ其 下部 表面 ニ金 ノ櫻 花六 分五 箇ヲ 附ス 圖ノ 如シ	長シ ヤケ ツト 製	紺 羅 紗
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	換 線 金 ノ 櫻 花 ニ 銀 ノ 櫻 花 ヲ 換 フ	幅一 寸ノ 黒練 一條 ヲ附 シ其 下部 表面 ニ金 ノ櫻 花六 分五 箇ヲ 附ス 圖ノ 如シ	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	シ 金ノ 櫻花 二箇 ヲ附 ス圖 ノ如 シ	同上	同上	同上
同上	同上	同上	白綿 リン テ ル	冬服 ニ 同 シ	冬服 ニ 同 シ 但 黒練 ヲ白 練 ニ 換 フ	同上	白綿 リン テ ル	同上	紺 羅 紗 或 ハ ヘ ル	二 號形 同上	シ 金ノ 櫻花 二箇 ヲ附 ス圖 ノ如 シ	幅一 寸ノ 黒練 一條 ヲ附 シ其 下部 表面 ニ金 ノ櫻 花六 分五 箇ヲ 附ス 圖ノ 如シ	同上	紺 羅 紗 或 ハ ヘ ル
同上	同上	同上	同上	同上	冬服 ニ 同 シ 但 黒練 ヲ白 練 ニ 換 フ	同上	同上	同上	同上	同上	シ 金ノ 櫻花 一箇 ヲ附 ス圖 ノ如 シ	同上	同上	同上



外套
港務局長

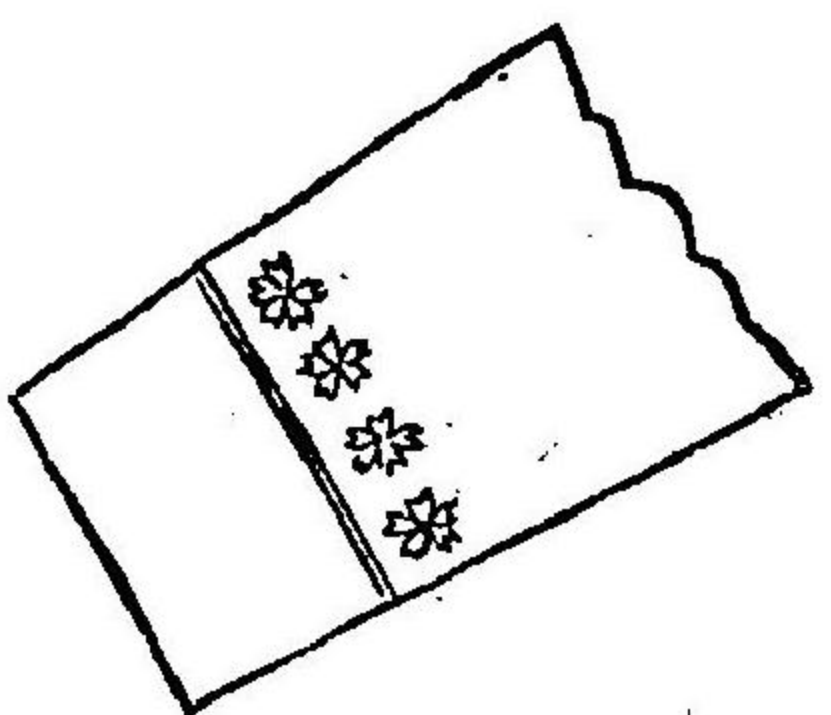


同
港務官

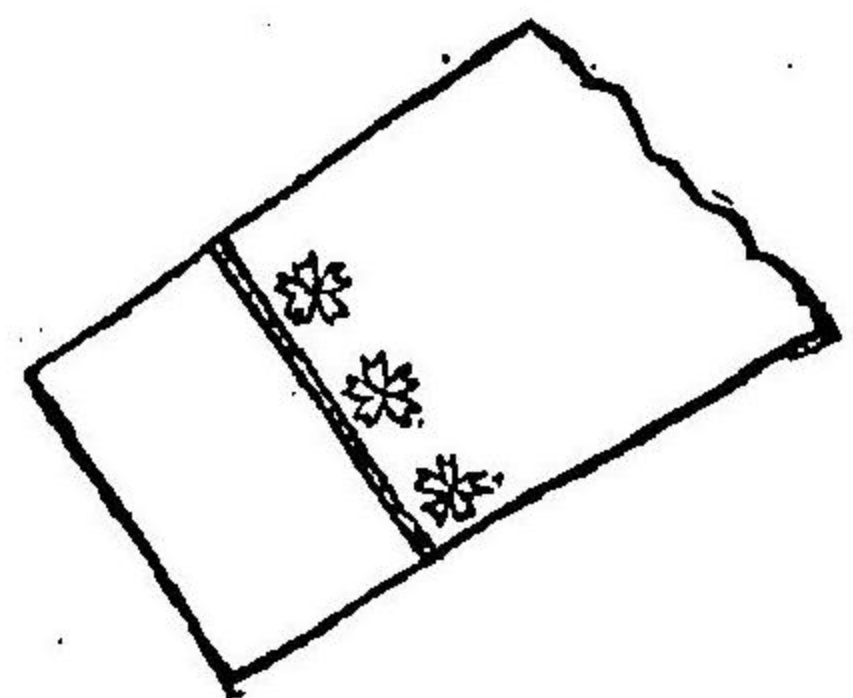


外套袖章

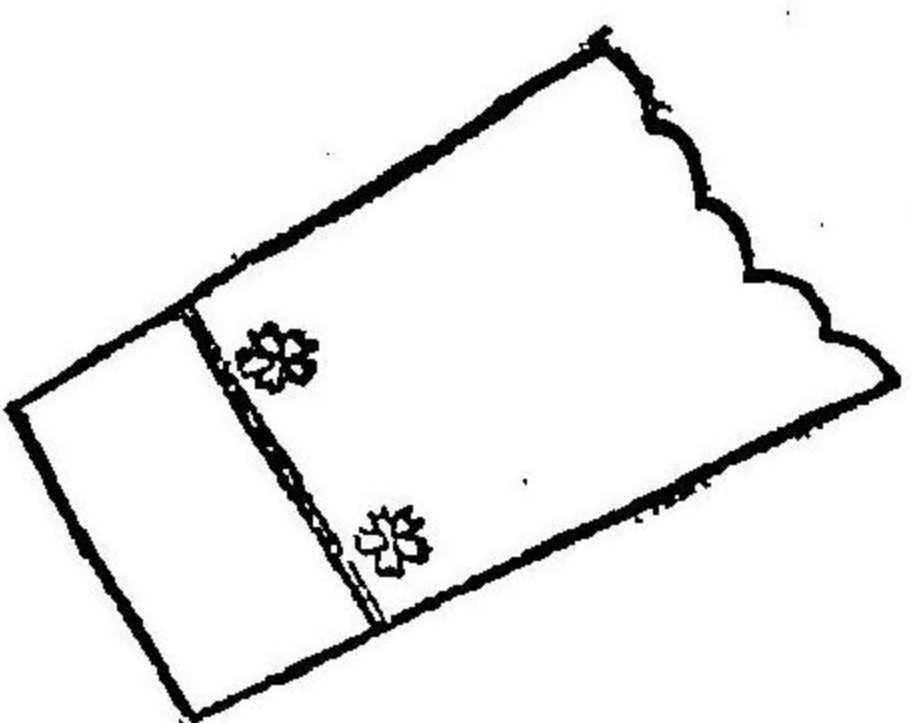
港務局長



港務官



港務官補



○港務局長以下服裝規程 明治卅一年九月廿六日
港務局長以下服裝規程左ノ通定ム
港務局長以下服裝規程 港務局長以下服裝規程

第一條 港務局長港務官港務官補港吏港吏補其職務ヲ行フトキハ明治三十一年勅令第二百
十八號ニ定ムル制服ヲ着用スヘシ

第二條 港務局長以下禮裝ノトキハ一般規定スル相當官ノ禮服ヲ着用スヘシ

第三條 制服ノ着用期限ハ左ノ如シ
一 冬服 自十月一日至五月三十一日
一 夏服 自六月一日至九月三十日

○港務局所屬繫船浮標使用料規則 明治卅一年十月七日
港務局所屬繫船浮標使用料規程左ノ通相定ム
港務局所屬繫船浮標使港料規程

第一條 繫船浮標使用料ハ使用時間二十四時ニ付三圓トス但二十四時未滿ノ端數ハ二十四時トシテ計算ス

第二條 前條ノ使用時間ハ港務局ニ於テ使用指定ノ時ヨリ起算ス

第三條 既納ノ繫船浮標使用料ハ使用者ニ於テ實際使用セサルトキト雖モ之ヲ還付セス

○横濱神戸長崎港ニ開港港則實施明治卅一年九月八日 逕信省告示第二百卅一號

明治三十一年勅令第三百二十九號開港港則ハ來十月十日ヨリ横濱港ニ同十一月一日ヨリ神戸港及長崎港ニ之ヲ實施ス

○横濱港規程明治卅一年九月八日 横濱港務局告示第一號

第一條 横濱港内ヲ四區ニ別チ軍艦汽船帆船及雜種船ノ碇泊所トス

第二條 新波止場立標ヨリ北東二分ノ一北ニ向ヒ防波堤立標マテ直線ヲ引キ此線ヨリ直角ニ北西二分ノ一西ニ當ル防波堤内ヲ第一區トス

前項直線ヨリ直角ニ南東二分ノ一東ニ當ル防波堤内ヲ第二區トス

白色燈臺ヨリ正東ニ向ヒ港界線マテ引キタル一線ヨリ直角ニ正南ニ當ル港内ヲ第三區トス 赤色燈台ヨリ正東ニ向ヒ港界線マテ引キタル一線ヨリ直角ニ正北ニ當ル港内ヲ第四區トス

第三條 前條ニ定ムル第一區及第二區ヲ汽船小帆船及雜種船ノ碇泊所トス

第三區ヲ軍艦ノ碇泊所トス

第四區ヲ爆發物又ハ容易ニ燃燒スヘキ物料ヲ搭載スル船舶及登簿噸數三百噸以上ノ帆船ノ碇泊所トス

第四條 軍艦ノ碇泊所ハ第三區内ニ限ルト雖モ港長ハ時宜ニ依リ防波堤内ニ碇泊スルコトヲ許可スルコトアルベシ但水雷驅逐艇及水雷艇ハ防波堤内ニ於テ港長ノ示定シタル場所ニ碇泊ス

ルコトヲ得

第五條 港界内ニ在ル船舶風波ノ爲メ避難セントスル場合ニ於テハ港務局ノ許可ヲ待タズシテ適宜ノ碇地ニ就クコトヲ得

第六條 防波堤内ニ入ルベキ航路ハ兩防波堤ノ極端ニ在ル各燈臺ヨリ東西ニ走ル所ノ二並行線内トス但該航路ノ延長ハ防波堤外ニ於テハ該燈台ヨリ半海運防波堤内ニ於テハ二鍵宇トス

第七條 荒天ノ場合ニ於テハ港長ハ特ニ燈船ニ於テ信號ヲ以テ入港船舶ノ碇泊スヘキ浮標又ハ碇地ヲ指示ス

第八條 入港ノ船舶港長ノ示定シタル泊船所ニ到着シタルトキハ常ニ雙錨ヲ投シ碇泊スヘシ

第九條 日没後入港シタル船舶ハ日出ニ至ルマデ防波堤外ニ於テ航路ヲ避ケ碇泊スベシ但定期郵便船ニシテ豫メ繫船浮標若クハ泊船所ノ示定ヲ受ケタルモノハ天候其他ノ事情ニ於テ許ス限ハ直ニ之ニ向テ進入スルコトヲ得

第十條 總テ船舶ハ碇泊中軍艦ヲ除ク外「スウインキングブーム」ヲ用ユルコトヲ得ズ但防波堤外ニ於テハ此限ニアラズ

第十一條 汽船防波堤外ニ屬スル港界内ヲ運航スルトキハ半速力ヲ超ユベカラズ防波堤ノ入口ヲ通過シ若クハ防波堤内ヲ運航スルトキハ船ノ安全ナル針路ヲ保ツニ足ルノ速力ニ止ムベシ又帆船ハ帆ヲ減シテ徐行シ若クハ曳船ヲ用ユベシ

第十二條 總テ船舶ハ航路内及防波堤内ニ於テ他船ノ前路ヲ横切り又ハ追越テナス可ラズ

第十三條 總テ船舶ハ互ニ他船ノ運航及投錨ヲ妨害スベカラズ

第十四條 汽船防波堤内ニ於テ曳船ヲ爲サントスルトキハ特ニ港務局ノ允許ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外左ノ制限ニ從フベシ

- 一 荷船又ハ端艇ヲ曳クトキハ曳船ノ艦ヨリ被曳船ノ船尾ニ至ルマデノ距離三百五十尺ヲ超ユ可ラズ
 - 二 荷船又ハ端艇ハ二隻ヲ限リ並列シテ曳クコトヲ得
 - 三 航洋船ハ一隻以上ヲ曳クコトヲ得ス
 - 第十五條 總テ船舶ハ西波止塲税關棧橋ノ周圍六百尺以内ニ入ルベカラズ但棧橋ニ横着ケスル船舶ハ此限ニアラズ
 - 第十六條 總テ位置ヲ變更セントスル船舶ハ綱ヲ浮標其他棧橋ニ執ルニ際シ必要外ニ之ヲ延長ス可カラズ
 - 第十七條 警報信號ハ港務局構内ニ在ル信號竿ニ之ヲ掲グ
 - 第十八條 繫船浮標ニ繫留スル船舶荒天ニ際シ尙本船ノ錨ヲ投セントスルトキハ該浮標ニ結著シタル錨鎖一節ヲ延長シタル後投錨スベシ
 - 第十九條 港内碇泊若クハ運航ニ關シテハ本規程ニ定ムルモノ、外總テ海上衝突豫防法ニ依ルヘシ
- 神戸港規程明治卅一年十月七日
神戸港務局告示第一號
- 第一條 神戸港内ヲ三區ニ分テ第五條ニ規定スル航路ヲ除キ軍艦汽船帆船及雜種船ノ碇泊所トス
 - 第一區トス
湊川埵東端ヨリ正東ニ向ヒ引キタル線ト舊生田川口ヨリ南方ニ向ヒ引キタル港界線トノ間ヲ第一區トス
 - 湊川埵東端ヨリ正東ニ向ヒ引キタル線ト正南ニ向ヒ引キタル線トノ間ヲ第二區トス
 - 湊川埵東端ヨリ正南ニ向ヒ引キタル線ト和田岬ヨリ東北ニ向ヒ引キタル港界線トノ間ヲ第三區トス

區トス

- 第二條 前條ニ定ムル第一區及第三區ヲ漁船帆船及雜種船ノ碇泊所トシ第二區ヲ軍艦ノ碇泊所トス但小形軍艦ハ港長ノ示定シタル他ノ場所ニ碇泊スルコトヲ得
- 湊川埵東端ヨリ正東ニ向ヒ引キタル線即チ第一區ト第二區トノ境界線及湊川埵東端ヨリ正南ニ向ヒ引キタル線即チ第二區ト第三區トノ境界線ニ當ル場所ハ商船ノ碇泊所トス
- 第三條 雜種小形船ハ第一區及第三區内航路ノ内方ニ於テ其船首ヲ外方ニ向ケ整列シテ碇泊スヘシ
- 第四條 港内航路ヲ分テ左ノ四種トス
辨天濱ニ設置シタル赤色立標ト神戸西波止塲防波堤極端ニアル燈竿トヲ通シテ南八十三度東ニ向ヒ港界線マデ引キタル線ノ南七度西半鐘ノ場所ヲ第一種トス
辨天濱北端ニ設置シタル白色立標ト辨天濱防波堤極端ニ設置シタル白色立標トヲ通シテ南微東四分ノ一東ニ向ヒ第三航路マデ引キタル線ノ東微北四分ノ一北半鐘ノ場所ヲ第二種トス
湊川埵ニ設置シタル二箇ノ白色立標ヲ通シテ南東ニ向ヒ港界線マデ引キタル線ト湊川埵ニ設置シタル二箇ノ赤色立標ヲ通シテ南東ニ向ヒ港界線マデ引キタル線トノ中間ヲ第三種トス
兵庫陸揚塲ニ設置シタル二箇ノ赤色立標ヲ通シテ正東ニ向ヒ第三航路マデ引キタル線ノ正南半鐘ノ場所ヲ第四種トス
- 第五條 總噸數六百噸以下ノ漁船ニシテ神戸西波止塲及兵庫陸揚塲又ハ其附近ニ運航スルモノハ左ノ規定ニ依ルベシ
大阪方面ヨリ神戸西波止塲ニ向ヒ若ハ神戸西波止塲ヨリ大阪方面ニ向ヒ運航スルトキハ第一種ノ航路ヲ取ルベシ

海上ヨリ神戸西波止場ニ向ヒ若ハ神戸西波止港ヨリ海上ニ向ヒ運航スルトキハ第二種及第三種ノ航路ヲ取ルベシ

大阪若ハ海上ヨリ兵庫陸揚場ニ向ヒ又ハ兵庫陸揚場ヨリ海上若ハ大阪ニ向ヒ運航スルトキハ第三種及第四種ノ航路ヲ取ルベシ

神戸西波止場ヨリ兵庫陸揚場ニ向ヒ若ハ兵庫陸揚場ヨリ神戸西波止場ニ向ヒ運航スルトキハ第二種第三種及第四種ノ航路ヲ取ルベシ

第六條 汽船神戸港内ヲ運航スルトキハ船ノ安全ナル針路ヲ保ツニ足ル速力ニ止ムヘシ又帆船ハ帆ヲ減シテ徐行シ若ハ曳船ヲ用ユベシ

第七條 第五條第一項ニ示定シタル汽船ニシテ海上ヨリ兵庫陸揚場ニ至ラントスルニ際シ神戸西波止場ヨリ海上ニ向ヒ運航スル同種ノ船舶ト湊川崎附近ニ於テ行逢フトキハ汽笛短聲ヲ四發シテ其兵庫陸揚場ニ至ルヘキコトヲ他船ニ示スヘシ且事宜ニ依リ速力ヲ緩メ又ハ機關ヲ停止シ若ハ後退スベシ

第八條 總テ船舶ハ衝突ノ虞アルトキハ航路ヲ横切り或ハ之ニ進入スベカラズ

第九條 總テ船舶ハ衝突ノ虞アルトキハ港界内ニ於テ追起ヲナシ又ハ竝行スベカラズ

第十條 總テ船舶ハ港界内ニ於テハ他船ノ後部ニ接近シテ運航シ又ハ他船ノ前路ヲ横切ルヲ得ス

第十一條 總テ船舶ハ互ニ運航及投錨ヲ防害スヘカラズ

第十二條 入港ノ船舶港長ノ指定シタル泊船所ニ到着シタルトキハ常ニ雙錨ヲ投シテ碇泊スベシ但定期郵便汽船又ハ定期汽船ニシテ六時間以内ニ出航セントスルモノハ港長ノ許可ヲ得單錨ヲ投シテ碇泊スルコトヲ得

第十三條 爆發物若ハ容易ニ燃燒スヘキ物料ヲ搭載シタル船舶ハ和田岬ノ東北港界外ニ於テ港長ノ指揮ヲ待ツヘシ

第十四條 汽船港界内ニ於テ曳船ヲ爲サントスル時ハ特ニ港務局ノ允許ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外左ノ制限ニ從フヘシ

一 荷船及端艇ヲ曳ク時ハ曳船ノ艫ヨリ被曳船ノ船尾ニ至ルマテノ距離三百五十尺ヲ越ユヘカラズ

二 荷船又ハ端艇ハ二艘ヲ限リ竝列シテ曳クコトヲ得

三 航洋船ハ一艘以上ヲ曳クコトヲ得ス

第十五條 總テ船舶ハ波止場若ハ運河ノ入口又ハ船渠及棧橋等ノ附近ニ停留スベカラズ但波止場若ハ船渠ニ進入シ又ハ棧橋ヲ使用セントスルモノハ此限ニアラズ

第十六條 總テ荷船及端艇又ハ汽艇ハ止ムヲ得ザル場合ノ外船舶ノ後部ニ繫留スベカラズ

第十七條 總テ位置ヲ變更セントスル船舶綱ヲ浮標其他棧橋等ニ執ルニ際シ必要外ニ之ヲ延長スベカラズ又必要ノ時間外ニ渉ルコトヲ得ズ

第十八條 總テ船舶ハ碇泊中軍艦ヲ除クノ外「スウキンキングブーム」ヲ用ユルコトヲ得ズ

第十九條 警報其他船舶ニ關スル信號ハ湊川崎ニ於テ之ヲナス

第二十條 繫船浮標ニ繫留スル船舶荒天ニ際シ尙ホ本船ノ錨ヲ投セントスルトキハ該浮標ニ結着シタル錨鎖ヲ延長シタル後投錨スベシ

第二十一條 港界内ニアル船舶風波其他災害ノ爲メニ避難セントスル場合ニハ港務局ノ許可ヲ待タスシテ適宜ノ錨地ニ就クコトヲ得

第二十二條 日没後來着シタル船舶ハ日出マテ港界外ニ於テ航路ヲ避ケ停留スベシ但定期郵便

漁船其他ノ船舶ニシテ豫メ港長ヨリ繫船浮標若ハ泊船所ノ示定ヲ受ケタルモノハ天候其他ノ事情ニ於テ許ス限リハ直ニ之ニ向テ進入スルコトヲ得

第二十三條 港内碇泊若ハ運航ニ關シテハ本規程ニ定ムルモノ、外海上衝突豫防法ニ依ルヘシ

○長崎港務局規程

長崎港務局告示第一號

長崎港規程明治卅一年十月十八日
長崎港務局告示第一號

第一條 長崎港内ヲ三區ニ別チ軍艦、汽船、帆船及雜種船ノ碇泊所トス

第二條 出島立標ヨリ(方位西二分一北)横瀬ヲ通シテ對岸瀬ノ脇立標ニ至ル直線以北ヲ第一區トシ小菅修船所入口ノ立標ヨリ(方位北西微北)立神浮標ニ至リ又該浮標ヨリ(方位西四分三

南)遠見鼻立標ニ至ル鈍角線以北第一區界線マデヲ第二區トシ港界線以北第二區境界線マデ

ヲ第三區トス

第三條 第一區ハ登簿噸數三百噸未満ノ船舶及雜種船ノ碇泊所トス

第二區ノ中央部ハ登簿噸數三百噸以上ノ船舶ノ碇泊トシ東沿岸即チ出島立標ヨリ(方位南西

微南)浪ノ平立標ニ至ル線内ハ小帆船及雜種船ノ碇泊所トシ西沿岸即チ飽ノ浦及立神造船所

附近ハ修理船ノ繫留場トス

第三區ノ内立神浮標ヨリ南西二分一南ニ向ヒ港界線マデ引キタル線以西ハ軍艦ノ碇泊所トシ

其東岸女神鼻ヨリ(方位北東)小菅鼻ニ至ル線内即チ戸町澳ハ小帆船及雜種船ノ碇泊所トス

第四條 港界内船舶出入ノ航路ハ立神浮標ヨリ南西二分一南ニ向ヒ港界線マデ引キタル線ノ東

側中戸町澳ヲ除キタル部分トス

第五條 港長ハ必要ニ際シ第三條第三項ノ規定ニ拘ハラズ軍艦ノ碇泊所ヲ第二區内ニ示定スル

コトアルヘシ

第六條 汽船港界内ヲ運航スルトキハ安全ノ針路ヲ保ツニ足ルノ速力ニ止メ帆船ニ在テハ帆船

減シテ徐行シ若クハ曳船ヲ使用スヘシ但逆風ニ遇リ帆走スルコトヲ得ス

第七條 總テ船舶ハ互ニ他船ノ運航若クハ投錨ヲ妨害スヘカラス

第八條 總テ船舶ハ港界内ニ於テ他船ノ前路ヲ横斷シ又ハ追越ヲ爲スヘカラス

第九條 入港ノ船舶港長ノ示所シタル泊船所ニ到着シタルトキハ必ず雙錨ヲ投シテ碇泊スヘシ

第十條 日没後來着シタル船舶ハ日出ニ至ルマテ港界外ニ於テ航路ノ入口ヲ避ケ停留スヘシ但

シ郵便汽船其他ノ船舶ニシテ豫メ泊船所ノ示定ヲ受ケタルモノハ天候其他ノ事情ニ於テ許ス

限リハ之ニ向テ進入スルコトヲ得

第十一條 荒天ニ港シ入港スル船舶ニ對シテハ港長ハ女神見張所ヨリ信號ヲ以テ錨地ヲ指示ス

第十二條 總テ船舶ハ碇泊中軍艦ヲ除クノ外「スウキンキングブーム」ヲ用ユルコトヲ得ズ

第十三條 總テ荷船端艇又ハ舢舨ハ船舶ノ後部ニ繫留スヘカラス

第十四條 總テ位置ヲ變更セントスル船舶ハ綱ヲ浮標、埠頭、棧橋若クハ他ノ船舶ニ執ルニ際シ

必要外ニ之ヲ延長スヘカラス

第十五條 汽船港界内ニ於テ曳船ヲ爲サントスルトキハ特ニ港務局ノ允許ヲ受ケタル場合ヲ除

クノ外左ノ制限ニ從フヘシ

一 端艇若クハ舢舨ハ三艘荷船水船ハ二艘ヲ限リ曳クコトヲ得

二 航洋船ハ一艘ヲ限リ曳クコトヲ得

第十六條 警報信號ハ長崎縣構内ニ在ル信號竿ニ之ヲ掲グ

第十七條 繫船浮標ニ繫留スル船舶荒天ニ際シ尙本船ノ錨ヲ投ゼントスルトキハ該浮標ニ結著

シタル錨鎖ヲ適宜ニ延長シタル後投錨スヘシ

第十八條 港内碇泊若クハ運航ニ關シテハ本規程ニ定ムルモノ、海上衝突豫防法ニ據ルヘシ

○開港港則施行港ニ入港セントスル船舶ニシテ傳染アリタル者
寄停検査ノ件 明治十二年九月五日
内務省告示第八十五號

開港港則施行ノ港ニ入港セントスル船舶ニシテ航海中流行病若クハ傳染病アリタルモノハ横濱

港ニ在リテハ長濱ニ神戸港ニ在リテハ和田岬ニ長崎港ニ在リテハ女神ニ寄停シテ検査官ノ検査

ヲ受クヘシ

開港港則施行ノ港ニ碇泊中流行病若クハ傳染病ヲ發生シタル船舶ハ當該官吏ノ命アルトキハ横

濱港ニ在リテハ長濱ニ神戸港ニ在リテハ和田岬ニ長崎港ニ在リテハ女神ニ回航シテ検査官ノ

検査ヲ受クヘシ

○検査停船規則 明治十二年七月
第二十九號告示

明治十二年七月第二十八號告示海港虎列刺病傳染豫防規則別冊ノ通更正シ検査停船港則ト改稱候

條此旨布告候事

(別冊)

検査停船規則

第一條 日本政府ハ虎列刺病ノ蔓延ヲ防カンカタメニ茲ニ左ニ掲グル規則ヲ開港場ニ施行スル

トナ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ令スル迄ハ之ヲ實施スルモノトス

第二條 中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及ヒ至當ノ教育ヲ受ケ能ク職任ニ堪ユヘキ日

本又ハ外國醫士化學士及ヒ相當ノ助役ヲ以テ地方検査局ヲ設置ス可シ而シテ其局員ノ數ハ其

港入船ノ多寡ニ應ジテ増減アルヘシト雖検査一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ差支ナキヲ以テ足

レリトス可シ

都テ此地方検査局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ

第三條 政府ハ検査停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定メ且虎列刺患者ヲ容ルヘキ

病院並ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ病院ヲ建設シ且遺憾ナ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘ

キ場所並ニ停留セラレタル人ノタメ都テ必要ノ具ヲ備ヘタル屋舎ヲ設置スヘシ

第四條 検査信號旗ヲ揚ケタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港ノ前検査ノ爲メ之ヲ停止シ

地方検査局ノ人員少クトモ二名ヲ派出シテ之ヲ検査スヘシ但右局員ノ内一名ハ必ス醫士タル

ヘシ而シテ船長醫士或ハ船内ノ人ハ誰ニテモ検査官ノ尋問ニ對シ都テ之ニ應答シ又所定ノ式

紙ニ事項ヲ記入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出スヘシ

船長ハ検査官吏ノ求メニ應ジ船内ノ各部ヲ開キ検査ヲ受クヘシ但シ船ハ航海中船客又ハ乗組

人ニテ占居シタルトキ又ハ他ノ事故ニ依テ病毒ニ感染シタル恐アルトキハ其検査ヲ受クヘシ

検査官吏ハ該船ノ航海日誌ヲ査閱シ乗組人及ヒ船客ノ人名録ヲ船内現在ノ人員ト引合ハスト

ヲ得ヘシ

第五條 虎列刺病流行セサル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル船ノ船長ハ明告書及其他ノ手續ヲ

以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船舶若クハ其疑アルモノト直ニ交通セ

ス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發セシモノ無キ旨ヲ證明シテ検査官吏ヲ満足

セシムルトキハ該船ハ直ニ入港スルヲ得ヘシ

軍艦ハ其艦長及醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル迄ニテ足レリトスヘシ而シ

テ該艦ハ検査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖若シ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ検査停船規則ニ從

フヘシ

第六條 船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ニ罹リタル者無シト雖有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若クハ其疑アルモノト交通シタル船舶及ヒ船内ノ人員ハ其港ヨリ出港ノ日又ハ有病若クハ其疑アル船ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ツル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ時間ヲ短縮スルトモ差支ナキヲ認ムルトキハ此限ニアラス

右七日ノ期該船來着ノ上又ハ其前既ニ過キ去ルトキハ消毒法ヲ行ヒシ上速ニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ

一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハス自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或ハ行ハサルヘシト雖襪布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ殊ニ危険ナリト見込ムモノハ消毒法ヲ行フヘシ

消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速ニ陸揚スルヲ得ヘシト雖消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ定期滿ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及疑似症ヲ發スルトキハ其船及ヒ人員物品ハ都テ第八條第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第七條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前七日以內艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシト無ク又ハ病海感染ノ恐ナク且航海中艦内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシト無キ旨ヲ明告スルトキハ直ニ入港スルヲ得ヘシ右ノ書面ヲ差出ササルトキハ該艦ハ檢疫停船規則ニ從ハシムヘシ

第八條 船舶來港ノ上其船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルトキハ檢疫官吏ニテ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシ日ヨリ起算シテ七日ノ間停船セシムヘシ船舶來港前病消毒滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以テ消毒法ヲ施行セル上ハ地方檢

疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ

消毒法施行後停船中眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルトキハ地方檢疫局ノ必要ト考斷スル程消毒法ヲ反覆施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムヘシ最初定メタル時限猶三日以上アルトキハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムヘシ

患者及ヒ死者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第九條 前條ニ記スルカ如キ船舶ノ來着スルニ方リ其乗組ノ患者未タ癒ヘサレハ其容體ニ依リ之ヲ避病院ニ移シ若シ己ニ死シテ遺骸ノ處置未タ済マサルハ其爲メニ設ケタル場所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ミニ任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スヘシ患者及ヒ遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣類其他ノ物品及ヒ船内何レノ部分ニテモ病海感染ノ恐レアル者ハ地方檢疫局ニ於テ指示セル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法ヲ施ス爲メ要用ノ人ト船中ヲ取締ルヘキ人トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲メ特ニ設ケル所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ殘リタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受クルカ又ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之ヲ受クヘシ

第十條 有病ノ者或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖其港ニ於テ檢疫處置ヲ受ケサル船舶ハ直ニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルモノト認メ處置スヘシ

第十一條 定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ着港ノ上速ニ其郵便物ヲ運送スルヲ得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及ヒ必要品ヲ受クルヲ得ヘシ病院或ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ違シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルコトヲ得ヘシ

患者ハ醫士ヨリ退院ヲ許ス迄ハ病院ヲ退去スルコトヲ得ス

第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルコトナキ時ハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置クコトヲ得ヘシ又ハ地方檢疫局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サル、コトアルヘシ

第十四條 檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺ノ原因ナラント思考スル疑似ノ病徵ヲ發スル者アルハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ其病症ヲ審斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クハカラス而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘシ

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ貨物積込ノ爲途中檢疫所ノ設ケアル無報ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ノ検査ヲ經且ツ必要ト認メタル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ

又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルトキハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但該船内ヨリ上陸スル者アルトキハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スシ

第十六條 船舶ノ検査ハ其來着後成ルヘク速ニ施行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ検査ヲ爲サ、ル時ハ入港スルヲ得ヘシ但其遲延天氣惡キガ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メ港又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所業或ハ詐偽ニ出ツルカノハ此限ニアラス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタルトキ検査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時間ニ完了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其責アル船ヨリ辨償スヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ

然リト雖若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タル時ハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル丈ケノミノ消毒及検査ノ方法ヲ反復施行スヘシ

第十九條 虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶検査消毒法患者及死者ノ處置ヲ爲スハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖船及ヒ人員停留ノ規則ハ休止スヘシ

第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危険ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルキハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スコトヲ得可シ其場合ニ方リテ地方檢疫局ハ直チニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之レヲ該船ノ船長船主又ハ其用途ニ付與スヘシ

第二十一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ許可ナクシテ往クコトヲ許サス

第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカヲサル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ

第二十三條 此規則ニ背ムキ或ハ從フコトヲ拒ム者ハ犯ス毎トニ貳百圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ若シ其船長船主若クハ其船ノ用途又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此ノ規則ニ背

勅令第二編第五章
第三節及第四編第
四百二十六條第四
項參看
十四年第七十二號
勅令別例處斷方參

キ或ヒハ從フコトヲ拒ムトキハ每犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルコトアルヘシ
此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルハ民事ノ訴訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ
但罰金ハ科セサルヘシ

此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且ツ即時停留場ニ返ラシムヘシ

○虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則明治十五年六月第三十一號布告
虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則左ノ通制定ス

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

第一條 凡虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ検査官ノ検査ヲ受ケ其記名セル許可ノ證書ヲ得タル後ニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲スヘカラス

第二條 其船中該患者又ハ該病死者ナキハ検査官直チニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲スノ許可ヲ與フヘシ
但検査官ニ於テ必要ト認ムルハ其船舶ヲ四十八時間以内其指定セル場所ニ碇泊セシメ十分ノ消毒法ヲ施スコトヲ得

第三條 若シ其船中ニ該患者又ハ該病死者アルトキハ検査官其船舶ヲ陸地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシムヘシ
該病患者ハ之ヲ避病院若クハ其住居若クハ其他検査官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ若シ縁故人ノ望アルトキハ其望ニ隨ヒ 地方官所定ノ場所ニ火葬シ若クハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬スヘシ

前項ノ手續ヲ終リ検査官ハ其乗組人船客ニ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘシ

十八年第九號布告ヲ以テ但書追加

其船舶及傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ積荷ヲ陸揚スルノ許可ヲ與フヘシ

第四條 此規則ニ違背シタル者若クハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分スベシ

第五條 此規則執行始期ノ期日并ニ場所ハ其都度内務卿ヨリ之ヲ指定ス可シ

○海外諸港ヨリ來ル船舶検査ノ件明治二十四年六月二十二日勅令第六十五號

朕海外諸港ヨリ來ル船舶ニ對シ検査ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 虎列刺病流行地方ニアラサルモ該病傳播ノ虞アリト認メ内務大臣ニ於テ特ニ指定シタル外國諸港ヨリ來ル船舶ニ對シテハ検査官モシテ該病患者又ハ該病死者ノ有無ヲ尋問セシム

第二條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アルトキハ検査官其船舶ヲ陸地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシム可シ

該病患者ハ之ヲ避病院若クハ其住居若クハ其他検査官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ若シ縁故人ノ望アルトキハ其望ニ隨ヒ 地方官所定ノ場所ニ火葬シ若クハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬ス可シ

前項ノ手續ヲ終リ検査官ハ其乗組人船客ニ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ積荷ヲ陸揚スルノ許可ヲ與フ可シ

第三條 第一條ノ尋問ヲ拒ミ又ハ第二條ニ違背シ其他本令ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ據テ處分セラル可シ

第四條 本令執行始終ノ期日並ニ場所ハ其都度内務大臣之ヲ指定ス可シ

○船舶檢疫規則 明治三十年七月十九日
内務省令第二十號

傳染病豫防法第十八條ニ依リ船舶檢疫規則左ノ通定ム

船舶檢疫規則

- 第一條 府縣知事東京府ハ警視總監船舶檢疫ヲ施行セントスルトキハ檢疫スヘキ傳染病及其ノ目的地方ヲ指定シ檢疫施行ノ場所及開始ノ期日ヲ定メテ内務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ告示シ併セテ關係府縣廳東京府ハ警視廳ニ通知スヘシ其ノ廢止ノトキ亦之ニ準ス
- 第二條 府縣知事東京府ハ警視總監於テ本條ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ旨ヲ告示スヘシ
- 第三條 府縣知事東京府ハ警視總監ノ指定シタル地方ヲ發シ又ハ其ノ地方ヲ經テ檢疫ヲ施行スル港ニ來ル船舶ハ檢疫掛員ノ尋問又ハ検査ヲ受ケ其ノ認可ヲ得タル後ニアラサレハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ乘客乗組人ヲ上陸セシメ又ハ積荷手荷物ノ陸揚ヲ爲スヘカラス
- 第四條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者ナキ船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第五條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第六條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第七條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第八條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第九條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得
- 第十條 航行中又ハ現ニ傳染病患者者若クハ死者アリタル船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得

セシムルコトヲ得

- 第五條 船舶中傳染病患者又ハ死者アリタル場合ト雖モ乘客乗組人中患者死者ト飲食起臥ヲ共ニシタル等ニ依リ檢疫掛員ニ於テ病毒感染ノ虞アリト認ムル者ノ外ハ消毒方法ヲ施行シタル後直ニ上陸ヲ許可スルコトヲ得
- 第六條 船舶中傳染病患者又ハ死者アリタル場合ト雖モ積荷手荷物ハ消毒方法ヲ施行シタル後直ニ陸揚ヲ許可スルコトヲ得但檢疫掛員ニ於テ病毒汚染ノ虞ナシト認ムル積荷手荷物ニハ消毒セサルモ妨ナシ
- 第七條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ハ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎其ノ他適當ノ場所ニ收容治療シ死者ハ引受人ニ引渡シ若シ引受人ナキトキハ明治十五年九月布告第四十九號行旅死亡人取扱規則ニ準シ市町村長區長沖繩縣ハ區長又ハ戶長戶長ニ準スハチシテ其ノ處置ヲ爲サシムヘシ但該規則第二條末段ノ場合ニ於テハ發見地ノ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ其ノ費用ヲ支辨スヘシ
- 第八條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容中特ニ要シタル費用ニシテ該患者ヨリ徵收スヘキモノハ前條末段ニ依リ取扱ヒ其ノ本籍詳カナラサル場合又ハ身元赤貧ニシテ償却ノ途ナキ場合ニ限り發見地府縣知事ニ請求スヘシ但本條ノ費用ニシテ患者ヨリ徵收スヘカラスモノハ直ニ發見地府縣知事ニ請求スルコトヲ得
- 第九條 發見地府縣知事ハ前項ノ請求アリタルトキハ府縣稅又ハ地方稅ヨリ之ヲ支辨スヘシ
- 第十條 消毒方法ヲ施行スヘキ船舶ハ其ノ港ニ於ケル消毒設備ノ都合等ニ依リ他ノ港ニ回航セシムルコトヲ得
- 第十一條 檢疫掛員ハ職務執行上必要アルトキハ無償ニテ其ノ船舶ニ乗込ムコトヲ得此ノ場合ニ

於テハ船長若クハ事務員ニ其ノ旨ヲ通告スヘシ
第十一條 傳染病患者又ハ死者ナキ船舶ト雖モ檢疫掛員ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ニ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムルコトヲ得

附則

第十二條 船舶檢疫施行中府縣知事東京府ハ指定シタル以外ノ地ヨリ來リタル船舶又ハ其ノ港ニ碇泊中ノ船舶ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ此ノ規則ヲ準用ス
第十三條 府縣知事東京府ハ府縣知事警視總監ハ大和船漁船等ノ檢疫ニ關シ別段ノ規程ヲ設ケルコトヲ得
第十四條 明治十四年內務省達乙第四十九號傳染病豫防規則第十三條船舶検査手續ハ廢止ス
(內務省令第二十號參照)

法律第三十六號傳染病豫防法(明治三十年四月一日官報)

第十八條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ地方長官ハ檢疫委員ヲ置キ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ擔任セシメ及特ニ船舶ノ検査ヲ行ハシムルコトヲ得

船舶流車ノ検査ヲ行フ場合ニ於テハ其ノ船舶若ハ其ノ船舶流車ノ乘客乗組人ニシテ病毒感染ノ疑アル者ヲ必要ノ日時間停留シ及無償ニテ當該吏員又ハ醫師ヲ船舶流車ニ乗込マシムルコトヲ得
船舶流車ノ検査ニ於テ發見シタル患者ハ其ノ地市町村立ノ傳染病院ハ又隔離病舎ニ收容治療セシムルコトヲ得市町村ハ相當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得但シ之方爲特ニ要シタル費用ハ地方長官ニ請求スルコトヲ得
前各項ノ外檢疫委員ノ設置及船舶流車ノ検査ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○遠洋漁業獎勵法明治卅年三月卅一日
法律第四十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル遠洋漁業獎勵法ヲ裁可シ茲ニ之レヲ公布セシム
遠洋漁業獎勵法

第一條 遠洋漁業ヲ獎勵スル爲國庫ハ毎年度拾五萬圓以內ヲ支出スヘシ

第二條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミナ社員若クハ株主トスル商會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ勅令ニ於テ指定スル漁獵又ハ漁場ノ漁業ニ從事スル者ニ限り遠洋漁業獎勵金ノ下付ヲ出願スルコトヲ得

第三條 前條ニ依リ獎勵金ヲ受ケルコトヲ得ヘキ船舶ハ木製ト鐵製トナ問ハス登簿噸數百噸以上帆船六十噸以上ニシテ農商務大臣ノ定ムル船舶裝裝規程ニ合格シ其ノ乗組員ハ總員ノ五分ノ四以上帝國臣民ヲ以テ組織シタルモノニ限ル

第四條 遠洋漁業獎勵金ヲ受ケムトスル者ハ其ノ船舶ニ對シ豫メ農商務大臣ノ認許ヲ受ケルシ

第五條 農商務大臣ハ第二條ノ出願ニシテ漁業ノ組織確實ナリト認ムル者ニハ漁獵ノ種類又ハ漁獵ノ場所ニ依リ定率ヲ設ケ五箇年以內獎勵金ノ下付ヲ許可スルコトヲ得但シ左ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス

- 一 汽船登簿噸數 每一噸 一箇年五圓
- 但シ登簿噸數三百五十噸以上噸數ニ應シ増加セス
- 一 帆船登簿噸數 每一噸 一箇年五圓
- 但シ登簿噸數二百噸以上噸數ニ應シ増加セス
- 一 乘組總員 每一人 一箇年拾圓

但シ勅令ニ定ムル乘組定員以外及年齡十六歲未滿ノ者ヲ除ク

第六條 遠洋漁業獎勵金下付ノ許可期間ト雖一箇年中遠洋漁業ニ從事スルコト五箇月ニ滿タサルトキハ其ノ年ニ對シテハ獎勵金ヲ下付セス

第七條

左ニ記載スル船舶ヲ以テ遠洋漁業ニ従事スル者ニハ遠洋漁業獎勵金ヲ下付セス

- 第一 此ノ法律施行以後帝國船籍ニ登録ノ際製造後五箇年ヲ經過シタル外國製造ノ船舶
- 第二 製造後十五箇年ヲ經過シタル船舶

第八條 農商務大臣ハ第五條ノ許可ヲ受ケタル者ヲシテ遠洋漁業ニ關スル調査ヲ爲サシメ又ハ

遠洋漁業練習生ヲ該船舶ニ乗組マシムルコトヲ得

第九條 第五條ノ許可ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ遠洋漁業獎勵金ヲ受ケ漁業ニ從

事スル期間並ニ其ノ漁業ヲ終リタル日ヨリ三箇年其ノ船舶ヲ外國人ニ賣渡、交換、贈與、質入、

書入スルコトヲ得ス但シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル遠洋漁業獎勵金ヲ償還シタルトキ又ハ天災

其ノ他抗拒スヘカヲサル強制ニ因リ航行ニ堪ヘサルトキ若ハ農商務大臣ノ許可ヲ得タルトキ

ハ此ノ限ニアラス

第十條 遠洋漁業ノ監督及遠洋漁業練習生ヲ養成スルノ必要アルトキハ農商務大臣ハ第一條ニ

掲グル金額ヨリ十分ノ一以内ヲ支出シ其ノ費用ニ充ツルコトヲ得

第十一條 詐偽ノ所爲ヲ以テ遠洋漁業獎勵金ヲ受ケタル者又ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ

六月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ因テ得タル遠洋漁

業獎勵金ハ之ヲ償還セシム

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第十二條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用キス

第十三條 第五條ノ許可ヲ受ケタル者此ノ法律若クハ此法律ニ基キテ發スル命令ニ違背シタル

トキハ農商務大臣ハ其ノ遠洋漁業獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得

第十四條 前數條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ各條ニ掲グル所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任ア

ル社員若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十五條 此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ十五箇年間之ヲ施行ス

第十六條 此ノ法律ノ施行ニ必要ナル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

○遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所茲ニ船舶

乘組定員ノ件明治卅年六月五日
勅令第百七十六號

朕遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所並船舶乘組定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ

之ヲ公布セシム

第一條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ハ左ノ種類トス

鯨獵業

臘虎獵業

臘獸獵業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

鯨魚業

第二條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ場所ハ左ノ洋海トス

支那海
臺灣海峽
東海
黃海
朝鮮海峽
日本海
荷哥德斯克海
太平洋

第三條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ船舶乗組定員ハ左ノ如シ

漁船	登簿噸數	乘組定員
同	百噸以上	三十五名以下
同	二百噸以上	四十四名以下
同	二百五十噸以上	四十七名以下
同	三百噸以上	五十二名以下
同	三百五十噸以上	五十三名以下
帆船	登簿噸數	乘組定員
同	六十噸以上	二十六名以下
同	八十噸以上	二十八名以下
同	百噸以上	二十九名以下
同	百四十噸以上	三十一名以下

同	百六十噸以上	同	三十二名以下
同	百八十噸以上	同	三十四名以下
同	二百噸以上	同	三十七名以下

○遠洋漁業船舶裝程規程明治卅一年六月廿六日農商務省令第九號
遠洋漁業船舶裝程規程左ノ通相定メ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

- 遠洋漁業船舶裝程規程
- 第一條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ船舶ハ其船體ノ構造遠洋漁業ニ適シ
明治二十九年法律第六十七號船舶検査法ニ依リ遠洋航船又ハ近海航船タルヘキ検査證書ヲ有
スルモノニシテ本規程ニ合格シタルモノニ限ル
 - 第二條 遠洋漁業船ノ船體ハ總甲板ヲ有シ適度ノ荷足ヲ搭載シ得ヘキ構造ナルヲ要ス
 - 第三條 遠洋漁業船ハ漁艇ノ搭載捕獲物ノ處理貯藏ニ必要ナル場所ヲ設ケヘシ
 - 第四條 遠洋漁業船ニシテ火藥室ヲ設クルノ必要アルモノハ安全ノ場所ニ構造スルヲ要ス
 - 第五條 遠洋漁業船ハ漁艇及捕獲物等ノ揚卸ヲ便ニスル爲メ之ニ適スル支柱、索具又ハ樁重器
ヲ備フヘシ
 - 第六條 遠洋漁業船ハ乗組總員ニ對シ一人ニ付一日少クモ二升ノ割合ヲ以テ三箇月分ヨリ少ナ
カラザル飲用水ヲ貯藏シ得ヘキ水箱又ハ水樽ヲ備フヘシ
但天水貯溜ノ裝置若クハ蒸溜器ノ備ヘアルモノ又ハ漁業ノ種類ニ依リ當該官吏ニ於テ本條
ノ水量ヲ貯藏スルノ必要ナシト認メタルトキハ該水箱又ハ水樽ノ容積ヲ遞減スルコトヲ
得
 - 第七條 遠洋漁業船ニシテ其漁獵ノ方法漁艇ヲ要スルモノハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ設備スヘシ

一、臘虎獵船 漁艇三隻以上 二、臘豚獸獵船 同四隻以上 三、鯨獵船 同二隻以上
四、右ノ外各種ノ漁船 同二隻以上

前各號ノ漁艇ニハ每隻航海用具、羅針盤、信號喇叭及水樽ヲ備フルヲ要ス
第八條 遠洋漁業船ニ於テ使用スル漁獵具ハ左ノ制限ニ從ヒ之ヲ設備スヘシ

第一 臘虎、臘豚獸獵船 (一)銃殺獵法ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付銃銃二挺以上及之ニ要ス
ル彈丸、火藥、雷管等ヲ設備スルヲ要ス (二)投鉆獵法ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付綱及竿ノ全
備セル鉆二挺以上トス

第二 鯨獵法 (一)銃殺獵法ヲ爲スモノハ本船ニ銃砲二挺以上漁艇ニハ各一挺ニシテ之ニ要
スル爆裂矢ハ銃砲一挺ニ付各二十發以上トシ火藥雷管等ハ其割合ヲ以テ之ヲ設備スヘシ
(二)投鉆獵法ヲ爲スモノハ漁艇每隻鉆四挺又ハ爆裂鉆二挺以上トス (三)捕鯨網ハ銃砲一挺
又ハ漁艇一隻ニ付麻綱三百尋以上トス

第三 右ノ外各種ノ漁船 (一)釣漁ヲ爲スモノハ左ノ割合ヲ以テスヘシ延繩漁ヲ爲スモノハ
漁艇一隻ニ付延繩千五百尋以上トス、手釣漁ヲ爲スモノハ漁夫一人ニ付手釣三具以上トス
(二)網漁ヲ爲スモノハ左ノ割合ヲ以テスヘシ、刺網漁ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付刺網百尋
以上トス、其他網漁ヲ爲スモノハ網及附屬具ノ全備セルモノ一統以上及其修葺ニ要スル原
料ヲ備フルモノトス (三)釣漁、網漁ヲ爲スモノニシテ餌料ヲ要スルモノハ其採取又ハ貯藏
ニ必要ナル器具ヲ備フルモノトス

○遠洋漁業獎勵法施行細則 明治卅六年六月廿六日
農商務省令第十號
遠洋漁業獎勵法施行細則左ノ通相定メ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

遠洋漁業獎勵法施行細則

第一條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受ケントスル者ハ願書ニ左ノ書類ヲ添ヘ住居
地又ハ船舶定繫場ノ管轄地方廳ヲ經由シテ之ヲ農商務省ヘ差出スヘシ

- 一 登簿船免狀寫(臘虎、臘豚獸獵業ハ免狀寫ノ寫ヲ添フヘシ)
- 二 船舶検査證書寫
- 三 船舶裝明細書
- 四 乗組員數
(イ)甲板上下ノ裝置 (ロ)艙内ノ區劃 (ハ)器具及船員室ノ配置 (ニ)漁艇及漁獵具ノ種類員數
- 五 漁獵日論見書
(イ)漁獵ノ種類及方法 (ロ)漁獵ノ場所區域 (ハ)漁業ノ時期 (ニ)漁獲物處理法

第二條 農商務大臣ニ於テ前條ノ願書ヲ受理シタルトキハ検査ノ場所及期日ヲ定メ當該官吏ヲ
シテ其船舶ヲ検査セシメ適當ト認ムルトキハ地方官廳ヲ經テ認許證書(書式第一號)ヲ本人ニ
下附スヘシ

第三條 認許證書ヲ受有スル者遠洋漁業獎勵金ヲ受クル漁業ニ從事スルトキハ毎年一回艦裝ノ
検査ヲ受クヘシ

第四條 認許證書ハ常ニ船内ニ保持シ當該官吏其他職權アル者ニ於テ檢閲センコトヲ求ムルト
キハ何時ニテモ之ヲ示スヘシ

第五條 認許證書ヲ受有スル船舶ハ農商務省ヨリ下付セル漁業日誌ヲ備ヘ同日誌記載心得ニヨ
リ各事項ヲ記入スヘシ

第六條 認許證書ヲ受有スル者漁獵種類漁獵ノ場所船體機關ノ構造及艙裝竝ニ乗組員數ヲ變更セントスルトキハ豫メ農商務大臣ノ認可ヲ請フヘシ但シ止ムヲ得サル事故ニ因リ認可ヲ請フノ暇ナクシテ變更シタルトキハ其事由ヲ詳記シ更ニ本條ノ手續ヲナスヘシ

前項ノ手續ヲ怠リタルトキハ認許證書ノ效力ヲ失フモノトス

第七條 認許證書ヲ亡失毀損シタルトキ又ハ該證書ノ表面ニ記載スル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ其再授若クハ書換ヲ出願スヘシ

第八條 認許證書ヲ受有スル者死亡又ハ破産シタルトキハ其遺族又ハ破産管財人ヨリ認許證書ヲ返納スヘシ

認許證書ヲ受有スル商事會社解散又ハ破産シタルトキハ其清算人又ハ破産管財人ヨリ認許證書ヲ返納スヘシ

第九條 認許證書ヲ受有スル者左ノ事項ノ一ニ該當スルトキハ直ニ認許證書ヲ返納スヘシ

- 一 船舶ヲ賣渡、貸渡、交換又ハ讓渡シタルトキ
 - 二 漁獵業ヲ廢止シタルトキ
 - 三 船舶ヲ喪失又ハ解撤シタルトキ
 - 四 遠洋漁業獎勵金ノ下附ヲ停止セラレタルトキ
 - 五 前數項ノ外遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ條件ヲ缺キタルトキ
- 第十條 認許證書ヲ受有スル船舶ハ發着ノ都度帝國ニ在テハ稅關稅關支署、警察本分署又ハ浦役場外國ニ在テハ帝國領事館又ハ帝國貿易事務館ニ届出テ其證明ヲ請求スルコトヲ得
- 第十一條 明治三十年勅令第七十六號第一條ニ指定シタル漁獵又ハ同第二條ニ指定シタル場所ノ漁業ニ從事シタル者ハ漁業終了後農商務大臣ノ指定シタル官廳ニ於テ當該官吏又ハ其他

特ニ委任セラレタル官吏ヨリ船舶乗組員數ノ證明ヲ受クヘシ

第十二條 賣買交換又ハ讓渡ニ依リ認許證書受有ノ船舶ヲ取得シテ其事業ヲ繼續セントスル者ハ第一條ノ書類ニ其事實ニ對スル市町村長ノ證明書又ハ登記ノ謄本ヲ添へ農商務省へ願出テ更ニ認許ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テハ船舶ノ検査ヲ須キスシテ認許證書ヲ下附スルコトアルヘシ

第十三條 遠洋漁業獎勵法第八條ニ依リ遠洋漁業練習生ヲ船舶ニ乗組マシムルトキハ相當ノ待遇ヲ爲シ中途下船セシムルトキハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ止ムヲ得サル事故ニ因リ認可ヲ受クル暇ナクシテ下船セシメタルトキハ其事由ヲ詳記シ更ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

遠洋漁業練習生ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十四條 遠洋漁業練習生ヲ乗組マシメタル船舶ノ船長漁獵長ハ該練習生ヲシテ技術ヲ練習セシメ漁獵終了ノ後其狀況ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十五條 遠洋漁業獎勵法第八條ニ依リ遠洋漁業ニ關スル調査ヲ命ジタルトキハ指定ノ期日内ニ之ヲ報告スヘシ

第十六條 遠洋漁業獎勵金ヲ請求スルモノハ請求書(第二號書式)ニ遠洋漁業明細書(第三號書式)漁獵日誌及第十條第十一條ノ證明書其他漁獵ノ事實ヲ證明スルニ必要ナル書類ヲ添へ之ヲ農商務省ニ差出スヘシ

第十七條 農商務省ニ於テハ前條ノ請求書及關係書類ヲ審査シテ遠洋漁業獎勵金ヲ下附スヘシ

第十八條 遠洋漁業獎勵法違反ニ關シ起訴セラレタル者ニ對シテハ其裁判ノ確定スル迄遠洋漁業獎勵金ノ下附ヲ中止ス

第十九條 遠洋漁業ニ從事スルコト一回五箇月ニ滿タルトキハ二回以上ヲ通算シ五箇月ヲ經過シタルトキ獎勵金下附ノ請求ヲ爲スコトヲ得

漁業ノ期間一箇年以上ニ渉ルモノハ毎年度末ニ於テ之ヲ請求ヲ爲スヘシ

第二十條 天災其他抗拒スヘカヲササル強制ニ因リ航行ニ堪ヘスシテ其船舶ヲ外國人ニ賣渡交換贈與質入書入チナシタルトキハ船長又ハ所有者ヨリ其事由ヲ具シ農商務省ニ届出ツヘシ

(書式略)

○稅關法 明治廿三年九月六日 法律第八十號

朕稅關法ヲ裁可シ茲ニ之レヲ公布セシム此法律ハ明治廿三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

稅關法

第一條 各開港ニ於テ西洋形船舶外國通航ノ日本形船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ニ關スル事項ハ總テ稅關ノ所管トス

第二條 各開港外ニ於ケル外國貿易取締ニ關スル事項ハ其所管ノ稅關ニ於テ之ヲ處理ス

第三條 船舶ハ法律命令ニ特例ヲ掲ケタル場合ヲ除ク外不開港ヨリ外國ニ向テ出港シ若ハ外國ヨリ不開港ニ入港スルコトヲ得ス犯ス者ハ船長チ千圓ノ罰金ニ處ス

外國通航船ハ法律命令ニ特例ヲ掲ケタル場合ノ外國港ヲ經テ不開港ニ入港スルコトヲ得ス犯ス者ハ罰前項ニ同シ

第四條 外國ニ通航セントスル船舶ハ豫メ稅關長ノ認許ヲ受クヘシ其認許ヲ受ケスシテ外國ニ向テ出港シタル者ハ船主チ千圓ノ罰金ニ處ス其積載シタル貨物ハ之ヲ沒收ス

第五條 納稅ヲ遁脱若ハ減少センカ爲メ詐僞ノ文書ヲ稅關ニ差出シタル者ハ百貳拾五圓ノ罰金ニ處ス

ニ處ス

第六條 輸入手數未済ノ貨物ヲ積載シタル沿海通航船ヨリ稅關規則ニ依リ仕向港稅關ニ差出シタル積荷目録仕出港稅關ニ差出シタル積荷目録ニ對シ貨物不足アリテ其所爲不正ニ出タルトキハ船長チ千圓ノ罰金ニ處ス

第七條 稅關規則ニ依リ輸出禁制品ヲ開港間ニ回漕スル者ハ同規則ニ定ムル期限内ニ仕向港稅關ノ陸揚證書ヲ仕出港稅關ニ差出スヘシ違フ者ハ原價同額ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第八條 稅關規則ニ依リ貨物ヲ開港間ニ回漕シ其回漕免狀ヲ紛失若ハ遺忘シタル者同規則ニ定ムル期限内ニ其手續ヲ爲サ、ルトキハ其回漕シタル貨物原價百分ノ五ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス

第九條 積荷目録ニ記載セサル輸入貨物ヲ陸揚シタル者ハ其貨物輸入稅ノ外同額ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第十條 輸出禁制品ヲ輸出シタル者又ハ法律命令ニ背キ不開港ニ於テ輸出入貨物ノ積卸ヲ爲シタル者ハ其貨物ヲ沒收ス

稅關規則ニ依リ陸揚免狀ヲ受ケスシテ貨物ヲ船卸シ船積免狀若ハ回漕免狀ヲ受ケスシテ船積シ又ハ輸入免狀ヲ受ケスシテ輸入シタル者ハ其貨物ヲ沒收ス

第十一條 輸出入包貨内ニ禁制品ヲ藏匿シ又ハ輸出入申告書若ハ仕入書ニ記載セサル有稅品ヲ藏匿シタルトキハ其包貨ヲ併セテ之ヲ沒收ス

旅具中ニ有稅品ヲ藏匿シタルトキハ其物品ヲ沒收ス

第十二條 沒收スヘキ貨物ニシテ既ニ之ヲ賣却シ又ハ消費シタルトキハ其代金ヲ追徵ス

第十三條 税關長ハ本法及税關規則執行上必要ト認ルトキハ船舶ノ出港ヲ止メ又ハ税關監吏ニ令狀ヲ發シ輸出入貨物及運送ノ用ニ供スル物件ヲ差押ヘシムルヲ得

第十四條 税關監吏ハ入港ノ船舶ニ乗込ミ要件ヲ尋問シ船内ヲ検査シ又ハ其船舶ニ臨監スルコトヲ得船長ハ臨監ノ監吏ニ船室ヲ與ヘ相當ノ取扱ヲ爲スヘシ

第十五條 税關監吏ハ密輸入品アルヲ知リ若ハ密輸入品アリト思料スルトキハ家屋及其他ノ場所ニ立入り犯則ノ證據捜査ノ處分ヲ爲スコトヲ得

前條及本條ノ場合ニ於テ税關監吏ハ主任タルノ證據ヲ携帶スヘシ

第十六條 税關長ハ本法及税關規則ヲ犯シタル者ニ對シ其罰金若ハ科料ニ相當スル金額又ハ沒收スヘキ貨物及犯則取調ニ要シタル費用ヲ税關ニ納ムヘキ旨ヲ申渡スコトヲ得

第十七條 前條ノ申渡ヲ受ケタル者ハ税關休日ヲ除キ二日以内ニ其申渡ニ服従スルヤ否ノ届書ヲ差出スヘシ

申渡ニ服従スル旨ヲ届出タルトキハ貨物ハ即日金額ハ十日以内ニ納ムヘシ

申渡ニ服従セサル旨ヲ届出若ハ第一項ノ期限内ニ届出ヲ爲サス又ハ金額貨物ヲ納メサルトキハ税關長ハ其犯則事件ヲ告發スヘシ

第十八條 税關長犯則事件ノ取調ヲ爲ストキハ犯人及證人關係人ヲ召喚スルコトヲ得 税關長ハ犯人及證人關係人召喚ニ應セス又ハ證人タルコトヲ拒ミ又ハ事實ノ申告ヲ爲サ、ルニ因リ第十六條ノ申渡ヲ爲シ難キトキハ其犯則事件ヲ告發スヘシ

第十九條 税關長ノ處分スル犯則事件取調ノ費用ハ刑事裁判ノ例ニ依テ之ヲ算定ス

第二十條 本法及税關規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十一條 本法ニ規定スル所ノ外外國通航船沿海通航船及輸出入貨物竝ニ減稅免稅假納稅ニ

關スル事項ハ税關規則ヲ以テ之ヲ規定ス税關規則ニハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ設ケルコトヲ得

第二十二條 税關規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

明治三年正月二十七日布告商船規則中免許ナク外國へ通船ノ儀不相成云々ノ一項及同七年第二百二十三號同八年第二十號同年第六十三號同九年第四百十九號布告ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

(參看)

七年第二百二十三號ハ國內通商規則八年第二十號ハ外國形日本船輸出入稅未納内外貨物通商規則全年第六十三號ハ四洋形日本船各開港場出入規則九年第四十九號ハ樺太島貿易ノ件

○税關規則 明治廿三年九月六日 勅令第二百三號

除税關規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本規則ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

税關規則

第一章 外國通航船及輸出入貨物

第一條 外國通航船入港シタルトキハ其船長ハ入港ノ時ヨリ四十八時内ニ入港届書及積荷目録ヲ税關ニ差出ト同時ニ船籍證書船舶登記證書船鑑札及仕出港ノ出港免狀若ハ之ニ代ルヘキ證憑書類ヲ税關ニ預ケ入港手續料拾五圓ヲ納ムヘシ但貨物ヲ積卸セスシテ入港ノ時ヨリ四十八時内ニ出港スル者ハ此手數ヲ爲スニ及ハス

第二條 積荷目録ニ遺漏若ハ相違ノ事項アルトキハ入港手數了リタル時ヨリ二十四時内ハ税關ノ認許ヲ得之ヲ訂正スルコトヲ得

前項ノ時限ヲ經過シタル後積荷目録ヲ訂正セントスルトキハ手數料拾五圓ヲ納ムヘシ

第三條 外國通航船出港セントスルトキハ其船長ハ出港ノ時ヨリ二十四時前ニ出港届書ヲ税關ニ差出シ出港手数料七圓ヲ納メ第一條ニ依リ税關ニ預ケタル船籍證書船登記證書船鑑札及證憑書類ヲ受戻シ出港免狀ヲ受クヘシ

第四條 外國通航船出港手数料了リタル後尙ホ貨物ヲ船積シ若ハ陸揚セントスルトキハ更ニ第一條ノ手数料ヲ爲シ其手数料ヲ納メ其出港ノ時モ亦第三條ノ手数料ヲ爲シ其手数料ヲ納ムヘシ但税關手数料既済ノ貨物ヲ船積シ若ハ陸揚スル者ハ此限ニアラス

第五條 郵船ハ同時ニ入港及出港ノ手数料ヲ爲スコトヲ得

第六條 郵船ハ其港ニ陸揚スル貨物ノ外ハ積荷目録ニ記載スルコトヲ要セス

第七條 郵船ハ出港手数料了リタル後ト雖第四條ノ手数料ヲ爲サスシテ貨物ヲ船積シ若ハ陸揚スルコトヲ得

第八條 外國通航船航海中避難ノ爲メ已ムヲ得スシテ入港シタルトキハ入港ノ時ヨリ四十八時内ニ其事由ヲ税關ニ申出認許ヲ受クヘシ

前項ノ船舶修繕其他已ムヲ得サル事故ニ由リ假リニ其積荷ヲ陸揚シ又ハ損傷ノ貨物ヲ賣拂ヒ若ハ船中必需ノ物品ヲ積入ル場合ニ於テハ入出港手数料ヲ爲スヲ要セス其他ノ貨物ヲ陸揚シ船積シ船移シ若ハ假ニ陸揚シタル貨物ヲ賣拂ハントスルトキハ第一條ノ手数料ヲ爲シ其手数料ヲ納メ其出港ノ時モ亦第三條ノ手数料ヲ爲シ其手数料ヲ納ムヘシ

第九條 外國通航船ハ日没ヨリ日出マテノ間及税關ノ休日ニハ税關長ノ特許ヲ受クルニ非ザレハ貨物ヲ陸揚シ若クハ船積シ若クハ船移スルコトヲ得ス

前項日時間ハ船口其他貨物ヲ納ルヘキ場所ハ税關官吏之ヲ封鎖スヘシ

第十條 外國通航船避難ノ爲メ已ムヲ得スシテ不開港ニ入港シタルキハ船長ハ其事由ヲ記シタル書面ヲ其地ノ町村役場若ハ浦役場ニ差出スヘシ若シ船中需用品ヲ積入ル、トキハ別ニ其目錄ヲ差出シ各其證明ヲ受ケ他日開港ニ入港シタルトキ之ヲ税關ニ差出スヘシ

第十一條 船舶ヲ外國通航船ト爲シ及外國通航船ヲ沿海通航船ト爲サントスルトキハ船主ヨリ税關ニ申出船中ノ検査ヲ經免狀ヲ受クヘシ

第十二條 輸出貨物ヲ船積セントスル者ハ其申告書ヲ税關ニ差出シ現品ノ検査ヲ經輸出税目ニ從ヒ納税シ船積免狀ヲ受クヘシ

第十三條 輸入手数料既済ノ外國產貨物ヲ外國ニ積戻サントスル者ハ輸出税ヲ納ムルニ及ハス但書面ヲ以テ其旨ヲ税關ニ申出検査ヲ經船積免狀ヲ受クヘシ

第十四條 船中ノ需用品ニ付テハ輸出税ヲ納ムルニ及ハス但船長ハ前條ノ手数料ヲ爲スヘシ

第十五條 輸入貨物ヲ陸揚セントスル者ハ其申告書ニ仕入書ヲ添ヘ之ヲ税關ニ差出シ陸揚免狀ヲ受ケ其貨物ヲ陸揚シ現品ノ検査ヲ經輸入税目ニ從ヒ納税シ輸入免狀ヲ受ケテ之ヲ引取ヘシ

前項ノ仕入書ハ貨物ノ輸入手数料済ノ上其貨主ニ返付スヘシ

第十六條 內國產ノ貨物ヲ外國ヨリ積戻リ左ノ事項ヲ具備スルトキハ輸入税ヲ納ムルニ及ハス但前條ノ手数料ヲ爲スヘシ

一 輸出ノ時ノ性質若ハ形狀ヲ變セサルコト

二 輸出ノ日ヨリ滿五箇年ヲ經過セサルコト

三 輸出免狀ヲ付スルコト

第十七條 無税品ヲ除クノ外仕入書ヲ付セサル貨物ハ輸入ヲ許サス但税關長其仕入書ヲ差出シ能ハサル理由アリト認メ該貨主税關官吏ノ査定セル數量尺度若クハ價額ニ從ヒ納税スル者ハ

此限ニアラス

第十八條 價ニ從ヒ徵稅スヘキ貨物ニシテ其原價ヲ稅關ニ於テ不相當ト認ムルトキハ稅關鑑定官吏ヲシテ其價ヲ査定セシメ其査定額ニ從ヒ納稅セシムヘシ
若シ貨主前項ノ査定額ニ從ヒ納稅スルコトヲ欲セサルトキハ該査定額ヲ以テ稅關ニ其貨物ノ買上ヲ請フコトヲ得但第十七條ノ場合ニ於テハ此限ニアラス

第十九條 外國通航船貨物ヲ他ノ船舶ニ若クハ他ノ船舶ヨリ積移サントスルトキハ書面ヲ以テ其旨ヲ稅關ニ申出船移免狀ヲ受クヘシ但郵船ニ積載シタル貨物ヲ其會社所屬ノ庫船若クハ船中積移スニハ免狀ヲ受クルニ及ハス

第二十條 有稅ノ貨物損傷シタルカ爲メニ減稅ヲ請ハントスル者ハ現品ノ檢査ヲ受クル前其旨ヲ稅關長ニ申出ヘシ稅關長ハ稅關鑑定官吏ヲシテ現品損傷ノ程度ヲ査定セシメ相當ノ減稅ヲ爲スヘシ

第二十一條 外國軍艦ノ備用品ヲ買受クルトキハ賣主ノ證明書ヲ受ケ書面ヲ以テ其旨ヲ稅關ニ申出相當ノ輸入稅ヲ納ムヘシ

第二十二條 內國產金銀地金ハ政府ニ於テ公賣シタル者ヲ除クノ外ハ輸出スルコトヲ得ス

第二十三條 船客ノ旅具ハ陸揚船積共書面ヲ以テ其旨ヲ申出ルニ及ハス但通關前ニ稅關監吏ノ檢査ヲ受クヘシ

稅關ニ於テ旅具ト認メサルモノハ相當ノ税金ヲ納メシムヘシ

第二十四條 第八條ノ船舶修繕其他已ムヲ得サル事故ニ由リ一時貨物ヲ陸揚スルトキハ之ヲ稅關ニ預クヘシ
前項ノ貨物ヲ陸揚シ及之ヲ本船ニ積戻スニハ輸入出入ノ手數ヲ爲スニ及ハス但其貨物ノ保管ニ

要スル諸費ハ船長ヨリ之ヲ稅關ニ納ムヘシ

第一項ノ貨物ヲ賣拂ハントスルトキハ第十五條ノ手數ヲ爲シ其税金ヲ納ムヘシ

第二十五條 外國通航船若ハ外國船ヲ以テ貨物ヲ開港間ニ回漕セントスル者ハ書面ヲ以テ其旨ヲ稅關ニ申出現品ノ檢査ヲ經回漕免狀ヲ受ケテ之ヲ船積スヘシ

第二十六條 前條ノ貨物若シ有稅內國產ナルトキハ相當ノ税金ヲ假納スルカ若ハ稅關長ノ満足スヘキ證書ヲ差入レ置キ回漕免狀付與ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ仕向港稅關ノ陸揚證書ヲ差出シ其假納税金若ハ前ニ差入レ置キタル證書ヲ受戻スヘシ

前項ノ期限内ニ仕向港稅關ノ陸揚證書ヲ差出サ、ルニ於テハ輸出シタルモノト看做シ其税金ヲ納メシムヘシ

第二十七條 第二十五條ノ貨物若シ輸出禁制品ナルトキハ回漕免狀付與ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ仕向港稅關ノ陸揚證書ヲ差出スヘシ

第二十八條 第二十六條及第二十七條ノ貨物ヲ積載シタル船舶航海中破船其他ノ事故ニ由リ貨物ヲ仕向港ニ回漕シ能ハサルトキハ其事由ヲ仕向港稅關ニ届出該船出港ノ日ヨリ滿一箇年以内ニ其證據ヲ舉示シ假納稅若クハ前ニ差入レ置キタル證書ヲ受戻スコトヲ得

第二十九條 第二十五條ノ回漕貨物ヲ仕向港ニ於テ陸揚セントスル者ハ書面ヲ以テ其仕向港ノ稅關ニ申出仕向港稅關ヨリ受ケタル回漕免狀ニ陸揚ノ證明ヲ受ケ現品ノ檢査ヲ經テ之ヲ引取ルヘシ

前項回漕免狀ノ紛失若ハ遺忘ニ因リ之ヲ仕向港稅關ニ差出シ難キトキハ稅關長ノ満足スヘキ證書ヲ差入レ置キ其證書ノ日付ヨリ滿四ヶ月以内ニ回漕免狀若ハ之ニ代ルヘキ仕向港稅關ノ證明書ヲ差出シ前ニ差入レ置キタル證書ヲ受戻スヘシ

第三十條 外國通航船修繕ノ爲メ開港ヨリ不開港ニ回船セントスルトキ又ハ重量ノ貨物ニシテ開港ニ於テ積卸ヲ爲シ難ク不開港ニ回漕セントスルトキハ書面ヲ以テ其旨ヲ申出税關長ノ特許ヲ受クヘシ

第二章 沿海通航船及輸入手數未済貨物回漕

第三十一條 沿海通航船入港シタルトキハ船長ハ入港ノ時ヨリ二十四時内ニ入港届書ヲ税關ニ差出シ同時ニ船籍證書、船舶登記證書及船鑑札ヲ預クヘシ

第三十二條 沿海通航船出港セントスルトキハ其船長ハ出港ノ時ヨリ四時前ニ出港届書ヲ税關ニ差出シ船籍證書、船舶登記證書及鑑札ヲ受戻スヘシ

第三十三條 船籍證書、船舶登記證書ノ受有ヲ要セサル諸船及一定ノ港津間ニ往復スル積量百噸以下ノ西洋形船舶ハ船主ヨリ豫テ税關ニ届出認許ヲ受クルニ於テハ第三十一條及第三十二條ノ手數ヲ爲スニ及ハス

第三十四條 沿海通航船輸入手數未済ノ貨物ヲ積載シテ出港セントスルトキハ其船長ハ第三十二條ノ手數ヲ爲スト同時ニ出港積荷目録ニ通テ税關ニ差出スヘシ

第三十五條 前條ノ船舶仕向港ニ入港シタルトキハ其船長ハ第三十一條ノ手數ヲ爲スト同時ニ入港積荷目録ヲ税關ニ差出スヘシ

第三十六條 沿海通航船ヲ以テ輸入手數未済ノ貨物ヲ開港間ニ回漕セントスル者ハ書面ヲ以テ其旨ヲ税關ニ申出船積免狀ヲ受クヘシ
前項ノ貨物ヲ陸揚セントスル者ハ第十五條ニ又船移セントスル者ハ第十九條ニ據ルヘシ

第三章 罰則

第三十七條 外國通航船第一條ノ時限内ニ入港手數ヲ爲サ、ルトキハ船長ヲ六拾圓ノ罰金ニ處ス

シ向ホ其手數ヲ爲サ、ルニ於テハ初犯ノ時ヨリ二十四時ヲ過ル毎ニ更ニ同額ノ罰金ニ處ス
第三十八條 第九條第二項ニ掲グル税關監吏ノ爲シタル封鎖ヲ破却シ若ハ之ヲ取除キタルトキハ船長ヲ六拾圓ノ罰金ニ處ス

第三十九條 第十九條及第三十六條第二項ノ船移免狀ヲ受ケスシテ船移シタル者ハ前條同額ノ罰金ニ處ス

第四十條 外國通航船第八條第一項ノ場合ニ於テ規定ノ時限内ニ入港ノ事由ヲ申出サルトキハ船長ヲ拾五圓ノ罰金ニ處ス

第四十一條 外國通航船第十條ノ場合ニ於テ町村役場若ハ浦役場ノ證明ヲ受ケス又ハ證明ヲ受ケルト雖之ヲ税關ニ差出サ、ルトキハ船長ヲ拾五圓ノ罰金ニ處ス

第四十二條 沿海通航船第三十一條ノ時限内ニ入港ノ手數ヲ爲サス又ハ第三十二條ノ時限前ニ出港ノ手數ヲ爲サ、ルトキハ船長ヲ五圓ノ罰金ニ處ス

第四章 雜則

第四十三條 輸出入貨物ノ類別ハ就キ税關鑑定官吏ノ査定ニ不服アル者ハ其査定ノ日ヨリ十日以内ニ税關長ニ申告シ判定ヲ請フコトヲ得

税關長ノ判定ニ不服アル者ハ判定ノ日ヨリ三十日以内ニ判定書ヲ添ヘ大藏大臣ニ裁定ヲ請フコトヲ得

第四十四條 税關官吏ハ必要ノ場合ニハ輸出入貨物ノ小部分ヲ見本トシテ税關ニ留置クコトヲ得

第四十五條 此規則ニ依リ税關ニ差出スヘキ書面ハ總テ税關一定ノ書式ヲ用ヒ船主、船長若クハ貨主之ニ署名捺印スヘシ

第四十六條 税關ヨリ交付スル諸免狀ノ謄本其他別段ノ證書ヲ請フ者ハ一通毎ニ壹圓五拾錢ノ手数料ヲ納ムヘシ

第四十七條 此ノ規則ニ於テ日時ヲ以テ期限ヲ設ケタル者ハ其期限中ニ税關ノ休日ヲ算入セス又年月ヲ以テ期限ヲ設ケタルモノハ休日ヲ算入ス

第四十八條 税關ノ執務時間ハ休日ヲ除キ午前十時ヨリ午後四時マテトス但臨時開廳ヲ請フ者ハ税關長ノ特許ヲ受クヘシ

第四十九條 第九條第一項及第四十八條但書ノ場合ニ於テ特許ヲ請フ者ハ定規ノ手数料ヲ納ムヘシ但其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第五十條 此ノ規則ニ於テ船主ト稱スルハ其船ノ所有主若ハ現ニ其船ノ使用權ヲ有スル者ヲ云ヒ船長ト稱スルハ現ニ其船ヲ管理シ若ハ指揮スル者ヲ云ヒ貨主ト稱スルハ貨物ノ所有主若ハ其受託人ヲ云フ

第五十一條 此ノ規則ニ於テ輸出ト稱スルハ貨物ヲ外國へ輸出スルヲ云ヒ輸入ト稱スルハ貨物ヲ外國ヨリ輸入スルヲ云ヒ貨物ト稱スルハ旅具及船用品ヲ除クノ外一切ノ物件ヲ云フ

第五十二條 此規則ニ於テ入港ノ時ト稱スルハ船舶ノ投錨若ハ繫留セシトキヲ云ヒ出航ノ時ト稱スルハ投錨若ハ解纜ノトキヲ云フ

第五十三條 密輸出入ヲ税關ニ申告スル者ニハ其沒收セシ貨物代價ノ半額ヲ給ス
第五十四條 露西亞國樺太島貿易ニ從事スル船舶ニ限り當分ノ内出入港手数料及該船ニ搭載スル貨物ノ輸出入税ヲ免除ス但船舶ノ出入港手數ニ限り第三十一條第三十二條ヲ適用ス

○税關管轄區域明治二十三年九月六日勅令第二百四號

附則

朕税關管轄區域ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本令ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ズ

税關管轄區域左ノ通之ヲ定ム

横濱税關管轄區域

陸前 磐城 常陸 下總 上總 安房 武藏 相模 伊豆 駿河

遠江 十一箇國及小笠原島ノ沿岸

大阪税關管轄區域

參河 尾張 伊勢 志摩 紀伊 和泉 攝津四成郡以東

七箇國ノ沿岸

神戸税關管轄區域

攝津川邊郡以西 播磨 備前 備中 備後 安藝 周防 長門 石見

出雲 伯耆 因幡 但馬 丹後 隱岐 伊豫 土佐 阿波 讃岐

淡路 二十箇國ノ沿岸

長崎税關管轄區域

肥前 肥後 筑前 筑後 豊前 豊後 日向 大隅 薩摩 壹岐

對馬 琉球

十二箇國ノ沿岸

新潟税關管轄區域

- 若狹 越前 加賀 能登 越中 越後 羽前 羽後 佐渡
- 九箇國ノ沿岸
- 函館税關管轄區域
- 陸奥 陸中 渡島 後志 石狩 天鹽 北見 根室 千島 釧路
- 十勝 日高 釧路
- 十三箇國ノ沿岸

○特別輸出港規則明治廿二年七月三十日法律第二十號
 朕特別輸出港規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特別輸出港規則

- 第一條 帝國臣民米、麥、麥粉、石炭、硫黃ノ五品ヲ海外ニ輸出スル爲メ左ノ諸港ヲ特別輸出港トス
- 一 伊勢國四日市
 - 一 筑前國博多
 - 一 肥前國口ノ津
 - 一 肥後國三角
 - 一 後志國小樽
 - 一 釧路國釧路(二十三年十二月十六日法律第百七號ヲ以テ釧路ノ項ヲ加フ)
 - 一 長門國下ノ關
 - 一 豐前國門司
 - 一 肥前國唐津
 - 一 越中國伏木
- 第二條 前條輸出事業ニ使用スル爲メ外國船ヲ雇入ントスルトキハ大藏大臣ハ出願シ外國船雇入免狀ヲ受クヘシ
- 第三條 特別輸出港ニ於テ船舶ノ出入及輸出品ノ船積ニ關スル事項ハ總テ外國貿易ノ手續ニ依

ルヘシ

- 第四條 第一條ノ輸出事業ニ使用スル船舶ハ其使用中沿海貿易ヲ爲スコトヲ得ス犯ス者ハ五百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ雇入外國船ニ在ツテハ尙ホ第二條ノ免狀ヲ取上クヘシ
- 第五條 本規則ヲ廢止シ又ハ改正スルトキハ六箇月前ニ公布スヘシ
- 第六條 本規則施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム
- 第七條 特別輸出諸港ニ於テ本規則施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
- 開港外ニ於テ外國貿易ノ爲船舶出入及貨物輸出入ノ件明治二十九年三月二十六日法律第十八號
 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル開港外ニ於テ外國貿易ノ爲船舶出入及貨物輸出入ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 第一條 開港外ニ於テ外國貿易ノ爲帝國臣民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ爲スヘキ港ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第二條 前條船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ニ關シテハ稅關法及稅關規則ヲ適用ス
- 第三條 第一條ニ依リ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ爲ス港ヲ閉鎖スルトキハ六箇月前ニ勅令ヲ以テ之ヲ公布ス
- 第四條 本法ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス
- 外國貿易ノ爲帝國臣民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ爲スヘキ

明治二十九年十月二日 港勅令第三百十六號

朕明治二十九年法律第十八號ニ依リ外國貿易ノ爲帝國臣民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ爲スヘキ港ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十九年法律第十八號ニ依リ外國貿易ノ爲帝國臣民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ

爲スヘキ港ハ左ノ如シ

筑前國博多

肥前國唐津

肥前國口ノ津

越前國敦賀

伯耆國境

石見國濱田

駿河國清水

伊勢國四日市

能登國七尾

明治卅年勅令第二百廿六號
ヲ以テ◎符ノ分三ヶ所追加

○臺灣ニ於ケル特別輸出入港ニ關スル件明治三十年一月十七日
律令第一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル特別輸出入港ニ關スル件勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第一條 開港外ニ於テ外國貿易ノ爲帝國臣民及臺灣住民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ヲ爲

スヘキ港ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 前條船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ニ關シテハ稅關法及稅關規則ヲ適用ス但日本形船舶及

支那形船舶ノ納ムヘキ出入港手數料ハ別ニ府令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 臺灣總督ハ何時ニテモ其必要ト認ムル場合ニ於テ第一條ニ依リ定メタル特別輸出入港

ヲ閉鎖スルコトヲ得

○臺灣ニ於ケル特別輸出入港明治三十年一月二十日
臺灣總督府令第四號

明治三十年律令第一號第一條ニ依リ特別輸出入港當分ノ内左ノ通指定ス

臺北縣管下蘇澳

臺北縣管下舊港

臺中縣管下後壠

臺中縣管下梧棲

臺中縣管下鹿港

臺南縣管下東石港

澎湖島廳管下媽宮

○危害物品船積規則明治六年八月九日
第二百九十二號布告

危害ヲ生スヘキ物品ヲ謾リニ船積致シ候テハ他ノ物品ヲ傷害シ甚タシキハ全船ヲ失ヒ人命ヲ損

シ不容易儀ニ付左之條件ノ法則ヲ定メ當明治六年十月一日ヨリ令施行候條此旨布告候事

一 火藥、硝石、硫黃之類及ヒ發火シ易キ製藥品其他油脂、醬液並腐敗シ易キ性質ニシテ他物

ヲ損害スヘキ物品船積致シ候時ハ其品名ヲ表包之外部ニ書キ記シ或ハ其送狀ニ記載致シ船

十四年第七十二號
布告參看

主船長又ハ運漕會社危險請負會社等之承諾ヲ得テ後差出スヘシ若シ其手數無之尋常之荷物
ト伴リ之ヲ船積致シ或ハ船積セント謀ル者ハ金五百圓以内ノ罰金ニ處スヘキ事

一 尋常之品物トシテ差出シタル荷物之内ニ前條ノ如キ危害品可有之ト見受候時ハ船主船長運
漕會社危險請負會社ハ何時ヲ限ラス何地ヲ論セス直ニ發包シテ之ヲ視查スルノ權利可有之
事

但爲視查發包シタル荷物中ニ危害品無之トキハ船主會社等之入費ヲ以テ故之如ク荷造可
致然レトモ其荷物中ニ危害品有之トキハ是等之入費都テ荷主ヨリ可拂事

一 此危害品ヲ船積セサル以前運漕會社又ハ危險請負會社之倉庫等ニ於テ見出ストキハ之ヲ安
全之場所ニ移シ置キ直ニ其管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但安全之場所ニ之ヲ移ス之費用ハ荷主ヨリ辨償可致事

一 此危害品ヲ既ニ船積シタル後ニ見出シ之ヲ安全ノ場所ニ保チ難キ時ハ船中ニ於テ三人以上
ノ保證人ヲ立テ之ヲ海中ニ投棄シ着港之上直ニ其次第書及ヒ荷主之姓名ヲ其地之管轄廳或
ハ裁判所ヘ可届出事

但投棄シタル荷物及ヒ是ヨリ生スル荷主之損失ヲ辨償スルニ不及事

一 船長及ヒ運漕會社等荷主ト申合此危害品ヲ尋常之荷物トシテ船積シ或ハ船積セント謀ル者
ハ金五百圓以内又之ヲ見出スト雖モ官ニ訴ヘ出サル時ハ貳百圓以内之罰金ニ處スヘキ事

○船燈信號器及救命具取締規則明治二十八年四月七日
逕信省令第四號

船燈信號器及救命具取締規則

第一條 本則ニ於テ船燈ト稱スルハ海上衝突豫防法ニ記載スル各種ノ船燈、信號器ト稱スルハ
同法ニ記載スル信號器中機械製霧中號角、空中ニ高響及星火ヲ發スル榴彈、火箭、紅光焰管

十四年第七十二號
布告參看

雜則

又船用焰管及救命焰、救命具ト稱スルハ船用救命浮環及救命浮帶ヲ謂フ

第二條 船燈信號器及救命具ヲ製造シ又ハ同上外國製品ヲ販賣セントスル者ハ遞信省ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 第二條ノ免許ヲ受ケントスル者ハ願書ニ標本及仕様書ヲ添ヘ管轄地方官廳ヘ(東京府下ハ警視廳以下同シ)ヲ經由シテ遞信省ニ差出スヘシ

第四條 第三條ノ標本ハ船燈及機械製霧中號角ハ各種類毎ニ一個以上空中ニ高響及星火ヲ發スル榴彈、火箭、紅光焰管並ニ焰管ハ六個以上救命焰、救命浮環及救命浮帶ハ各種類毎ニ二個以上ヲ差出スヘシ

第五條 第三條ノ使用書ニハ使用材料ノ品質、尺度、構造方法ヲ詳細ニ記載スヘシ

第六條 第二條ノ免許ヲ受ケントスル者ハ船燈、信號器及救命具ノ各種類ニ付免許手数料貳圓ヲ納ムヘシ

免許手数料ハ免許ヲ與ヘサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第七條 遞信省ニ於テ第三條ノ標本ヲ試験シ合格ト認ムルトキハ其標本及仕様書ニ檢印ヲ附シテ之ヲ還付シ第一號若クハ第二號書式ノ免許證書並ニ試験成績書ヲ出願人ニ交付スヘシ不合格ト認ムルトキハ其理由ヲ明示シ標本ヲ出願人ニ還付スヘシ

第八條 船燈、信號器及救命具ノ標本ヲ運搬シ又ハ試験ニ要スル一切ノ費用ハ免許申請人之ヲ負擔スヘシ

第九條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品免許販賣人ハ遞信省ニ於テ檢印ヲ附シタル船燈、信號器、救命具標本ヲ原器トナシ其仕様書及試験成績書ト共ニ其製造所又ハ販賣所ニ備置クヘシ

前項ノ原器ヲ亡失若クハ毀損シ又ハ改良品ヲ以テ從來ノ原器ニ代ヘントスルトキハ第三條ニ準シ更ニ其檢定ヲ受クヘシ此場合ニ於テハ第六條ニ記載スル免許手数料ノ半額ヲ納ムヘシ

第十條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人ハ其製造品ニ氏名及製造年月日ヲ同上外國製品ノ免許販賣人ハ其賣品ニ其氏名ヲ彫刻又ハ貼付スヘシ

第十一條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品ノ免許販賣人ハ船舶司檢所々々在地(船舶司檢所々々在地トハ東京市大阪市長崎市及函館區ヲ謂フ)ニ在テハ船舶司檢所ニ船舶司檢所アテサル地方ニ在テハ管轄地方官廳若クハ其指定スル官衙ニ其製造品若クハ販賣品ノ檢定ヲ申請スヘシ船舶司檢所又ハ地方官廳ハ第九條ノ原器ニ照シ製造品又ハ販賣品ヲ検査シ合格ト認ムルトキハ檢印ヲ附スヘシ

第十二條 合格ノ船燈、信號器及救命具ヲ請賣セントスル者ハ管轄地方官廳ヲ經由シテ遞信省ニ届出ツヘシ

第十三條 船燈信號器及救命具ノ免許製造人同上外國製品ノ免許販賣人及同上内外製造品請賣人ハ其製造所又ハ販賣所ニ看板ヲ掲クヘシ

第十四條 船燈信號器及救命具ヲ船舶ト共ニ外國人ヨリ購入シ若クハ自己ノ船舶ニ備附タルノ目的ヲ以テ船燈、信號器及救命具ノミヲ外國人ヨリ購入シタルトキハ船舶司檢所ニ差出シ檢印ヲ受クヘシ

第十五條 法律命令ニ依リ船燈、信號器及救命具ヲ船舶ニ備附ヘキ者ハ第十一條ニ依リ檢印ヲ附シタルモノヲ使用スヘシ

第十六條 船舶司檢所ハ其所在地ノ船燈、信號器及救命具ノ製造所、販賣所及碇泊船ニ一箇年少ナクモ一回以上臨時監査官吏ヲ派出シ船燈、信號器及救命具ヲ監査セシムヘシ

地方官廳ハ其管轄地(船舶司檢所々在地ヲ除ク)ノ船燈、信號器及救命具ノ製造所、販賣所及碇泊船ニ一箇年少ナクモ一回以上臨時監査官吏ヲ派出シ船燈信號器及救命具ヲ監査セシムヘシ

第十七條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品ノ免許販賣人ハ製造品又ハ販賣品ノ種類、大小、品質ヲ區別シ左ノ事項ヲ記載シ一箇年分ヲ翌年二月十五日限り地方官廳ヲ經由シテ遞信省ヘ差出スヘシ

- 一 製造高
- 二 販賣高
- 三 卸賣及小賣一個又ハ一組ノ代價
- 四 前年度繰越高

第十八條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品ノ免許販賣人第三條ノ願書ニ記載スル住所、製造所又ハ販賣所ヲ移轉シタルトキハ二十日以内ニ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ヘ届出ツヘシ

第十九條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品ノ免許販賣人其氏名實屬ヲ變更シ若クハ免許證書ヲ亡失又ハ毀損シタルトキハ免許證書ノ書替若クハ再授ヲ遞信省ニ申請スヘシ

免許證書ノ書替又ハ再授ヲ申請スルトキハ手数料トシテ壹圓ヲ納ムヘシ

第二十條 船燈、信號器及救命具ノ免許製造人又ハ同上外國製品ノ免許販賣人廢業若クハ死亡シタルトキハ本人又ハ其遺族ヨリ四十日以内ニ地方官廳ヲ經由シテ免許證書ヲ遞信省ニ返納スヘシ

第二十一條 船燈、信號器及救命具ノ請賣人其氏名住所ヲ變更シ又ハ廢業者クハ死亡シタルト

キハ其本人又ハ遺族ヨリ四十日以内ニ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ニ届出ツヘシ

第二十二條 第二條第九條第十一條第十四條第十五條ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十條第十二條第十三條第十七條乃至第二十一條ニ違背シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

附則
第二十四條 本則ハ明治二十八年十月一日ヨリ施行ス

從來既ニ免許ヲ得タル船燈、信號器製造人ハ本則施行以前ト雖モ準備ノ爲メ第三條及第七條ニ依リ標本ノ檢定ヲ受ケ且第十一條ニ依リ其製品ニ檢印ヲ受クルコトヲ得

第二十五條 從來船舶ニ備附ケ使用スル船燈、信號器及救命具ハ明治二十九年九月三十日迄ニ監査官吏ニ於テ監査ヲ行ヒ檢印ヲ附スヘシ但シ監査官吏ニ於テ既ニ檢印ヲ附シタル檣燈燈燈及信號器ハ此ノ限ニアラス

第二十六條 明治十九年六月遞信省令第十三號同年七月同省令第十九號同二十六年三月同省令第四號ハ本則施行ノ日ヨリ廢止ス

花紋輪廓(燈一尺二寸)

第一號 式

第 號

(船燈、信號器、救命具)製造
免許證書

廳府縣華士族平民

花紋輪廓(燈一尺二寸)

第二號 式

第 號

(外國製船燈信號器、救命具)
販賣免許證書

廳府縣華士族平民

氏名

右(何々)ノ標本ヲ試験シ合格ト認ムルニ依リ明治二十八年四月二十七日遞信省令第四號船燈信號器及救命具取締規則第七條ニ依リ此ノ免許證書ヲ授與ス
明治 年 月 日

遞信省印

氏名

右(何々)ノ標本ヲ試験シ合格ト認ムルニ依リ明治二十八年四月二十七日遞信省令第四號船燈信號器及救命具取締規則第七條ニ依リ此ノ免許證書ヲ授與ス
明治 年 月 日

遞信省印

○船燈信號器及救命具試驗檢定及監査手續明治廿八年四月廿七日 遞信省訓令第一號

- 第一條 船燈、信號器及救命具ノ標本ヲ試驗スルトキハ先ツ其仕様書ト照合シ若シ相違ノ廉アルトキハ製造者クハ販賣免許申請人ヲシテ其標本ヲ改作セシメ若クハ仕様書ヲ改正セシムヘシ
- 第二條 船燈ノ材料ハ玻璃ト銅、眞鍮若クハ鐵ヲ用ヒ玻璃ハ寒氣ニ堪ヘ凍氷ノ爲メ龜裂セサル品質ヲ用ヒ其接合ノ部分ハ密著シテ毫モ間隙ナク堅牢ニ構造シタルモノヲ合格トナスヘシ但海上衝突豫防法第七條第九條ニ依リ小形船及漁船ニ於テ用フヘキ船燈ハ本條ニ記載スル金屬ヲ使用セサルモ堅牢ナリト認ムルトキハ合格トナスコトヲ得
- 第三條 船燈ノ空氣孔ハ上下共ニ不鈞合ナク油壺ハ燈油ノ漏洩セサル様堅牢ニ之ヲ製造シ點火

口ノ押へ金及注油口ノ栓ハ螺旋形ノ裝置ナルモノヲ合格トナスヘシ

第四條 船燈ノ光達距離ハ海上衝突豫防法ニ規程スル距離ニ到達シ其射光方位ハ同法ニ規程スル方位ニ適合スルモノヲ合格トナスヘシ

船燈ノ光達距離ハ實視試驗ニ依リ若クハ光達距離測定器ヲ以テ之ヲ算定シ其射光方位ハ玻璃球ノ弧ニ對スル全圍ノ中心ヨリ玻璃球ノ弧ノ中央ニ至ル直線ト玻璃球ノ各端ヨリ點火口ノ兩端(若シ八字形ナルトキハ其後端)ヲ經テ引キタル二直線トノ交切點ヨリ玻璃球ノ各端ヘ引キタル直線間ノ弧度ヲ射光方位トス

第五條 機械製霧中號角、空中ニ高響及星火ヲ發スル榴彈、火箭、紅光焰管、焰管並ニ救命焰ハ其用方及保存ノ適否ヲ調査シ且之ヲ吹鳴若クハ發火セシメ其成績各々良好ナリト認ムルトキハ之ヲ合格トナスヘシ

第六條 救命浮環ハ二十四斤以下救命浮帶ハ十一斤二五以上ノ重量ヲ附著シテ之ヲ水中ニ投入シ二十四時間水面ニ浮游シ其構造良好ナリト認ムルトキハ合格トナスヘシ

第七條 船燈、信號器及救命具ヲ試驗シタル主任官吏ハ其成績報告書ヲ作り遞信大臣ニ差出スヘシ

第八條 船舶司檢所又ハ地方官廳ニ於テ船燈、信號器及救命具ノ免許製造人若クハ免許販賣人ヨリ其製造品若クハ販賣品ノ檢定申請ヲ受ケタルトキハ檢定官吏ニ命シ其製造所若クハ販賣所ニ就キ檢定セシムヘシ

檢定官吏ハ船燈、信號器及救命具ノ製造品若クハ販賣品ヲ其原器、仕様書及試驗成績書ニ照ラシテ之ヲ査察シ必要ト認ムルトキハ各種類毎ニ一二個ヲ實地ニ試験シ合格ト認ムルトキハ檢印ヲ附シ不合格ト認ムルトキハ不合格ノ點ヲ懸篤ニ指示シ改良セシムヘシ

明治二十八年遞信省訓令第三號ヲ以テ本條改正

第九條 第八條ニ依リ檢印ヲ附スルトキハ船燈、機械製霧中號角ニハ極印ヲ押捺シ救命焰空中ニ高懸及星火ヲ發スル榴彈、火箭、紅光焰管及焰管ニハ紙札ヲ貼付シ救命浮環及救命浮帶ニハ朱肉印又ハ黒肉印ヲ押捺スヘシ

前項ノ極印、紙札及朱肉印又ハ黒肉印ニハ廳名ヲ記スヘシ

第十條 船舶司檢所又ハ地方官廳ニ於テハ第一號書式ニ依リ檢定報告書ヲ作り前年十二月末日迄ノ分ヲ翌年二月十五日限り遞信省ニ差出スヘシ

第十一條 船舶司檢所ニ於テ外國人ヨリ船舶ト共ニ購入シ又ハ外國人ヨリ購入シタル船燈、信號器救命具ノ檢定申請ヲ受ケタルトキハ第二條乃至第六條ニ準シテ之ヲ査覆シ合格ト認ムルトキハ檢印ヲ附シ不合格ト認ムルトキハ其使用ヲ差止ムヘシ但檢印ハ第九條ノ例ニ依ルヘシ

第十二條 監査官吏船燈、信號器及救命具ノ製造所及販賣所並ニ碇泊船舶ニ臨檢シ修繕ヲ要スヘキモノアルトキハ其修繕ヲ命シ汚損若クハ朽腐シテ實用ニ適セサルモノアルトキハ其檢印ヲ取消シ又ハ檢印ナキモノヲ使用スルモノアルトキハ犯則ノ處分ヲ爲スヘシ

第十三條 船燈、信號器及救命具取締規則施行以前ヨリ船舶ニ備付ケ使用スル船燈、信號器、救命具ハ第二條乃至第六條ニ準シテ之ヲ査覆シ合格ト認ムルトキハ檢印ヲ附シ不合格ト認ムルトキハ其使用ヲ差止ムヘシ

第十四條 監査官吏ハ船長若クハ運轉手ニ對シ船燈、信號器、救命具、隔板ノ裝置及其用方ヲ諮詢シ了知セサルモノアルトキハ懇篤ニ之ヲ教示スヘシ

第十五條 船舶司檢所又ハ地方官廳ニ於テハ第二號若クハ第三號書式ニ據リ監査報告書ヲ作り前年十二月末日迄ノ分ヲ翌年二月十五日限り遞信省ニ差出スヘシ

第十六條 明治十四年八月二十五日農商務省商務局ニ於テ定メタル船燈製造方法及同二十年

遞信省訓令第一號船燈信號器監査手續ハ本手續實施ノ日ヨリ廢止ス
第一號書式

從明治 至明治		年	月	船燈信號器救命具檢定報告	製造人	氏	名
種	別	橋燈	四十噸以上ノ汽船用	銅製	眞鍮製	鐵製	銅製
			四十噸未滿ノ汽船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製
舷燈	兩色燈	四十噸以上ノ汽船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
		四十噸未滿ノ汽船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
碇泊燈	三色燈	四十噸以上ノ汽船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
		四十噸未滿ノ汽船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
紅燈	白燈	電信線布設及引揚用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
		刺網漁船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製
水先船用	綠網漁船用	眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製	鐵製
		眞鍮製	鐵製	銅製	眞鍮製	鐵製	鐵製

雜則

救命浮環	救命器具	救命器具	紅光管	火焰管	火中發煙器	機械製霧中號角	種別		信號器	燈籠		船尾揭標用	船舵目標用
							合	不合		白	兩色		

右檢定之成績報告候也

北海道廳長官警視總監
府縣知事船舶司檢所長

氏 名 印

明治 年 月 日

遞信大臣宛

第二號書式

白燈	紅燈	三色燈	碇泊燈	兩色燈	舷燈		檣燈		種別	從明治 年 月 月 至明治 年 月 月	船燈信號器救命具製造所販賣所監查報告
					四十噸以上ノ汽船用	四十噸未滿ノ汽船用	四十噸以上ノ汽船及二十噸以上ノ帆船用	四十噸未滿汽船用			

種別	監視月日	適	否	摘	要	燈籠		水先船用	船尾掲標用	操舵目標用
						白	兩			
信	號	器	製造人	氏	名					
機械製霧中號角										
空中發火										
紅火焰										
救命										
救命										
種別	監視月日	適	否	摘	要	製造人	氏	名		
救命	浮環									
救命	浮環									

右監査之成績報告候也

明治 年 月 日

遞信大臣宛

北海道廳長官警視總監
府縣知事船舶司檢所長

氏 名 印

第三號書式

從明治	年	月	月	船内備附船燈信號器救命具監査報告
監査	地	名	船名	噸石數
本船管	轉船名	船主氏名	船燈及附板	信號器
適	否	適	否	救命具
適	否	適	否	摘
要				

右監査之成績報告候也

明治 年 月 日

遞信大臣宛

北海道廳長官警視總監
府縣知事船舶司檢所長

氏 名 印

○海上氣象表報告ノ件明治二十一年十二月二十七日
内務省令第十一號

明治十九年遞信省令第四號第六條ニ掲クル内國航船外國航船ニ限り來明治二十二年一月一日ヨ
リ左ノ錐形ニ據リ毎月海上氣象表ヲ製シ中央氣象臺ニ報告ス可シ

第一條 航路標識ハ航路ノ安寧ヲ保護スル爲メ政府ニ於テ之ヲ設置スルモノトス

第二條 土地ノ形狀又ハ情況ニ由リテハ地方税又ハ區町村費ヲ以テ航路標識ヲ設置スルコトヲ得此場合ニ於テハ地方長官ニ於テ遞信大臣ノ許可ヲ受クヘシ

從來私設ノ航路標識ハ免許年限間之ヲ繼續スルコトヲ得
遞信大臣ニ於テ前二項ノ航路標識不完全ニシテ危害アリト認メタルトキハ之ヲ變更又ハ撤去セシムルコトヲ得

政府ニ於テ直接管理ヲ必要トスルトキハ相當ノ價格ヲ以テ第一項第二項ノ航路標識ヲ買上ルコトヲ得

第三條 航路標識ヲ損壞シ又ハ移轉シ又ハ其性質ヲ變更シ又ハ之ヲ蔽遮スヘキ所爲ヲナシ又ハ遞信大臣ノ指定シタル區域内ニ於テ航路標識ノ燈光若クハ警號ト誤認シ易キ所爲ヲナシタル者ハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 航路標識ニ船隻其他ノ物ヲ繫キ又ハ衝突セシメ又ハ攀躋シ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

○私設燈標禁止ノ件 明治十八年六月五日 第十一號布達
明治五年十月第三十二號布達ヲ廢止シ自分燈標私設ヲ禁止ス

但既設燈標ニシテ從前船舶ヨリ其費用ヲ徴セサルモノハ來ル明治二十五年ヲ限り廢止シ其費用徵收願濟年限ナキモノハ此際相當ノ期限ヲ定メ更ニ工部省ヘ願出ヘシ

○地方税又ハ區町村費ヲ以テ航路標識ヲ設置スル請願手續 明治二十一年十月三十一日 遞信省訓令第十號
北海道廳 府 縣

第一條 航路標識條例第二條第一項ニ依リ地方税又ハ區町村費ヲ以テ航路標識ヲ設置セントシ

十八年六月第十一號
遞信省中二十五
年十一月遞信省令
第十六號ヲ以テ二
十八年ト改正ス

地方長官ニ於テ遞信大臣ノ許可ヲ請フトキハ左ノ書類ヲ具フヘシ

一 航路標識設置位置及其近傍實測地圖

二 航路標識圖面及其構造方法並費用調書

三 一個年間入港スヘキ日本形船西洋形船員數及其石數噸數並其最大船舶石數又ハ噸數概算調書

其位置ヲ變更セントスルトキハ第一項ノ書類又其性質ヲ變更セントスルトキハ第二項ノ書類ヲ具シ遞信大臣ニ經伺ノ上之ヲ變更スヘシ

第二條 前條航路標識ヲ設置シ若クハ其位置又ハ性質ヲ變更シ又ハ之ヲ停止若クハ廢止スルトキ當省ヨリ告示スヘキヲ以テ地方長官ハ豫メ其實施期限ヲ遞信大臣ニ報告スヘシ

第三條 船舶繫留等ノ爲メ棧橋又ハ埠頭ニ設置スル標識ハ航路標識ト誤認シ易キ虞アルヲ以テ其設置變更等ハ都テ地方長官ニ於テ遞信大臣ニ經伺ノ上若シ航路ニ障礙アリト認ムルトキハ變更又ハ撤去ヲ命スヘキ旨趣ヲ以テ之ヲ許可スヘシ

○北海道廳及府縣區町村立航路標識看守條規 明治二十二年三月十四日 遞信省令第三號
北海道廳及府縣區町村立航路標識看守條規左ノ通之ヲ定ム

第一條 地方税又ハ區町村費ヲ以テ航路標識ヲ建設シタルトキハ看守員ヲ定メ其標識ニ關スル諸般ノ業務ヲ掌理セシムヘシ

但燈標ニハ二名以上ノ看守員ヲ置キ内一名ヲ看守長ト爲スヘシ

第二條 看守長ハ遞信省燈臺局又ハ其燈臺ニ於テ看守ノ業務ヲ習熟シタルモノニ限ル

第三條 航路標識看守上遞信省燈臺局定ムル所ノ看守教則及同局又ハ同局派遣ノ視察官吏ヨリ

告示スル所ノ事項ハ之ヲ遵守スヘシ
第四條 燈油其他點燈用ノ諸物品ハ遞信省燈臺局ノ認可ヲ經タルモノニ非サレハ使用スルヲ得
ス

○臺灣航路標識規則 明治卅一年五月廿一日
臺灣總督府令第六號

第一條 臺灣島及澎湖列島ニ於ケル航路標識ハ航路ノ安寧ヲ保護スル爲臺灣總督府ニ於テ之ヲ
設置スルモノトス

第二條 土地ノ形狀又ハ情況ニ由リ一個人又ハ公共團體ノ費用ヲ以テ航路標識ヲ設置セントス
ルトキハ地方長官ヲ經由シ臺灣總督ノ許可ヲ受ケヘシ但船舶ニ對シ其費用ヲ徵收スルコトヲ
許サス

臺灣總督ニ於テ前項ノ航路標識不完全ニシテ危害アリト認メタルトキハ之ヲ變更シ又ハ撤去
セシムルコトアルヘシ

臺灣總督府ニ於テ直接管理ヲ必要トスルトキハ相當ノ價格ヲ以テ前項ノ航路標識ヲ買上ルコ
トアルヘシ

第三條 航路標識ヲ損壞シ又ハ移轉シ又ハ其性質ヲ變更シ又ハ之ヲ蔽遮スヘキ所爲ヲ爲シ又ハ
臺灣總督ノ指定シタル區域内ニ於テ航路標識ノ燈光若ハ警號ト誤認シ易キ所爲ヲ爲シタル者
ハ一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 航路標識ニ船筏其他ノ物ヲ繫キ又ハ衝突セシメ又ハ攀躋シ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ壹
圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

○橫須賀軍港規則 明治二十九年四月十一日
海軍省令第六號
橫須賀軍港規則左ノ通改正ス

橫須賀軍港規則

第一條 橫須賀軍港内ノ海面ハ別圖ノ如ク之ヲ三區ニ分チ第一線以内ヲ第一區ト稱シ第一區以
外第二線以内ヲ第二區ト稱シ第二區以外第三線以内ヲ第三區ト稱ス

第二條 軍港内ニ入港セントスル艦船ハ軍港外三海里以外ノ所ヨリ投錨ノ地點マテ各自ノ艦船
名符字信號旗ヲ掲揚スヘシ

第三條 第三區ニ於テハ航路ノ妨ケトナラサル限りハ艦船自由ニ碇泊スルコトヲ得

第四條 第一區ハ十五噸以下ノ帝國海軍所屬舟艇ノ外鎮守府司令長官ノ許可ナクシテ進入スル
コトヲ禁ス

第五條 第二區以内ニ進入スル艦船ハ碇泊繫留ニ關シテハ十五噸以下ノ舟艇ヲ除クノ外總テ知
港事ノ指示ニ從フヘシ但風波避難ノ際ニハ知港事ノ指示ヲ待タス適意ノ碇地ニ就クコトヲ得

第六條 鎮守府司令長官ハ必要ナル場合ニハ艦船ニ碇地ノ轉換ヲ命シ或ハ退去ヲ命スルコトヲ
得

第七條 鎮守府司令長官ハ艦船第一區内ニ入ラントスルニ當リ其ノ積載物中危險ト認ムルモノ
アルトキハ之ヲ卸サシムルコトアルヘシ

第八條 凡テ艦船ハ鎮守府司令長官ノ特許アルモノ、外火藥庫ヲ距ル百三十間以内ニ進入スル
コトヲ禁ス流離點火中ノ小蒸氣船及其他一切ノ火氣ヲ有スル船舶亦同シ

第九條 軍港ニ於テハ禮砲號報及鎮守府司令長官ノ特許ヲ得タルモノ、外銃砲及水雷ノ發射其
ノ他一切ノ爆發物ヲ發火スルコトヲ禁ス
陸上ニ於ケル公私ノ家屋ヲ距ルコト七十五間以内ノ海上ニ於テハ禮砲號報ノ類ト雖モ一切銃

明治三十年六月二
十六日海軍省令第
九號ヲ以テ第七條
第八條及第九條ヲ
改正

砲ノ發放ヲ爲スコトヲ禁ス

第十條 第二區以內ニ於テハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スルコトヲ禁ス艦船ニ於テ遺棄物アリテ其ノ用ニ供スル解舟ヲ要スルトキハ之ヲ知港事ニ請求スヘシ但第三區ト雖有害ト認ムル場所ニハ以上ノ物品等ヲ遺棄スルコトヲ禁シ臨時其場所ヲ指示スルコトアルヘシ

第十一條 第二區以內ノ海岸及同區以內ニ注入スル河流ニハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スヘラス

第十二條 第一區ニ於テハ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ漁業ヲ爲スヘカラス

第十三條 傳染病者アル船舶ハ軍港内ニ進入スルコトヲ禁ス

第十四條 軍港内ニ於テ左ニ掲クル工事ヲ起シ又ハ營業ヲ爲サントスル者アルトキハ地方長官ハ鎮守府司令長官ニ協議シ許否スヘシ

一 棧橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事

二 海面ヲ埋立海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ築造スル事

三 道路溝渠ヲ開通シ又ハ橋梁ヲ架設スル事

四 山岡ヲ掘鑿スル事

五 森林ヲ伐採スル事

六 軍港ニ發着スヘキ航海ノ營業ニ關スル事

七 浮標又ハ立標ヲ設置スル事

第十五條 鎮守府司令長官ノ承認ヲ得シテ軍港内ノ測量撮形製圖ヲ爲シ又ハ地理案内等ノ圖書ヲ出版スルコトヲ禁ス

第十六條 地方長官ハ軍港内衛生ノ事ニ關シテハ地方吏員ヲシテ鎮守府軍醫長ニ協議セシムヘシ

第十七條 鎮守府司令長官ハ海軍官廳構内其ノ他軍港取締上必要ノ場所ニハ人民ノ通行ニ制限ヲ置クコトヲ得

第十八條 軍港内ノ取締ニ關スル細則ハ鎮守府司令長官之ヲ定ム
(別圖省略)

○吳軍港規則 明治二十九年四月十一日
海軍省令第八號

吳軍港規則左ノ通改正ス

吳軍港規則

第一條 吳軍港内ノ海面ハ別圖ノ如ク之ヲ二區ニ分チ朱線以內ヲ第一區ト稱シ第一區以外黑線以內ヲ第二區ト稱ス

第二條 軍港内ニ入港セントスル艦船ハ其ノ區域内ニ進入ノトキヨリ投錨ノトキマテ又軍港内ヲ通航スルトキハ其ノ通航間各自ノ艦船名符字信號旗ヲ掲揚スヘシ

第三條 第二區ニ於テハ航路ノ妨ケトナラサル限リハ艦船自由ニ碇泊スルコトヲ得

第四條 第一區ハ帝國海軍艦船ノ外鎮守府司令長官ノ許可ヲ得テ進入スルコトヲ禁ス

第五條 第一區ニ進入スル艦船ハ碇泊留ニ關シテハ十五噸以下ノ舟艇ヲ除クノ外總テ知港事ノ指示ニ從フヘシ但風波避難ノ際ニハ知港事ノ指示ヲ待タス適意ノ錨地ニ就クコトヲ得

第六條 海軍兵學校前而即チ別圖朱點線以內ニ於テハ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ帝國軍艦ノ外船舶ヲ碇繋スルコトヲ禁ス又海軍兵學校用地内ニ於テ赤旗ヲ掲ケタルトキハ總テ船舶該朱點線以內ヲ通航スルコトヲ禁ス

第七條 鎮守府司令長官ハ必要ナル場合ニハ艦船ニ錨地ノ轉換ヲ命シ或ハ退去ヲ命スルコトヲ得

明治三十年六月二日
日明治二十九年四月十一日
海軍省令第七號第十六日
海軍省令第十號ヲ以テ
第八條第九條及ヒ
第十條改正

ルヘシ

第八條 鎮守府司令長官ハ艦船第一區内ニ入ラントスルニ當リ其ノ積載物中危險ト認ムルモノアルトキハ之ヲ卸サシムルコトアルヘシ

第九條 凡テ艦船ハ鎮守府司令長官ノ特許アルモノ、外火藥庫ヲ距ル百三十間以内ニ進入スルコトヲ禁ス。汽船點火中ノ小蒸氣船及其ノ他一切ノ火氣ヲ有スル船舶亦同シ

第十條 軍港ノ山林原野ニ於テ濫リニ焚火スヘカラス

第十一條 軍港ニ於テハ禮砲號報及鎮守府司令長官ノ特許ヲ得タルモノ、外銃砲及水雷ノ發射其ノ他一切ノ爆發物ヲ發火スルコトヲ禁ス

第十二條 陸上ニ於ケル公私ノ家屋ヲ距ルコト七十五間以内ノ海上ニ於テハ禮砲號報ノ類ト雖モ一切銃砲ノ發放ヲ爲スコトヲ禁ス

第十三條 第一區ニ於テハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スルコトヲ禁ス。艦船ニ於テ遺棄物アリテ其ノ用ニ供スル解舟ヲ要スルコトキハ之ヲ知港事ニ請求スヘシ但第二區ト雖有害ト認ムル場所ニハ以上ノ物品等ヲ遺棄スルコトヲ禁シ臨時其ノ場所ヲ指示スルコトアルヘシ

第十四條 第一區内ノ海岸及同區内ニ注入スル河流ニハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スヘカラス

第十五條 第一區及海軍兵學校前面即チ別圖朱點線以内ニ於テハ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ漁業ヲ爲スヘカラス

第十六條 傳染病者アル船舶ハ第一區及海軍兵學校前面即チ別圖朱點線以内ニ進入スルコトヲ得ス

第十七條 軍港内ニ於テ左ニ掲グル工事ヲ起シ又ハ營業ヲ爲サントスル者アルトキハ地方長官

ハ鎮守府司令長官ニ協議シ許否スヘシ

- 一 棧橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事
- 二 海面ヲ埋立海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ築造スル事
- 三 道路溝渠ヲ開通シ又ハ橋梁ヲ架設スル事
- 四 山岡ヲ掘鑿スル事
- 五 森林ヲ伐採スル事
- 六 軍港ニ發着スヘキ航海ノ營業ニ關スル事
- 七 浮標又ハ立標ヲ設置スル事

第十八條 鎮守府司令長官ノ承認ヲ得ケスシテ軍港内ノ測量攝影製圖ヲ爲シ又ハ地理案内等ノ圖書ヲ出版スルコトヲ禁ス

第十九條 地方長官ハ軍港内衛生ノ事ニ關シテハ地方吏員ヲシテ鎮守府軍醫長ニ協議セシムヘシ

第二十條 鎮守府司令長官ハ海軍官廳轄内其ノ他軍港取締上必要ノ場所ニハ人民ノ通行ニ制限ヲ置クコトヲ得

第二十一條 軍港内ノ取締ニ關スル細則ハ鎮守府司令長官之ヲ定ム

(別圖省略)

○佐世保軍港規則 明治二十九年四月十一日
海軍省令第八號

佐世保軍港規則左ノ通改正ス

第一條 佐世保軍港内ノ海面ハ別圖ノ如ク之ヲ二區ニ分チ朱線以内ヲ第一區ト稱シ第一區以外

黑線以内ヲ第二區ト稱ス

- 第二條 軍港内ニ入港セントスル艦船ハ軍港外三海里以外ノ所ヨリ投錨ノ地點マテ各自ノ艦船名符字信號旗ヲ掲揚スヘシ
- 第三條 第二區ニ於テハ航路ノ妨ケトナラザル限リハ艦船自由ニ碇泊スルコトヲ得
- 第四條 第一區ハ帝國海軍艦船ノ外鎮守府司令長官ノ許可ナクシテ進入スルコトヲ禁ス
- 第五條 第一區ニ進入スル艦船ハ碇泊緊留ニ關シテハ十五噸以下ノ舟艇ヲ除クノ外總テ知港事ノ指示ニ從フヘシ但風波避難ノ際ニハ知港事ノ指示ヲ待タズ適意ノ碇地ニ就クコトヲ得
- 第六條 鎮守府司令長官ハ必要ナル場合ニハ艦船ニ碇地ノ轉換ヲ命シ或ハ退去ヲ命スルコトアルヘシ
- 第七條 鎮守府司令長官ハ艦船第一區内ニ入ラントスルニ當リ其ノ積載物中危險ト認ムルモノアルトキハ之ヲ卸サシムルコトアルヘシ
- 第八條 凡テ艦船ハ鎮守府司令長官ノ特許アルモノ、外火藥庫ヲ距ル百三十間以内ニ進入スルコトヲ禁ス瀝燐點火中ノ小蒸氣船及其ノ他一切ノ火氣ヲ有スル船舟亦同シ
- 第九條 軍港ニ於テハ禮砲號報及鎮守府司令長官ノ特許ヲ得タルモノ、外銃砲及水雷ノ發射其ノ他一切ノ爆發物ヲ發火スルコトヲ禁ス
- 陸上ニ於ケル公私ノ家屋ヲ距ルコト七十五間以内ノ海上ニ於テハ禮砲號報ノ類ト雖一切銃砲ノ發放ヲ爲スコトヲ禁ス
- 第十條 第一區ニ於テハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スルコトヲ禁ス艦船ニ於テ遺棄物アリテ其ノ用ニ供スル舢舨ヲ要スルトキハ之ヲ知港事ニ請求スヘシ但第二區ト雖有害ト認ムル場所ニ

明治三十年六月二十六日海軍令第十一號ヲ以テ第七條第八條及第九條改正

ハ以上ノ物品等ヲ遺棄スルコトヲ禁シ臨時其ノ場所ヲ指示スルコトアルヘシ

- 第十一條 第一區内ノ海岸及同區内ニ注入スル河流ニハ物品灰燼砂石塵芥等ヲ遺棄スヘカラス
- 第十二條 第一區ニ於テハ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ漁業ヲ爲スヘカラス
- 第十三條 傳染病者アル船舶ハ第一區内ニ進入スルコトヲ禁ス
- 第十四條 軍港内ニ於テ左ニ掲グル工事ヲ起シ又ハ營業ヲ爲サントスル者アルトキハ地方長官ハ鎮守府司令長官ニ協議シ許否スヘシ
 - 一 棧橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事
 - 二 海面ヲ埋立海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ築造スル事
 - 三 道路溝渠ヲ開通シ又ハ橋渠ヲ架設スル事
 - 四 山岡ヲ掘鑿スル事
 - 五 森林ヲ伐採スル事
 - 六 軍港ニ發著スヘキ航海ノ營業ニ關スル事
 - 七 浮標又ハ立標ヲ設置スル事
- 第十五條 鎮守府司令長官ノ承認ヲ得スシテ軍港内ノ測量攝影製圖ヲ爲シ又ハ地埋案内等ノ圖書ヲ出版スルコトヲ禁ス
- 第十六條 地方長官ハ軍港内衛生ノ事ニ關シテハ地方吏員ヲシテ鎮守府軍醫長ニ協議セシムヘシ
- 第十七條 鎮守府司令長官ハ海軍官廳構内其ノ他軍港取締上必要ノ場所ニハ人民ノ通行ニ制限ヲ置クコトヲ得
- 第十八條 軍港内ノ取締ニ關スル細則ハ鎮守府司令長官之ヲ定ム

(別圖省略)

○舞鶴軍港規則 明治三十年七月十七日
海軍省令第十四號

舞鶴軍港規則左ノ通定ム

舞鶴軍港規則

- 第一條 舞鶴軍港ノ海面ヲ三區ニ分チ別圖朱一線以內ヲ第一區ト稱シ第一區以外朱二線以內ヲ第二區ト稱シ第一區第二區以外ヲ總テ第三區ト稱ス
- 第二條 檜松鼻ト横波ノ鼻トヲ連ヌル朱二線以南舞鶴町ニ至ル海面ハ第三區トス
- 第三條 軍港ニ入ラントスル艦船ハ軍港外三海里以內ノ所ヨリ投錨若クハ緊止スル地點マテ萬國信號旗ヲ以テ信號符字ニ依リ各自ノ艦船名ヲ表示スヘシ
- 第四條 第三區ニ於テハ航路ノ妨トナラサル限リハ艦船自由ニ碇泊スルコトヲ得
- 第五條 第一區ハ排水噸數十五噸以下ノ帝國海軍所屬舟艇ノ外鎮守府司令長官ノ許可ナクシテ進入スルコトヲ禁ス
- 第六條 鎮守府司令長官ハ必要ナル場合ニハ在港艦船ニ錨地ノ變換若クハ港外へ退去ヲ命スルコトアルヘシ
- 第七條 鎮守府司令長官ハ艦船第一區内ニ入ラントスルニ當リ其ノ積載物中危險ト認ムルモノアルトキハ之ヲ卸サシムルコトアルヘシ

第八條

凡テ艦船ハ鎮守府司令長官ノ特許アルモノ、外火藥庫ヲ距ル百三十間以內ニ進入スルコトヲ禁ス

瀛瀛點火中ノ小蒸氣船及其ノ他一切ノ火氣ヲ有スル船亦同シ

第九條

軍港ニ於テハ禮砲號報及鎮守府司令長官ノ特許ヲ得タルモノ、外銃砲及水雷ノ發射其ノ他一切ノ爆發物ヲ發火スルコトヲ禁ス

陸上ニ於ケル公私ノ家屋ヲ距ルコト七十五間以內ノ海上ニ於テハ禮砲號報ノ類ト雖一切銃砲ノ發放ヲ爲スコトヲ禁ス

第十條

博奕場ト金崎トヲ連ヌル朱二線以內ノ海面及之ニ注入スル水流ニハ一切ノ浮流物並ニ沈澱物ヲ遺棄スルコトヲ禁ス

艦船ノ遺棄物ハ知港事ヨリ出ス所ノ塵棄船ニ移スカ若クハ各自ニ處分スヘシ

第十一條

第一區ニ於テハ鎮守府司令長官ノ特許アルトキノ外一般人民ノ漁業ヲ禁ス

第十二條

現ニ傳染病アルカ若クハ傳染病發生シテ未タ消毒ヲ終ラサル艦船ハ第二區以內ニ入ルコトヲ禁ス

第十三條

軍港ニ於テ左ニ掲グル工事ヲ起シ又ハ營業ヲ願出ル者アルトキハ地方長官ハ鎮守府司令長官ニ協議シ許否スヘシ

- 一 棧橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事
- 二 海面ヲ埋立、海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ築造スル事
- 三 道路溝渠ヲ開通シ又ハ橋梁ヲ架設スル事
- 四 山岡ヲ掘鑿スル事
- 五 森林ヲ伐採スル事

六 軍港ニ發着スヘキ航海ノ營業ニ關スル事
七 浮標又ハ立標ヲ設置スル事

第十四條 鎮守府司令長官ノ承認ヲ得シテ軍港内ノ測量撮影及製圖ヲ爲シ又ハ地理及水路案内等ノ圖書ヲ出版若クハ作述スルコトヲ禁ス

第十五條 地方長官ハ軍港内衛生ノ事ニ關シテハ鎮守府司令長官ニ協議スヘシ

第十六條 鎮守府司令長官ハ海軍用地内及之ニ接近スル一般公路ノ取締上必要ノ場合ニハ地方長官ニ協議シ一般人民ノ通行ニ制限ヲ置クコトヲ得

第十七條 軍港ノ取締ニ關スル細則ハ鎮守府司令長官之ヲ定ム
附則

第十八條 舞鶴鎮守府開港ニ至ルマテ此ノ規則中鎮守府司令長官ノ職務ハ臨時海軍建築部長、知港事ノ職務ハ臨時海軍建築部支部長之ヲ行フ

臨時海軍建築部長ハ此ノ規則ニ關シ其ノ職務ノ一部ヲ臨時海軍建築部支部長ニ委任シ行ハシムルコトアルヘシ

第十九條 舞鶴鎮守府開港ニ至ルマテ此ノ規則ニ關スル事務ハ總テ臨時海軍建築部支部ニ於テ取扱フ
(別圖省略)

○竹敷要港規則 明治二十九年八月八日
海軍省令第十三號

竹敷要港規則左ノ通定ム
竹敷要港規則
第一條 竹敷要港ノ海面ヲ二區ニ分チ別圖朱線以内ヲ第一區ト稱シ朱線以外ヲ第二區ト稱ス其

ノ日本海ニ面スル方面ノ海面ハ第二區トス

第二條 要港ニ入ラントスル艦船ハ要港外三海里以外ノ所ヨリ投錨若クハ繫止スル地點マテ萬國信號旗ヲ以テ信號符字ニ依リ各自ノ艦船名ヲ表示スヘシ

第三條 第二區ニ在リテハ航路ノ妨ケトナラサル限りハ艦船自由ニ碇泊スルコトヲ得

第一區ニ在リテハ艦船ノ進退ハ知港事ノ指示ニ從フヘシ但天災等ノ事故ニ依リ危急ノ場合ニハ此限ニアラス

第四條甲 要港部司令官ハ必要ナル場合ニハ在港艦船ニ錨地ノ變換若クハ港外へ退去ヲ命スルコトアルヘシ

第四條乙 要港部司令官ハ艦船海軍用地ヲ距ル五百間以内ニ入ラントスルニ當リ其ノ積載物中危險ト認ムルモノアルトキハ之ヲ卸サシムルコトアルヘシ

第五條 凡テ艦船ハ要港部司令官ノ特別ノ許可アルモノ、外火藥庫ヲ距ル百三十間以内ニ進入スルコトヲ禁ス汽鐘點火中ノ小蒸氣船及其ノ他一切ノ火氣ヲ有スル船舶亦同シ

第六條 要港ニ於テハ禮砲號報及要港部司令官ノ特許ヲ得タルモノ、外銃砲及水雷ノ發射其ノ他一切ノ爆發物ヲ發火スルコトヲ禁ス

陸上ニ於ケル公私ノ家屋ヲ距ルコト七十五間以内ノ海上ニ於テハ禮砲號報ノ類ト雖一切銃砲ノ發射ヲ爲スコトヲ禁ス

第七條 第一區ノ海面及之ニ注入スル水流ニハ一切ノ浮流物並ニ沈澱物ヲ遺棄スルコトヲ禁ス
艦船ノ遺棄物ハ知港事ヨリ出ス所ノ塵棄船ニ移スカ若クハ各自ニ處分スヘシ

明治三十年海軍省令第十二號ヲ以テ第四條乙ヲ追加

明治三十年海軍省令第十二號ヲ以テ第六條第二項追加

第八條 海軍用地ヲ距ル五百間以内ノ海面ニ在リテハ要港部司令官ノ特許アル時ノ外一般人民ノ漁業ヲ禁ス

第九條 現ニ傳染病者アルカ若クハ傳染病發生シテ未タ消毒ヲ終ラサル艦船ハ要港ニ入ルコトヲ禁ス

第十條 要港ニ於テ左ニ掲グル工事ヲ起シ又ハ營業ヲ願出ル者アル時地方長官ハ要港部司令官ニ協議シ許否スヘシ

一 棧橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事

二 海面ヲ埋立海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ築造スル事

三 道路溝渠ヲ開通シ又ハ橋梁ヲ架設スル事

四 山岡ヲ掘鑿スル事

五 森林ヲ伐採スル事

六 要港ニ發着スルヘキ航海ノ營業ニ關スル事

七 浮標又ハ立標ヲ設置スル事

第十一條 要港部司令官ノ承認ヲ得スシテ要港内ノ測量撮影及製圖ヲ爲シ又ハ地理及水路案内等ノ圖書ヲ出版スルコトヲ禁ス

第十二條 地方長官ハ要港内衛生ノコトニ關シテハ要港部司令官ニ協議スヘシ

第十三條 要港部司令官ハ海軍用地内及之ニ接近スル一般公路ノ取締上必要ノ場合ニハ地方長官ニ協議シ一般人民ノ通行ニ制限ヲ置クコトヲ得

第十四條 要港ノ取締ニ關スル細則ハ要港部司令官之ヲ定ム
(別圖省略)

○登記印紙ヲ以テ手数料ヲ納ムルノ件 明治二十四年十二月十六日 勅令第二百四十五號

朕登記印紙ヲ以テ手数料ヲ納ムル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

政府ニ納ムヘキ手数料ハ其金額ニ相當スル登記印紙ヲ以テ納メシムルヲ得但其種目ハ主務大臣之ヲ定ム

本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○登記印紙ヲ以テ手数料ヲ納ムルトキ其貼用方ノ件 明治二十五年三月十八日 逓信省令第五號

明治二十四年十二月 勅令第二百四十五號ニ依リ登記印紙ヲ以テ手数料ヲ納ムル片ハ其金額ニ相當スル印紙ヲ願書其他ノ書類ニ貼用シ署名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ書面ト印紙ノ彩紋トニ掛ケ消印スヘシ

○登記印紙ヲ以テ納ムヘキ手数料種目ノ件 明治二十六年十一月十日 逓信省令第廿一號

明治二十五年三月逓信省令第六號登記印紙ヲ以テ納ムヘキ手数料種目左ノ通改定ス

一 海員試験手数料

一 海技免狀手数料

一 水先免狀手数料

一 船舶検査證書手数料 別種旅客室検査證書ヲモ包含ス

一 回航認可證書手数料 明治三十年六月十九日逓信省令第十三號ヲ以テ本項追加

一 船燈信號器及救命具製造人及同上外國製品販賣人ノ免許手数料並免許證書書替手数料 二十八年四月廿七日逓信省令第五號ヲ以テ本項追加

○審判書類正本、謄本及抄本下付手数料ノ件 明治三十年七月五日 逓信省公達第四百二十八號

高等海員審判所 地方海員審判所

被審人ニ於テ陳述書ノ謄本又ハ裁決書ノ正本、謄本若ハ抄本ヲ求メタルトキハ一枚ニ付金參錢ノ手數料ヲ納メシムヘシ

前項ノ手數料ハ正本、謄本若ハ抄本ノ領收書ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シテ納メシムヘシ

○商船學校規則明治二十九年四月十日
逓信省告示第七十五號
當省所轄商船學校規則左ノ通改正シ本年四月十日ヨリ施行ス

商船學校規則

第一章 總則

第一條 本校ハ航海、機關ニ關スル學術技藝ヲ教授シ高等ノ船舶職員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

第二條 本校修學年限ハ航海科ヲ五箇年五箇月トシ機關科ヲ五箇年トス

第三條 本校學生ハ在學中竝ニ卒業後トモ海軍士官ノ豫備員トシテ兵籍ニ編入セラレ海軍一定ノ規則ニ據リ服役スルモノトス

第四條 大阪及函館ニ分校ヲ置ク其規則ハ別ニ定ムル所ニ據ル

第二章 學科、學級、課程及休業

第五條 本校ニ航海科及機關科ヲ置ク

第六條 航海科ノ學級及課程ハ左ノ如シ

第五級

航海術

運用術

法律

技業

商業地理

第四級

理財

數學

外國語

和漢文

兵式體操

航海術

運用術

測量術

法律

技業

商業地理

理財

數學

外國語

和漢文

兵式體操

第三級

航海術

運用術

海上氣象學

法律

造船學

技業

機關術大意

船內衛生法

外國語

兵式體操

第二級

航海術

運用術

海上氣象學

法律

造船學

技業

機關術大意

救急醫術

外國語

兵式體操

第一級

航海實習

航海術、運用術、測量術、海上氣象學、法律、造船學、技業ヲ以テ本科トシ其他ヲ補科トス

第五級乃至第二級ハ校舍ニ在テ每級六箇月第一級ハ航海船ニ在テ滿三箇年ヲ以テ之ヲ修了セシメ別ニ本科トシテ砲術ノ一科ヲ置キ海軍砲術練習所ニ於テ五箇月間ニ之ヲ修了セシム

第七條 機關科ノ學級及課程ハ左ノ如シ

第五級

機關術

機關算法

機械學

製圖

技業

物理化學

理財

數學

外國語

和漢文

兵式體操

第四級

機關術	機關算法	機械學	製圖	技業
船内衛生法	物理化學	理財	數學	外國語
和漢文	兵式體操			
第三級				
機關術	機關算法	機械學	製圖	技業
救急醫術	物理化學	數學	外國語	兵式體操
第二級				
工術實習				
第一級				
機關運轉實習				

機關術、機關算法、機械學、製圖、技業ヲ以テ本科トシ其他ヲ補科トス
 第五級乃至第三級ハ校舍ニ在テ每級六箇月第二級ハ機關工場ニ在テ滿二箇年六箇月第一級ハ
 漁船ニ在テ滿一箇年ヲ以テ之ヲ修了セシム

第八條 休業日ハ左ノ如シ

日曜日

大祭日祝日

夏期休業 自七月十一日至九月十日

冬期休業 自十二月二十五日至翌年一月七日

第三章 試験

第九條 試験ハ臨時試験、進級試験、卒業試験ノ三種トス

第十條 臨時試験ハ現修ノ學科ニ就キ隨時之ヲ施行シ其評點ニ依リ進級試験ノ得點ヲ増減スル
 モノトス

第十一條 進級試験ハ每級ノ課程ヲ終リタル後之ヲ施行シ其合格者ニハ進級證書ヲ授與ス

第十二條 卒業試験ハ第一級ノ課程ヲ卒リタル後本科ニ就キ之ヲ施行シ其合格者ニハ卒業證書
 ヲ授與スルモノトス

第十三條 砲術ノ試験ハ海軍砲術練習所ニ於テ之ヲ施行シ其合格者ニハ及第證書ヲ授與シ前條
 卒業試験ニ方リ再施セサルモノトス

第十四條 各科目ノ全點評點及罰點ハ別ニ定ムル所ニ據ル

第十五條 進級試験及卒業試験ノ及第點ハ每課目ノ得點本科ハ全點ノ十分ノ六以上補科ハ十分
 ノ四以上ニシテ各課目ノ得點合計ニ評點若クハ罰點ヲ増減シ其點數全點合計ノ十分ノ六以上
 ニ當ルモノトス

第十六條 進級試験ニ落第セシ者ハ原級ニ止ム

第十七條 卒業試験ニ落第セシ者ハ三箇月以内復習ヲ命シ再試験ヲ施行ス

第十八條 平素品行端正ニシテ試験ノ成績優俊ナルカ又ハ超衆勉勵ノ者ニハ褒賞ヲ授與ス

第十九條 臨時試験及學期試験ノ成績優俊ニシテ品行端正ナル者ニハ選拔ノ上外國留學ヲ命ス
 ルコトアルヘシ

第四章 入學

第二十條 入學期ハ毎年十二月及七月ノ二回トス

第二十一條 左項ノ一ニ該ル者ハ入學ヲ許サス
 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者

二 家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者
三 身代限りノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第二十二條 入學ヲ許スヘキ者ハ左項ニ適合シ體格検査及學科試験ニ合格シタル者ニ限ル
一 年齢十五年以上二十一年以下ノ者

二 品行端正ナル者

三 在學中家事ニ係累ナキ者

第二十三條 試験學科ハ左ノ如シ

- 一 數學
- 二 英語
- 三 和漢文
- 四 物理
- 五 地理
- 六 歴史

第二十四條 官立又ハ公立尋常中學校卒業者ニシテ該校ノ品行端正學力優等ト證明シタル者ハ相當ノ人員ヲ限り本校ニ於テ定メタル無試験入學許可規程ニ據リ初級ニ入學ヲ許可スヘシ但本校ニ於テ允當ト認メタル私立尋常中學校若クハ之ト同等以上ノ科程ヲ具備スル私立學校ノ卒業者ハ均シク無試験入學許可規程ニ據リ入學ヲ出願スルコトヲ得

第二十五條 體格検査ハ本校幹事及海軍尉官臨席シ海軍軍醫之ヲ行フ

第二十六條 體格検査合格ノ者ニアラサレハ學科試験ヲ行フコトナシ

第二十七條 學科試験ハ海軍尉官臨席シ本校教官之ヲ行フ

第二十八條 入學志願者ハ入學願書(甲號書式)身分證書(乙號書式)及學業履歷書(丙號書式)ヲ差出スヘシ

第二十九條 入學ノ許可ヲ得タル自費學生ハ丁號書式貸費學生ハ戊號書式ノ證書ヲ差出スヘシ

第三十條 入學願書ニ要スル保證人三名ノ内一名ハ本人ノ父兄若クハ近親ニシテ一家ヲ爲ス者
二名ハ東京市内ニ居住シ公民權ヲ有スル者ニ限ル

第三十一條 保證人死亡スルカ又ハ其資格ヲ失フカ若クハ保證人タルノ責任ヲ解クトキハ新ニ保證人ヲ定メ其在籍市區町村長ノ資格ヲ證明シタル保證書ヲ三週間以内ニ差出スヘシ

第三十二條 保證人事故アリテ一時其居住地ヲ離ル、トキハ代理人ヲ定メ届出ツヘシ

第三十三條 學生及保證人ニシテ改姓名轉籍轉居又ハ改印スルトキハ在籍市區町村長ノ證明シタル届書ヲ差出スヘシ

第五章 退校

第三十四條 凡學生ハ退校ヲ出願スルヲ許サス

第三十五條 學生ニシテ左項ノ一ニ該ル者ハ直ニ退校ヲ命ス

- 一 校長幹事教官學生監等ノ命令訓誨ニ悖戻スル者
- 二 品行不良或ハ怠惰ニシテ成業ノ目途ナキ者
- 三 第四章ノ二十一條中ノ事故ヲ生シタル者
- 四 卒業試験若クハ進級試験ニ於テ引續キ落第二回ニ及ブ者
- 五 傷疾疾病ニ罹リ成業ノ目途ナキ者

第六章 學費

第三十六條 自費學生ハ都テ在學中ノ費用ヲ自辨スル者貸費學生ハ給與規定ニ據リ本校ヨリ其費用ヲ貸與スル者トス

第三十七條 學生ノ費用ハ本校一定ノ被服食料其他ニ供スル爲メ一箇月凡金八圓トス但實習中食料又ハ報酬金ヲ其船舶若クハ機關工場等ヨリ支給スルトキハ本條ノ費用ヲ減額スルコトア

ルヘシ
 第三十八條 貸費學生ニシテ進級試験ニ落第スル者又ハ疾病事故ノ爲メ原級ニ止マル者ハ其期間ノ費用ヲ自辨セシム
 第三十九條 貸費學生ニシテ品行端正學業優俊ナル者ニハ其貸與金額中幾分ノ還納ヲ免除スルコトアルヘシ
 第四十條 自費學生ニシテ品行端正學業優俊ナル者ニハ其出願ニ依リ貸費學生ニ引直スコトアルヘシ
 第四十一條 貸費學生ニシテ品行端正ナラス又ハ學業ノ成績不良ナル者ハ自費學生ニ引直スヘシ
 第四十二條 第三十五條ニ據リ退校ヲ命シタル貸費學生ノ貸與金ハ本校ノ指定ニ從ヒ本人又ハ保證人ヨリ之ヲ完納セシム
 第四十三條 貸費學生ニシテ在學中又ハ卒業ノ後死亡スル者若クハ業務ノ爲メ癡疾不具トナリタル者ニハ僉議ノ上貸與金ノ還納ヲ免除スルコトアルヘシ
 第四十四條 貸費學生卒業後貸與金ノ還納ヲ畢ル迄ハ本校指定ノ業務ニ從事シ其受ル給料月額十分ノ一以上ノ金額ヲ以テ毎月貸與金ヲ還納スルノ義務アル者トス本人若シ之ヲ怠ルトキハ保證人ヲシテ辨償セシム
 第四十五條 貸費學生ニシテ本校指定ノ業務ニ從事セサルトキハ本校ノ指定ニ從ヒ本人若クハ保證人ヨリ直チニ貸與金ヲ完納セシム
 甲號

入學願書 用紙美濃紙

印紙貼用
 拙者儀(自費、貸費)ヲ以テ(航海、機關)科修業志願ニ付御試験ノ上入學御許可被成下度入學ノ上ハ御校規ヲ遵守スヘキハ勿論暫テ海軍豫備員ニ服役可仕候將々拙者ニ關スル職ハ何事ニ限ラヌ身元保證人ニ於テ引受ケ可申候依テ保證人連署ヲ以テ此段相願候也

年月日

何年何月生

原籍總府縣(國郡市區町村)番地
 華士族平民某子弟
 現住地總府縣(國郡市區町村)番地
 本人 何 某印

原籍總府縣(國郡市區町村)番地
 華士族平民
 現住地總府縣(國郡市區町村)番地
 右何某父兄或ハ何々
 保證人 何 某印

原籍總府縣(國郡市區町村)番地
 華士族平民
 東京市區町番地
 保證人 何 某印

同
 同
 同
 保證人 何 某印

商船學校長何某殿

前掛保證人何某ハ右肩書ノ地ニ本籍ヲ有シ且一家ヲ成ス者ニ相違無之此段證明候也
 總府縣(國郡市區町村)長 何 某印

前件保證人何某ハ右所管ノ地ニ居住シ公民權ヲ有スル者ニ相違無之此段證明候也

同文

東京市區長

何 某印

乙號

身分證書 用紙美濃紙

同

縣府縣(國郡市區町村)番地
華士族平民某子弟

何 某

一出生ノ地名及其年月日

一現存父母兄弟姉妹ノ姓名(養子ハ養實共ニ記載スヘシ)

一現住地名

一職業

一賃

一商船學校規則第四章第二十一條ニ關ルモトナシ
右之通候也

年月日

右

何 某印

右之通相違無之此段證明候也

縣府縣(國郡市區町村)長

(本人ハ籍地ノ市區町村)長ニ限ル

何 某印

丙號

學業履歷書 用紙美濃紙

縣府縣華士族平民某子弟

何 某印

何 某

何年何月生

一實地(航海、機關)ノ業ニ從事ノ有無

一諸學校免狀所有ノ有無

一數學(何年何月ヨリ何年何月迄)幾年間(官、公、私)立何學校ニ於テ某ニ就テ何々ヲ學ブ

一英語 同上

一和漢文 同上

右之通相違無之候也

年月日

右

何 某印

商船學校長何某殿

丁號

自費學生證書 用紙美濃紙

印紙貼用

今般自費ヲ以テ入學御許可相成候ニ就テハ在學中陸費用金ノ額ハ御規則及御命令ニ遵ヒ卒業ニ至マテ都テ自辨可任候儀テ
保證人連署ノ上證書差出候也

原籍縣府縣(國郡市區町村)番地

華士族平民某子弟

現住地縣府縣(國郡市區町村)番地

本人 何 某印

何年何月生

原籍縣府縣(國郡市區町村)番地

華士族平民

現住地縣府縣(國郡市區町村)番地

商船學校長何某殿

前書保證人何某ハ右肩書ノ地ニ本籍ヲ有シ且一家ヲ成ス者ニ相違無之此段證明候也

前書保證人何某ハ右肩書ノ地ニ居住シ公民權ヲ有スル者ニ相違無之此段證明候也

同文

同

同

戊號

貸費學生證書 用紙美濃紙

印紙貼用

今般貸費ヲ以テ入學御許可相成候ニ就テハ在學中御貸與金ノ償ハ何等ノ場合ニ拘ラス都テ御規則及御指定ニ遵ヒ本人若クハ保證人ヨリ還納可仕候依テ保證人連署ノ上證書差出候也

原籍總府縣(國郡市區町村)番地 華士族平民某子弟

右何某父兄或ハ何々

保證人

何 某印

原籍總府縣(國郡市區町村)番地 華士族平民

保證人

何 某印

東京市區町村番地

保證人

何 某印

同

同

保證人 何 某印

同

同

同

同

同

同

同

年月日

現住地總府縣(國郡市區町村)番地

本人

何 某印

何年何月生

原籍總府縣(國郡市區町村)番地 華士族平民

保證人

何 某印

現住地總府縣(國郡市區町村)番地 右何某父兄或ハ何々

保證人

何 某印

原籍總府縣(國郡市區町村)番地 華士族平民

保證人

何 某印

東京市區町村番地

保證人

何 某印

同

同

保證人 何 某印

同

商船學校長何某殿

前書保證人何某ハ右肩書ノ地ニ本籍ヲ有シ且一家ヲ成ス者ニ相違無之此段證明候也

前書保證人何某ハ右肩書ノ地ニ居住シ公民權ヲ有スル者ニ相違無之此段證明候也

同文

同

同

商船學校分校規則

第一章 總則

- 第一條 商船學校大阪分校及ヒ函館分校ハ商船ニ從事スヘキ海員ヲ養成スル所トス
- 第二條 教科ハ簡易科及別科トシ兩科共ニ航海學部機關學部ノ二部ニ分ツ
簡易科ハ商船ノ運轉士若クハ機關士タラント欲スル者ニ速成ヲ主トシ簡易ノ學術ヲ授ケルモ
ノトス
別科ハ從來海員ニシテ商船々長運轉士若クハ機關士ノ試驗ヲ受ケント欲スル者ニ適切ナル學
術ヲ授ケルモノトス
- 第三條 簡易科修業年限ハ航海學部ヲ四年機關學部ヲ五年トス
別科ハ修業年限ヲ定メス學術完修ノ後船舶司檢所ニ於テ技術試驗ニ及第シタル時ヲ以テ卒業
トス
- 第四條 生徒ハ總テ通學セシム
但簡易科生徒ニシテ席上學科ヲ卒リタル者ハ船舶或ハ工場ニ派遣ス
- 第五條 生徒ノ學費ハ一切自辨トス
- 第六條 入學志願者ハ簡易科ハ甲乙號別科ハ丙丁號書式ノ入學願書及學業履歷書ヲ分校ニ差出
スヘシ
- 第七條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ簡易科ハ戊號別科ハ己號書式ノ在學證書ヲ分校ニ差出スヘ
シ
- 第八條 簡易科生徒ノ保證人ハ二名トシ分校所在ノ市區内ニ居住シ地所又ハ家屋ヲ所有スルカ
或ハ公民權ヲ有スルモノタルヲ要ス

- 但シ函館分校ニ限リ分校所在ノ市區外ニ保證人ヲ置クコトヲ得此場合ニ在テハ該市區内ニ
代理者一名ヲ置キ保證人連署ヲ以テ届出ツヘシ
- 別科生徒ノ保證人ハ二名トシ分校所在ノ市區内ニ居住スル者ニ限ル
- 第九條 保證人死去若クハ前條ニ掲ケル資格ヲ失フトキハ直ニ他人ヲ以テ之ヲ代ヘ更ニ在學證
書ヲ改ムヘシ又分校所在地ニ居住スル保證人又ハ保證人代理者旅行ヲ爲サントスルトキハ代
理者ヲ定メ其旨届出ツヘシ
- 第十條 疾病又ハ已ムヲ得サル事故ニ依リ退學セント欲スル者ハ保證人連署ノ上出願スヘシ
- 第十一條 左項ノ一ニ該ル生徒ハ直ニ退校ヲ命ス
第一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルモノ
第二 屢々校則ニ違背シ若クハ懶惰ニシテ品行不良ノモノ
第三 疾病傷痍ニヨリ身體虛弱トナルカ又ハ學術劣等ニシテ成業ノ見込ナキ者
- 第四 簡易科生徒ニシテ引續キ三箇月以上缺席シタル者
- 第五 簡易科生徒ニシテ學期試驗ニ於テ引續キ三回落第シタル者
- 第十二條 冬期休業ハ十二月二十五日ヨリ翌年一月十五日迄トシ夏期休業ハ七月二十一日ヨリ
九月十五日迄トス
- 第十三條 日曜日并ニ左ニ掲ケル祭日祝日ハ休業トス
秋季皇靈祭 孝明天皇祭 神嘗祭 紀元節
天長節 春季皇靈祭 祈嘗祭 神武天皇祭

第二章 簡易科
第一款 學科

第一條 航海學部ノ課程ヲ三級ニ分チ第三級第二級ハ一箇年間左ノ科目ニ據リ席上學科ヲ授ケ
第一級ハ滿三ヶ年間船舶ニ派遣シ航海ノ實科ヲ修メシム

第二級 數學

運用術

航海術

第三級 機關學大意

運用術

航海術

第一級 航海實習

第二條 機關學部ノ課程ヲ四級ニ分チ第四級第三級ハ一ヶ年間左ノ科目ニ據リ席上學科ヲ授ケ
第二級ハ滿三ヶ年間機關製作第一級ハ滿一ヶ年間汽船ニ就テ機關運轉ノ實科ヲ修メシム

第四級 數學

物理

機關學

第三級 製圖

機關學

第二級 機關製作

第一級 汽船實習

第二款 學年

第三條 學年ヲ分テ二學期トス第一學期ハ九月十一日ヨリ翌年二月二十日迄トシ第二學期ハ二
月二十一日ヨリ七月二十日迄トス

第三款 試驗

第四條 試驗ヲ分テ臨時試驗學期試驗卒業試驗ノ三種トス

第五條 臨時試驗ハ現修ノ學科ニ就キ教官ノ見込ヲ以テ臨時之ヲ施行シ其得點ノ多寡ニヨリ學
期試驗ノ得點ニ増減ヲ與フルモノトス

第六條 學期試驗ハ每學期末ニ施行シ及第者ニハ進級證書ヲ授與ス

第七條 卒業試驗ハ全科完修ノ後ニ於テ施行シ及第者ニハ全科卒業證書ヲ授與ス

第八條 卒業試驗及學期試驗ニ於テハ其得點ノ數航海運用機關(航海學部課程中ノ機關學大意
ヲ除ク)ノ三科ニ於テ全點ノ五分ノ三其他ノ學科ニ於テ三分一以上ニ至ルヲ及第トス

第九條 學期試驗ニ落第シタル者ハ再試驗ヲ施行シ再試驗ニ落第シタル者ハ原級ニ止メ次學期
迄復習セシム卒業試驗ニ落第シタル者ハ若干月間復習セシメ再試驗ヲ行フ

第四款 入學

第十條 入學ヲ許スヘキ者ハ左ノ四項ニ適合シ且體格檢查ニ合格シタル者ニ限ル

第一 年齡ハ十四年以上二十一年以下ノ者

第二 品行方正ニシテ本規則ニ定メタル身元保證人アル者

第三 在學中家事ニ係累ナキモノ

第四 高等小學科卒業者若シクハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者

第三章 別科

第一款 學科

第一條 別科ノ課程ハ左ノ如シ

航海學部

讀書

作文

數學

運用術

航海術

機關學部

讀書

作文

數學

機關學

第二款 入學

第二條 別科ニ入學ヲ許スヘキ者ハ左ノ二項ニ適合シ且從來ノ海員ニシテ技術免狀ヲ有スルカ
又ハ相當ノ經歷アルモノニシテ分校ニ於テ定メタル普通學科試驗ニ及第シタル者ニ限ル

第一 體格強壯品行方正ナル者

第二 本規則ニ定メタル身元保證人アル者

第三條 別科入學志願者ニシテ技術免狀ヲ所持スル者ハ出願ノ際之ヲ添付スヘシ
 第四條 別科入學ハ時期ヲ定メテ授業上ノ都合ニヨリ人員ヲ限リ之ヲ許可ス
 甲號入學願書式 (用紙美濃紙)
 私義簡易科航海、機關學修業志願ニ付御試驗ノ上入學御許可被成下度別紙履歷書相添へ此段相願候也

年月日
 族籍
 現住所
 何 某 ㊦
 何年何月日生

乙號書式

商船學校長某殿
 (用紙美濃紙)
 學業履歷書

族籍
 何 某
 何年何月日生
 一何年何月ヨリ何年何月迄何學校若クハ何某ニ就キ何學修業ス
 一何年何月何學校ニ於テ何學卒業ス
 一航海船若クハ鐵工場等ニ從事ノ有無
 右之通相違無之候也

右

年月日

商船學校長某殿

(丙號入學願書式) (用紙美濃紙)

私義別科(航海、機關)學修業志願ニ付入學御許可被成下度別紙履歷書相添へ此段相願候也

年月日
 族籍
 現住所
 何 某 ㊦
 何年何月日生

商船學校長某殿

(丁號書式) (用紙美濃紙)

履歷書

族籍
 何 某
 何年何月日生
 一何年何月幾日ヨリ何年何月幾日迄(汽、帆)船何丸ニ乘込ミ何々ノ職ニ從事ス
 一何年何月幾日ヨリ何年何月幾日迄何(造船、鐵工)場ニ入業何々ノ職ニ從事ス
 一何年何月遞信省某船舶司檢所ニ於テ何試驗ニ及第ス
 右之通相違無之候也

年月日
 右
 何 某 ㊦

商船學校長某殿

(戊號在學證書式)

(用紙美濃紙)

印紙貼用

私儀今般志願ノ通入學御許可相成候ニ付テハ御校諸規定堅ク相守リ且全科卒業ニ至ル迄中途
猥リニ退學等仕間敷候依テ在學證書差入候也

族籍

現住所

本人 何

某 印
何年何月日生

商船學校長某殿

右何某今般入學御許可相成候ニ就テハ本人身上ニ關スル一切之事件ハ總テ私共引受可申依テ
保證仕候也

族籍

現住所

保證人 何

全

全

某 印

前書保證人何某者當(市區)内ニ住シ(地所家屋ヲ)有スル者ニ相違無之候也

何(市區)長 何 某 印

前書保證人何某者當(市區)内ニ住シ(地所家屋ヲ)有スル者ニ相違無之候也

何(市區)長 何 某 印

(已號在學證書式)

(用紙美濃紙)

印紙貼用

私儀今般志願ノ通御校別科へ入學御許可相成候ニ付テハ御校ノ諸規定堅ク相守リ可申ハ勿論
決シテ半途休業等仕間敷依テ在學證書差入候也

族籍

現住所

本人 何

某 印
何年何月日生

商船學校長某殿

右何某今般入學御許可相成候ニ就テハ本人身上ニ關スル一切之事件ハ總テ私共引受可申依テ
保證仕候也

族籍

現住所

保證人 何

全

某 印

○商船學校規則 (明治三十二年二月廿五日)
文部省令第十一號

三十八

商船學校規程

- 第一條 商船學校ハ甲乙ノ二種トス
土地ノ情況ニ依リ甲種商船學校ノ程度ヨリ更ニ高等ナル商船學校ヲ設置スルコトヲ得
- 第二條 甲種商船學校ノ修業年限ハ三箇年以内トス但實習ヲ課スルトキハ相當ノ期間之ヲ延長スルコトヲ得
- 第三條 甲種商船學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ每週二十七時以内トス但實習時數ハ學科ノ種類ニ依リ適宜之ヲ定ムヘシ
- 第四條 甲種商船學校ノ學科目ハ修身、讀書、作文、數學、物理、地理、外國語、圖畫、體操並ニ實業ニ關スル各學科ノ科目及實習トス但本項科目ノ外化學、法規及其他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得
- 實業ニ關スル各學科ノ科目ハ左ニ掲グル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ
- 一航海科 運用術、航海術、機關術大意、海上氣象學大意、造船學大意等
- 一機關科 機關術、機械製圖、力學、應用力學、電氣學大意等
- 第五條 甲種商船學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十四年以上學力修業年限四箇年ノ高等小學校卒業又ハ之ト同等以上トス但外國語ヲ試驗科目ニ加フルコトヲ得
- 第六條 乙種商船學校ノ修業年限ハ二箇年以内トス
- 第七條 乙種商船學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ每週二十七時以内トス但實習時數ハ學科ノ種類ニ依リ適宜之ヲ定ムヘシ
- 第八條 乙種商船學校ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、數學、體操並ニ實業ニ關スル各學科ノ科目及實習トス但本項科目ノ外他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得
- 一航海科 運用術大意、航海術大意、海上氣象學大意等
- 一機關科 機關術大意、機械製圖、物理、化學等
- 第九條 乙種商船學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十年以上學力修業年限四箇年ノ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ
- 第十條 甲種商船學校ニハ豫科ヲ附設スルコトヲ得
- 第十一條 豫科ノ修業年限ハ二箇年以内トス
- 第十二條 豫科ノ授業時數ハ每週三十時以内トス
- 第十三條 豫科ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、地理、歷史、理科、外國語、圖畫、體操トス
- 第十四條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ
- 第十五條 商船學校ニ於テ從來ノ海員ニシテ技術免狀ヲ有スル者相當ノ海上若シハ工場履歷ヲ有スル者其他海事ニ關スル學科目ヲ專修セントスル者ノ爲ニ專修科ヲ置クコトヲ得
- 第十六條 甲種商船學校ノ學科及乙種商船學校ノ學科ヲ一校內ニ併置スルコトヲ得
- 第十七條 商船學校ノ學則ハ左ノ事項ヲ規定スルコトヲ要ス
- 一 學校ノ目的
 - 二 修業年限
 - 三 授業日數

- 四 休業日
- 五 學科目及其程度
- 六 各學科目每週授業時數
- 七 入學退學ノ規程
- 八 試驗法
- 九 賞罰ノ規程
- 十 授業料規程(授業料ヲ徵收スル場合)
- 十一 寄宿舎規程(寄宿舎ヲ設ケル場合)
- 十二 前各號ノ外學校管理上必要ノ事項
- 第十八條 商船學校ニ於テハ學科目授業時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置クコトヲ要ス
- 第十九條 商船學校ニシテ校舎ヲ陸上ニ設置シタルトキハ其校地内若シハ其附近ニ於テ繋留船
船ヲ以テ校舎ニ代用スルトキハ陸上ニ於テ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場所ヲ設ケルコトヲ要ス
- 第二十條 商船學校ニ於テハ通常教室、特別教室、實習場、其他必要ノ諸室ヲ備フルコトヲ要ス
- 第二十一條 商船學校ニ於テハ相當ノ教授用及參考用圖書、器具、機械、標本、模型、實習用
端舟及諸機械體操用器具等ヲ備フルコトヲ要ス

第二十二條 本令ハ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

海事法令類聚終

定價金壹圓貳拾五錢

編纂人 直柄要人

大阪市南區難波大字西側町
百卅三番邸

編纂兼
發行人 福井種藏

大阪市西區南堀江通六丁目
六十七番邸

印刷人 矢野松之助

大阪製本印刷株式會社代表者
大阪市西區阿波座壹番町
六十番邸

發行人行、印章之無、ハノ偽版ナリ



明治三十三年三月廿一日印刷
明治三十三年三月廿九日發行

故一福原副官從二位
前大阪高等學校校長海軍
大尉長官五等男
從四位上勳章所司官
大府海員審判所審判官
地方七位勳章所司官
正七位勳章所司官

勝海舟先生題辭
中御門經隆君序文
藤井治三郎君校正
眞柄要人編纂

丙種運轉士 運用術獨學

洋装美術
定價金貳圓

本書ハ丙種運轉士ニ必要ナル羅針儀ノ解明海圖ノ應用測探具解明海上衝突豫防法等凡ソ海員ニ必須欠クベカラザル條々ヲ網羅シ圖解ニ十有葉ヲ付シ叮嚀懇切ニ解明シ尙モ平假名ヲ讀ミ得ルモノハ一讀スレハ自ラ判明ニシテ運用術ヲ獨習シ得ルコトハ編者ノ保証スル處ナリ既ニ大阪馬關長崎廣嶋等各地ノ高等海員講習所ノ教科書或ハ參考書トシテ採用セラレ候而已ナラズ帆走船体檢査ノ際檢査官ニ於テ船長ヘ參考書トシテ常ニ本書ヲ必讀スルノ注意ヲ與ヘラレ居候等海員タルモノ、重寶トマデ好評ヲ博シ既ニ第三版ハ賣切今般訂正増補相加ヘ四版仕候ニ付至急御購讀アラントナ

所 捌 賣

大賣捌所 福井商店

大阪西區堀江黒金橋南詰角

長崎市榮町

鶴野麟五郎

馬關西南部町

矢野久太郎

尾ノ道市藥師堂町

松本榮七

廣島縣豊田郡大崎中野村

森田覺平

神戸市多聞通貳丁目

岩本郁文堂

大阪市西區千代崎橋西詰西エ入

比石彦太郎

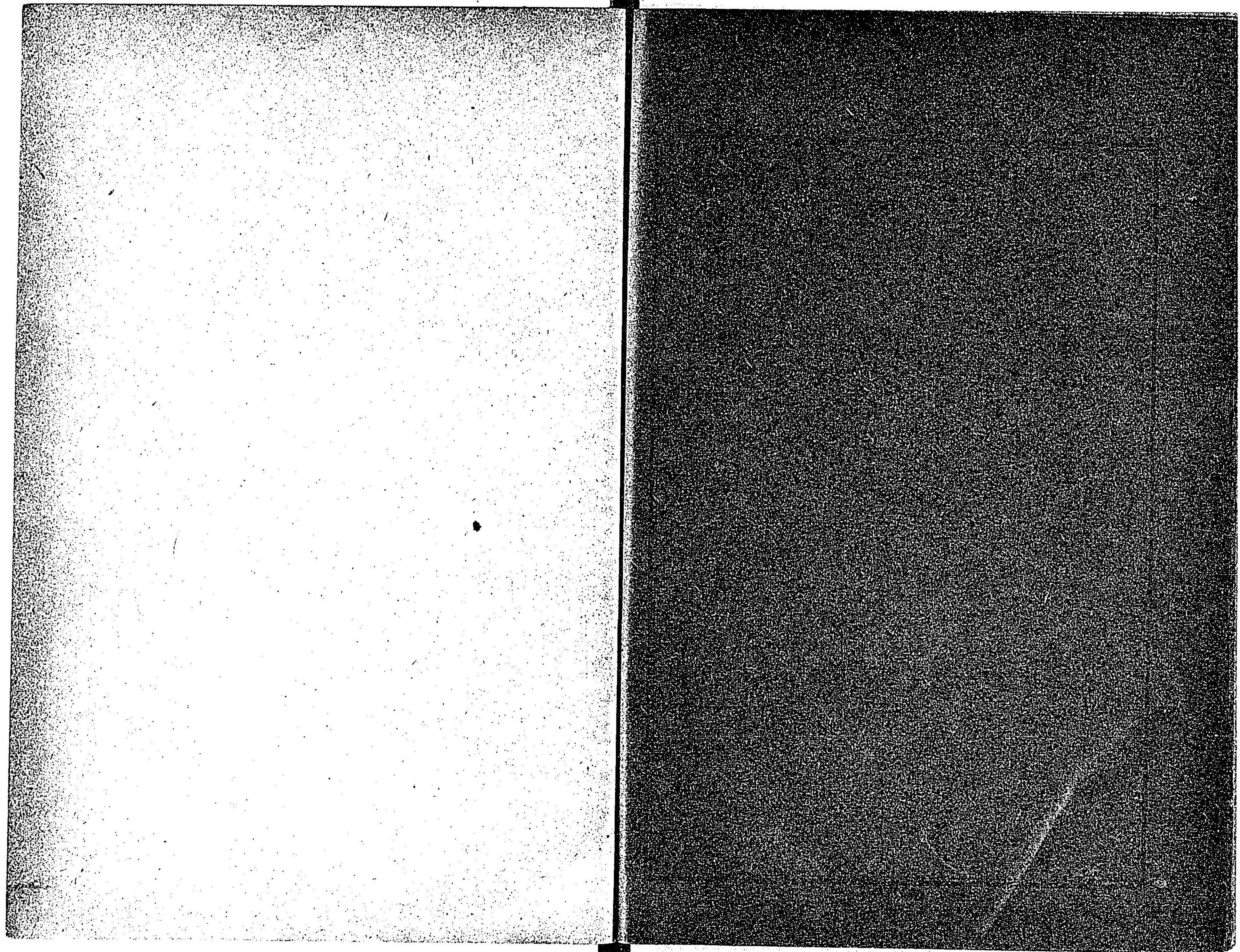
航海略日記

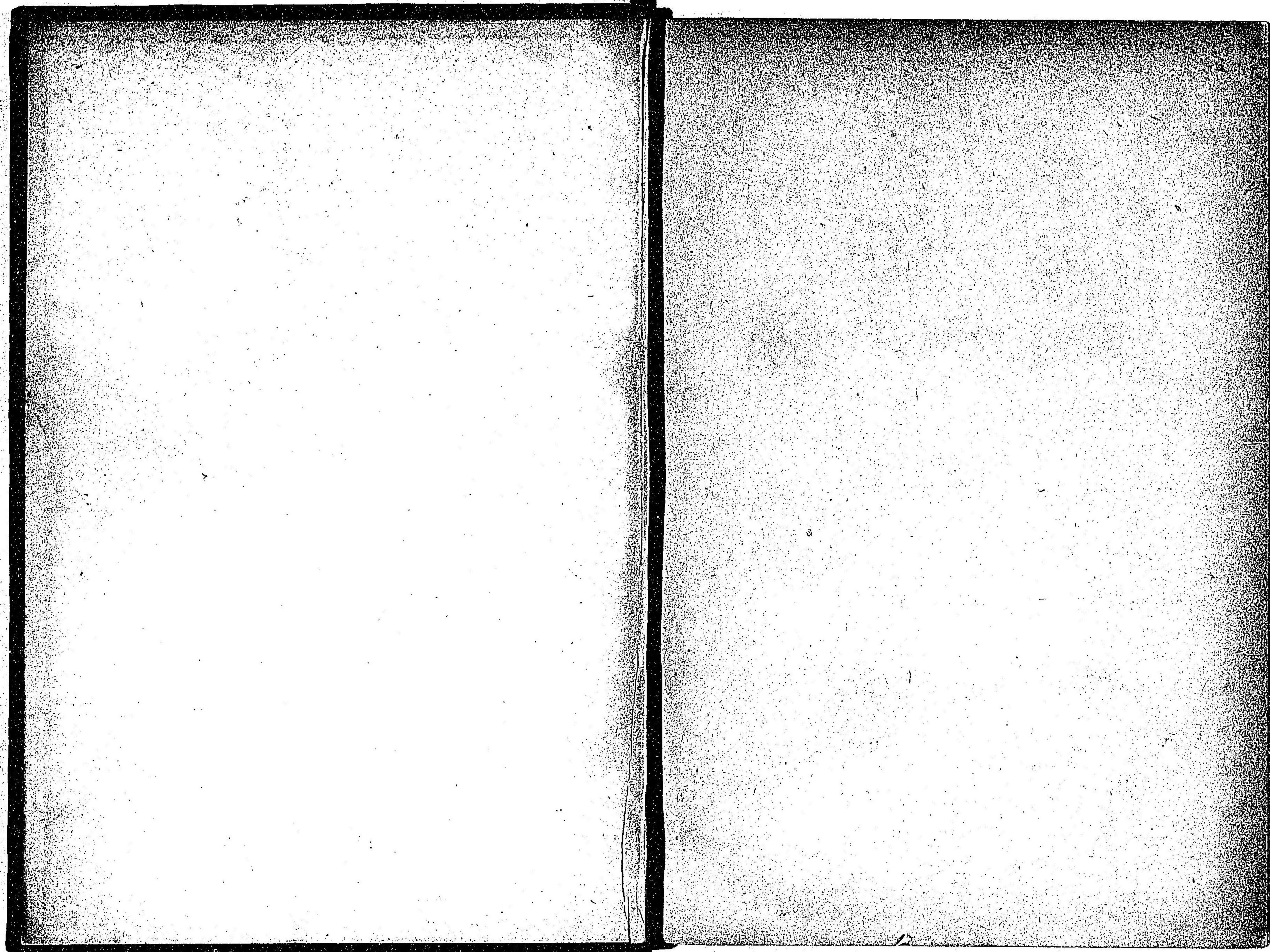
惣額 南京アウツク
定額 五拾五錢

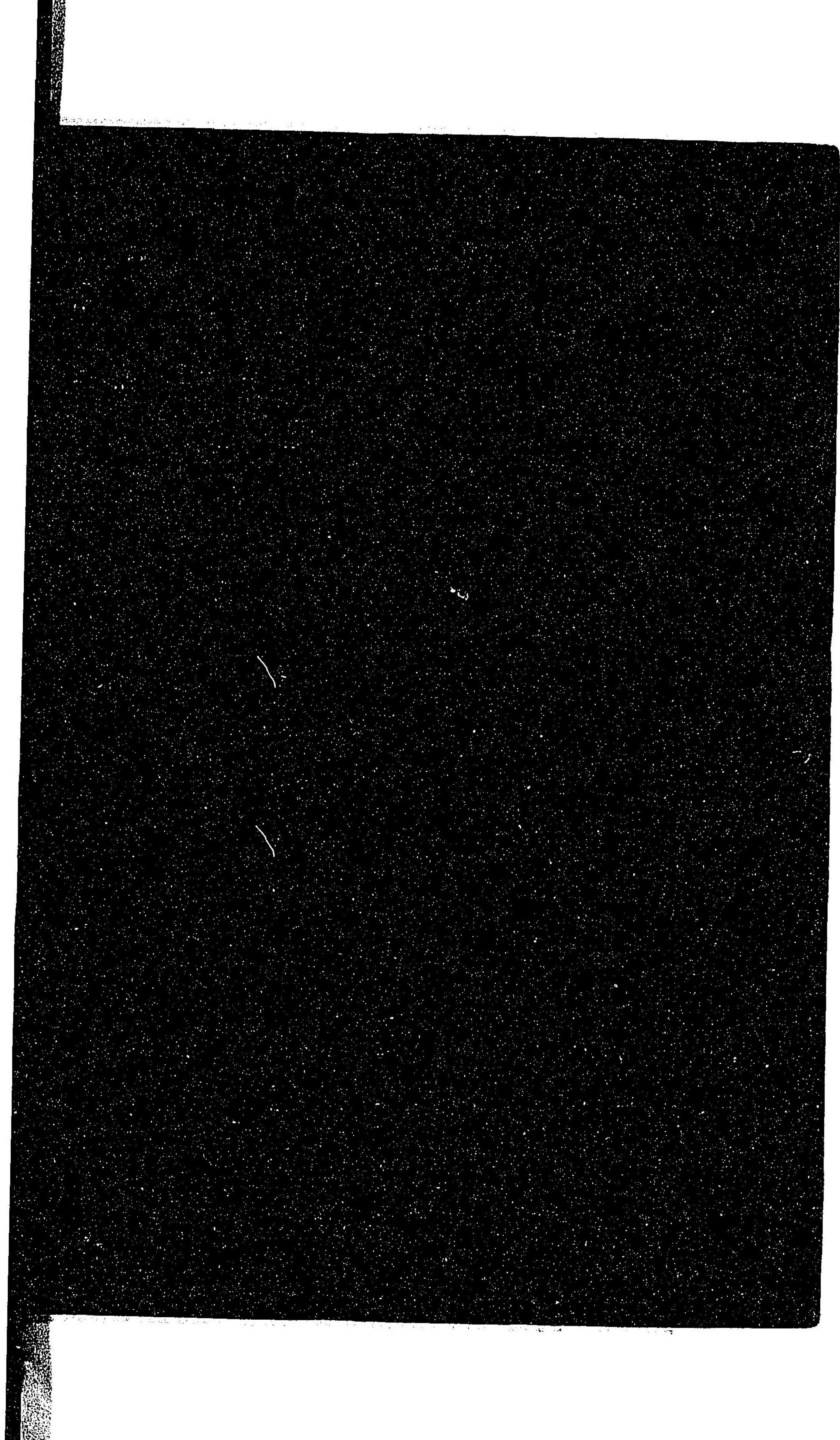
帆走儀舟ノ論ナク凡ソ一船ヲ運用スルモノハ其
船ニ關スル一切ノ出來事ヲ遺漏ナク記載シ置カ
ザルベカラザルコトハ海員諸君ノ既ニ熟知セラ
ル、處ナリ本日誌ハ第一葉ニ時辰ノ航カノ雜然ノ
方位ノ風位ノ風壓ノ自差ノ風雨針ノ寒暖ノ風力ノ天候
等ノ目ヲ設ケ下段ニハ記事ノ余白ヲ置キ第二葉
ニハ船體檢査ニ欠ベカラザク諸項ヲ記載シ附
スルニ天候風力ノ符號ヨリ總テ記入方心得等ニ
至ル迄精細ニ現示シタルモノナレバ日記記載ノ
上ニツキ割野ノ勞ヲ省キ綱目記入ノ煩ナク從來
出版スル日記ニ比シ簡便明瞭ニシテ誤脱ノ患ナ
ク事ニ觸レ時ニ隨ヒ之ヲ記入スルハ船中ノ歴
史自ラ備リ他日參考ノ便ヲ得ル等航海當業ニ取
リテ必須欠ク可カラザルモノナレバ速ニ御購求
御試用アラントナ希望ス

所 捌 賣

- 長崎市西濱町八十三番地
- 前 原 忠 貫
- 東京京橋區東湊町一丁目
- 大 村 五 左 衛 門
- 尾ノ道市土堂町
- 倉 田 庄 助
- 長崎市江戸町
- 野 田 豊 二 郎
- 大阪市東區北久太郎町四丁目
- 丸 善 書 店
- 東京市日本橋通三丁目
- 丸 善 書 店
- 横濱市辨天通二丁目
- 丸 善 書 店
- 神戸市榮町壹丁目
- 丸 善 書 店







038070-000-5

CZ-476-030

現行海事法令類聚

真柄 要人

福井 種藏 編

M32

BBY-0100

